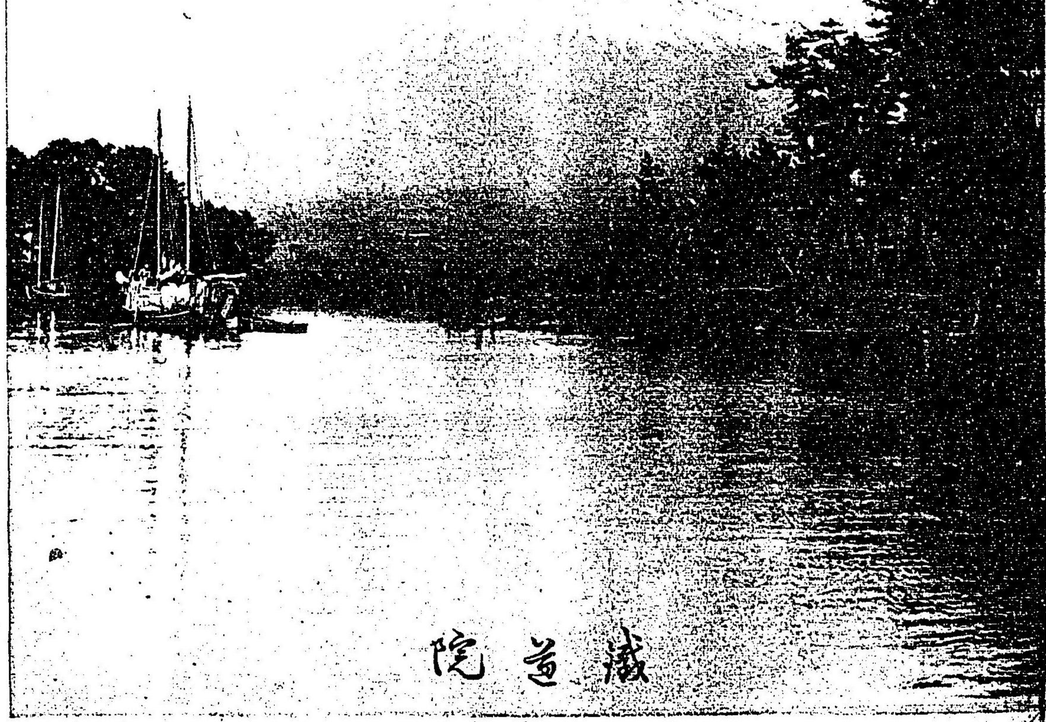
327
64

# 內業地造遊

道紹孫院之錄



旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙客をあらひすゞく助となれり。是も亦、我が徳をすゝめ、知をひろむるよすがなるべし。又いひ知らぬ靈境にゆきて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其里人にあひて、其所の風土をとひ、あるは、おくまりたる山ふところに、岩根ふみてたづね入り、もとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて歸る事を忘れぬ。あるは海べた山遠き眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもまされり。又其里におひ出でたる名産の異なる品を見て、其味をこゝろむるも、いとめづらしく心慰むわざなり。すべて勝地にあそびて、見き、せしこと、唯一時の耳目を悅ばしむるのみならず、いく年へぬれど、其時見聞せしありさま、老の後まで、をり〳〵思ひ出られて、恰も其時見聞せし思ひをなして樂しむべし。是を以て、世にめでたき事を思ひでと言ふも、うべなるかな。

（貝原益軒先生樂訓の一節）

327-69

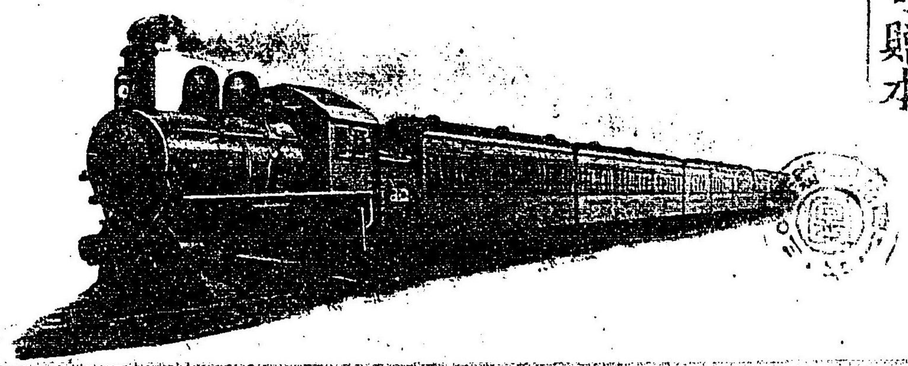
鐵道院寄贈本

# 遊覽地案内

鐵道院線沿道

## 目次


○東海道線、横須賀線、中央西線、北陸線 頁
一湘南一帶の風光 二
一函嶺獄雪 五
一東海の名區 八
一濱名湖附近 一〇
一尾濃の山水 一一
一北陸の勝 一四
一志賀の浦波 一七
○關西線、東海道線、阪鶴線、山陽線
一神都附近 一八
一奈良の旅路 二〇
一紀伊路 二三
一四の京 二五
一瀝速の勝 二九
一播磨路 三二
一備山藝水 三四
一防長の海濱 三八
○阪鶴線、山陰西線、讃岐線、德島線
一山陰の勝 三九
一南海の風光 四二
○中央東線、信越線、北越線
一多摩の里 四六
一峽中の勝 四七
一信雲邑路 四九
○信越線、日本線、岩越線、奥羽線
一碓氷の東西 五一
一下野の勝 五三
一白河關北 五五
一南山輕水 五七
一米澤以北 六〇
一秋田路 六二
一濱街道
○總武線、房總線
一兩總の勝 六三
○九州線、鹿兒島線
一筑紫路 六五
○北海道線
一北海の蒼山碧水 七三
一廻遊旅行の計畫 七九

# 湘南一帯の風光

藤澤驛

湘南一帯の風光、なんぞ人の心を引くことの多き、佳麗なる江ノ島、壯嚴なる鎌倉、明媚なる七里ヶ濱、大磯、逗子、優雅なる金澤、雄偉なる三浦三崎、諸家苦心の丹青、集めて茲處に陳列せられたるの觀あり、加ふるに源右府鎌倉に府を開きて、四海を制せしより、京鎌倉と并稱せられ、餘勢室町の末に及びて、一木一石皆歴史を呻くの感あり、うたゝ巡遊の旅行者をして、懐古の念に堪へざらしむ、

藤澤の驛に汽車を捨てゝ、まづ遊行寺に至る、時宗の本山なり、後山富士見亭は山海の眺望太だ佳、長くも聖上鑾輿を駐めて、風光を愛でさせられたることあり、側の小梨堂、判官の像及照手姫愛誓の古鏡等を藏す、鵠沼は水淺く汀遠ければ、婦女子の海水浴場としても安全なり、龍ノ口の龍口寺に至る、寺は法華經の功德によって、日蓮の難を免かれたる處、古松伽藍を護りて、上人の靈像光を放つが如し、

一路の軟沙海に至る處、一の華表を過ぐれば、給の如き島山波に浮んで、温容人を招くが如し、これ卽ち江ノ島、島の綠起に曰く「奇岩怪石の磊魂たる、異島廻穴の幽深なる、百尺の山天に挿み、三蓋の島波に載く、白雲の破る處、洞門開けて翠屏あらはれ、黑水の澄む時、潭底透て素練濾かなり」と、まことや辨天窟の奇、兒ヶ淵の怪、波濤澎湃として巖を嚙む處、老樹蒼鬱として風を起す處、風景絶佳の譬も古し、

大佛

鎌倉驛

江の島や潮風魚の新らしき　子規

江ノ島より鎌倉に至る、途に腰越の村あり、文治元年義經鎌倉に入るを許されず、書を裁して寃を訴ふ、世に所謂腰越狀にして、當時の草案今尚滿福寺に存す、池あり硯ノ池といふ、辨慶、この水を以て墨池を潤ほしたりと傳ふ、浮洲淺水悲しむが如く小波の動くを見る、寺を出づれば白沙一路の七里ヶ濱、義貞の金裝刀を投ぜし稻村ヶ崎に進り、頼朝の千鶴を放ちし由井ヶ濱に接す、この邊波濤靜にして、富士は笑み、江ノ島は招く、海水浴の樂またひとしほなり、星月夜の水に嗽ぎて長谷に至る、海光山の十一面觀世音は、大和國長谷のそれと、一木一對にして長二丈六尺、佛工春日の作として名高し、大威山の大佛は青銅の露佛、形相端麗悅樂溫和、身は自ら慈愛に抱かるゝの感あり、

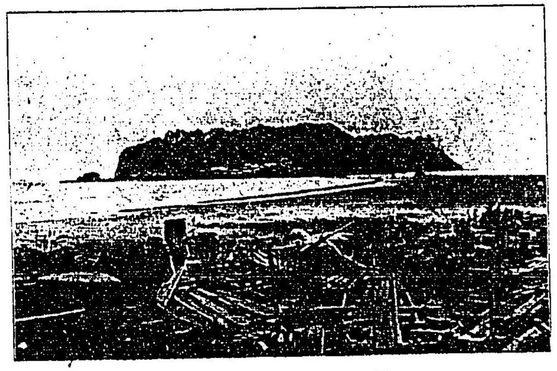
鎌倉やみほとけなれと大佛は　晶子

美男におはす夏木立かな　晶子



建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺、所謂鎌倉五山とは卽ちこれ、中にも建長寺、圓覺寺は佛光いやちこに、碧瓦相望んで小袋坂の邊にあり、境内廣く萬松靜に佛殿を護りて、楫を渡る風の音も深く心に染むを覺ゆ、壽福寺の後、蛭を穿つて四壁牡丹花を描ける畫窟あり、中に實朝及政子の塔を存す、源氏山に登れば、古覇府の形勢眼前に展開せられ、五山七谷七口十井十橋一々指點すべし、安國論寺内の岩窟は、日蓮上人の立正安國論を草せし跡、高弟日朗の筆になれる紺紙金泥の安國論一卷、寺寶として傳へらる、

鶴ヶ岡八幡宮は宇雲ノ下にあり、武家の守護神として歴代將士の歸仰篤かりしは、皆人の知る處、廻廊廊を護りて丹碧見懼、結構壯嚴を極む、神寶は今衆庶の觀覽に供せらる、靜が想夫戀の一曲に戍の苧卷くり返して、峯の白雪ふみわけて吉野の奥に入りにし、豫州のあとを慕ひ、流石に猛き坂東武者を泣かしめし昔ゆかしく、石階の左方天を摩して聳ゆる銀杏の大樹、今尚實朝最後の哀を訴へて悲し、宮の東に右府を祀れる白旗神社あり、天下の英雄吾と君とのみと、豊公が笑って其肩を叩きし木像を安置す、青砥藤綱の滑川を渡れば、頼朝の館址今實嵐の吹くあるのみ、法華堂の山腹頼朝の墓あり、五輪の塔高五尺、葛羅之を掩ひて落葉また拂ふなし、僅に認む法號武皇嚏原大禪門、荏柄の天神を過ぎて二階堂に至れば鎌倉宮あり、護良親王を祀る、輪奐敢て壯麗ならねど、構造古式にしていと神々し、社後の暗澹たる土牢、親王千載の恨を殘して凄陰幽寂、人をして不覺に暗涙を催さしむ、東南の林間、小やかなる瑞籬を回らしたるは、賊徒御首を捨てし處と傳ふ、感慨何ぞ堪へん、



江ノ島

逗子驛

鎌倉より逗子に至る、海水浴場は驛より約十町新宿の濱にあり、鳴鶴崎小坪ノ岬左右に突出して、弓形の一小灣をなし、沙白く松青く海水澄透す、晴灣曲々、大磯小磯鎌倉江ノ島を望み、富嶽もまた其秀麗なる姿を惜まず、觧武寺は東凡二十町行基の開基、境内凡て石山を穿ちて堂宇を建つ、寺後の神ノ嶽眺望絶佳、相海豆山指呼の間にあり、葉山は約一里餘を隔てたる風光明媚の地、

田浦驛

金澤へは鎌倉、逗子、田浦いづれよりするもよし、洲崎ノ晴嵐、瀨戸ノ秋月、小泉ノ夜雨、乙艇ノ歸帆、稱明寺ノ晚鐘、平潟ノ落雁、野島ノ夕照、内川ノ暮雪、所謂八景とは卽ちこれ、昔巨勢の金岡此風致を描かむとして、畫の眞に及ばざること遠きを嘆じ、筆を擲つて去りし處と傳へらるゝ、筆捨山能見堂に登れば、方一里餘の間に悉く八勝を望見すべく、風光水色相映帶して、うたゝ目

た樂しましむるものあり、灣の中央に突出する、小山の金龍院に九覽亭あり、八景の外、能見堂の景をも併せ見ることを得、所謂金澤文庫の址は寺崎の田地の間にあり、



横須賀に至る、左方箱崎の岬遠く海中に突出し、鳶ヶ鼻と相對して港灣茲に成る、大小の軍艦常に碇泊して、海國の威風自ら心强きを覺ゆ、想ふ昔俤に三十餘戸の一小村、今この殷盛を見る、世運の變遷夢なるかな、驛より十九町餘、十三峠の一端に安針塚あり、安針は本名ウキリヤム、アダムス、慶長五年江戸に至り、留まりて德川氏に仕へ、采地若干を此逸見村に賜はり、三浦安針と稱す、日本橋魚河岸の繁昌は、實に彼が漁師と謀りて、三浦沿海漁獲の鮮魚を輸送せしに濫觴せりといふ、逸見の淨土寺内に、安針夫妻の靈牌、及守本尊たりし觀音の像等を藏す、寺また風景頗る佳、龍本寺は宇若松にあり、山を負ひ海に面し、晴灣の中に猿島を瞰下し眺望鮮かなり、町の南一里半衣笠城址あり、治承年間、三浦義明髮霜眉雪の身を以て、畠山重忠と戰ひ、孤忠を經が小島の源公子に表せし處、松杉蒼鬱たり七百年の風雨、殘礎堆苔の間に點々として、日本文明史上特異の光彩を放つ處、ペルリ上陸紀念碑は浦賀は横須賀の南二里、豆州の下田港と共に、西洋文明輸入の關門として、久里濱にあり、仰いで古を偲び今を思へば、感慨窮るなからむなり、海村を傳うて南端三浦三崎に至れば、山欲ち波急に、海風蓬々然として天地一背、走水の洋といふは即ちこれ、日本武尊相武より出でまして此海を渡ります時、波神浪をたてゝ、船廻ひて得進み渡りまさず、こゝに后弟橘姫の命白したまはく、妾御子に易りて海に入りなむ、御子は所遣の政事遂げて、覆奏まをしたまふべしと白して、海に入りましぬといふは茲處なりとか、寄せては返す荒波の恨は盡きじ幾千年、城ヶ島は三崎の海上にある一孤島、實藏山は三崎御所の地、共に源氏三代榮華の跡、當年管絃の畫舫を浮べたるはあなたの波か、小笠懸の武技を演じたるはこなたの丘か、懷古の情、山海の勝、相待つて時の移るも忘るべし、

されさしさがむの小野に燃ゆる火の
ほなかに立ちてとひし君はも　弟橘姫

藤澤より大磯に至る途に茅ヶ崎あり、海水浴地として知らる、姥島歸帆、柳島落雁、南湖晴嵐、島井戸夕照、高砂秋月、眞崎夜雨、鵠ヶ峯暮雪、八雲晩鐘、八景の勝皆浴場より恋に見るべし、大山は平塚より四里半、雨降山の又の名、山上に農家の守護神阿夫利神社あり、七月下旬より八月中旬までの夏祭の折は、賽者蔦を以て數ふ、山中空氣清涼、炎暑來り犯さゞる幽境なり、

大磯は鎌倉の盛時に於ける脂粉の地、化粧坂の邊、花水橋の畔、白馬銀鞍の影

大磯海水浴場





國府津にて汽車を下り、小田原を經て箱根に至る凡五里、電車の便あり、海濱の景大磯に讓らず、唐津、酒匂、小田原、又好箇の海水浴地、八棟作りの外郎虎屋を過ぎて數町、右折すれば關八州に威を振ひし、北條早雲の小田原城址、松風颯々また當年を語るに似たり、二宮尊德翁を祭れる報德神社あり、源公子が大庭景親と戰ひ、一蹶朽洞に隱れて、僅に身を以て免かれし石橋山は、町より三十町の南、

湯河原、伊豆山、熱海、伊東の各温泉に向ふ人は、小田原より輕便鐵道によるべし、車道海濱に沿ひ、坐ながら山海の勝を恋にするを得、門川より右折すれば湯河原、南すれば伊豆山なり、熱海は伊豆山の南、一面海に瀕し三面山を負ひ、氣候温暖寒暑なく、山水の勝靈泉の效相待ちて、伊豆鑛泉中第一に推さる、大湯熱泉晝夜三次噴湧の狀、壯觀比なし、箱根は足柄山南偏の大火山にして形勢頗雄偉、峯巒森立瀰壑廻合す、東海道の古驛路其間を過ぎ、俗に箱根八里と云ひ坂東八州の天險と稱せられぬ、山中温泉多く、早く七湯の稱ありしが今十三湯あり、湯本は名に負へる如く、七湯中第一に湧出せしものにして、又温泉廻りの咽喉、道左右に岐れて、右は塔ノ澤、宮ノ下、左は蘆ノ湖、箱根宿に出づる本道、早雲寺は茶屋町にあり、北條五代の墳墓及宗祇法師の石塔あり、塔ノ澤は湯本の四約五町、早川の大溪に沿うて行くこと一里半、いまだ宮ノ下に至らざる四五町の處、し關山の景に勝るを言ふ、因て勝關山の名あり、早川の岸に臨み頗る風致に富む、朱舜水嘗て此地に遊び淹留數日、のぶ塚より折れて急坂を下れば、淺底宮ケ島温泉あり、四面巒樹に翠はれ、三面早川の溪流を帶ぶ、日三竿にして夜いまだ明けず、行雲客座に入りて夕早し、宮ノ下は浴場の構造、旅館の結構壹郭一位乎、東方遙に相摸灘の綠波を望み得べし、此地海拔一千百餘尺盛暑夏を知らず、宮ノ下に隣りて底倉温泉あり、蛇骨川の懸崖奇石を出す、小涌谷大涌谷噴煙空を凌ぎ其響雷の如し、底倉より約八町木賀温泉あり、薔薇を以て名高し、底の湯は木賀より一里半、湯本よりは箱根道の往還に出で、元箱根より右折すべし、二子

絶えざりし繁華の夢さえて、久しく海道の一寂村として、虎子堂のみ昔偲ぶの種なりしに、佳麗なる江山豈永く世に捨てられむや、明治九年時の軍醫總監松本順氏、此地を海水浴の好適地と相せられしより其名大に著れ、昔にまさる繁華となれり、海は即ち相摸灘、水煙の間に伊豆の大島を見、右に富士左に江ノ島、展望亟くが如し、高麗寺山は町の後、頂上高麗神社あり、老樹鬱蒼たり、大磯小磯の濱より、國府津小田原伊豆の海かけて眺望清麗なり、鳴立澤は町の西端、小水海に注ぐ處、丘あり古松四行の傍を安置せる一草堂を護る、心なき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕暮」夕陽波に落ちて鐘の音沈む頃、杖を曳いて低徊せる四行の面影胸に浮びて、あはれさ言ふばかりなし、庵に四行の什物を存す、請うて其高風に接する亦可なり、

大磯や小磯の浦のうら風に
ゆくとも知らずかへる袖かな

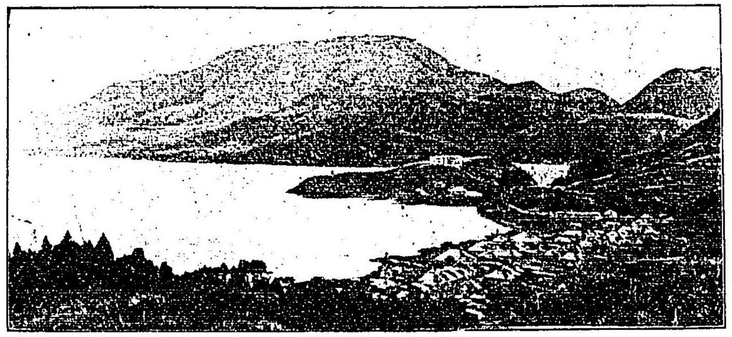
海道記

山南に峙ち、駒ヶ嶽延ヶ嶽西に聳え、北方山脈低下して眺望甚好し、海抜二千八百尺餘、麓界の盛暑已に秋の聲あり、蘆湖は長二里幅十町乃至二十町、湖中塔ヶ島に離宮あり、水面に影を映せる眺望、ジエネバの湖畔に勝ると稱せらる、況や芙蓉の靈峯倒に漱々たる水に涵して、漁舟山に上るの觀あるをや、湖畔箱根神社今衰頽甚しく、昔ての華麗なけれど、古木寒巖幽邃の境なり、箱根宿の西端關址あり、今尚殘柵を見る、

玉くしげ箱根の山ないそげども
なほあけがたき横雲の空　阿佛尼

箱根より佐野に出づれば、其處に佐野湯圍あり、湯は絶壁より五條に分れて落下す、故に五龍の稱あり、圍内緑樹蔭深き處、涼風自ら湧いて夏已に無し、若し夫れ奇街道を踏んで三島に出でむか、富士見湯あり、驛より二町、水色藍の如く渾淵麗に似たり、藍壺ノ滝の稱こゝに起る、奇巖怪石に激して碧瀾珠を飛すの狀實に壯快なり、三島神社は往古朝廷の崇敬最厚く、境内廣闊老杉森々神さびて尊し、古奈、修善寺、土肥、湯ヶ島等の温泉に向ふ人は、三島にて伊豆線に乘換へらるべし、修善寺は大仁驛より南十餘町、狩野川の左岸、逢蓬山の東麓にあり、浴舍旅亭川に倚りて軒を並べ、清瀬奇石多し、俗に湯場といふ、範頼、頼家の哀なる最後は皆人の知る處、月見岡、指月殿は、尼將軍が月を仰いで、亡兒を哀悼したる處、鎌倉初代歴史の片影、今遊子の前に開かる、

「天雲もいゆきはゝかり飛ぶ鳥もとびも上らず」と歌はれし富士の高嶺は、げにわが日の本の鎮なり、衝天直聳一萬二千三百七十尺、千秋の雪皆て消えしことなく、太古の氷今も其頂に殘れり、「田子の浦にうち出でゝ見れば」の歌は、加留多取る兒の能く唱んする處、「白扇倒に懸る」の詩は、草苅る童も知らざるものなからむ、登路五、鈴川驛より馬車鐵道にて大宮に至り、其處より登る者大宮口とて正道なり、富士大宮淺間神社茲に鎮座ます、佐野驛より須山に至り、其處より登る者須山口と言ひ、途中佐野湯圍、鼠ヶ島、棚返ノ滝の勝あり、御殿場驛よりは二路、中畑より登る者御殿場口、須走より登る者須走口と言ひ、御殿場口最登路平易なりと稱せらる、中央東線大月驛より吉田に至り、其處より登る者吉田口と言ふ、俗に淺間大神出生の古跡なりといふ、鈴ヶ原の胎内洞は此登路にあり、駿河より登るものは甲斐に下山し、甲斐よりするものは駿河に下りむこと興深からむ、近年御殿場より須走を經て吉田に至り、茲處より谷村を過ぎて大月に達する、馬車鐵道の工事成りたれば、往返共に非常なる便宜を感ずることゝなれり、登山は毎年陰暦六月朔日に始まり、これを山開きと唱へて、七月二十六日を山仕舞とす、風雨



箱根

不二山

の衆なく、風雨も力及ばずして之を涼すの機なし、緑に飯峯、馬背嶽、雷電嶽、釋迦嶽、藥師嶽、觀音嶽、經嶽、駒嶽の八峯對立して、櫛の如く塔の如し、まことや芙蓉八朶開くといふも此坑口の八ツの峯、古人の譬を其儘に、これを扇にたとふれば、骨は八ツの峯より成りて、噴火の口に要あり、地紙は末廣の裾より五合六合を境にして、それより上は動きなき大磐石の岩骨なり、

聞きしよりも思ひしよりも見しよりも
のぼりて高き山は富士の根
東麻呂

已に頂上を極めて雲中登仙の客となりたらむ人は、山麓八湖廻りをなすべし、八湖とは山中、明見、河口、西、精進、本栖、四尾連湖、及浮島沼を言ふ、御殿場より馬車にて須走を經、山中に至れば、山中湖あり、湖形臥牛に似たれば又臥牛湖と稱す、明見湖を眺きて吉田に出で河口湖に至る、周圍四里二十町八湖の中最大なり、三面峯巒を環らし、南獨り開けて「かげうつる富士の高嶺にうづもれて殘る水なき川口の湖」となる、湖中鵜天島あり、東岸の產屋ヶ崎を以て望嶽の勝地とす、此湖もと桂川の一水源、貞觀六年富士噴火の際、岩石河口を埋めて水路を絶つ、これより河口は其名のみとなれり、勝山より長濱に至り小舟を越ゆれば、西湖に出づ、弘法筆投の奇蹟あり、これより精進湖に至る三里青木ヶ原といふ、龍宮と稱する處あり、俚俗土用巽といふ、即ち

自然氷室なり、精進湖は水最浅く風光佳なり、萬葉に歌へる石花海は此精進湖と西湖に渉る古名、貞觀六年噴火の爲め、一湖の中央堆落して二湖となれり、行くこと一里本栖湖畔に出づ、四尾連は西北一嶺の彼方にありて最小、見捨つるも亦惜しからじ、本栖より三里富士の人穴に至る、鉢峯の直下なり、夕陽八朶に映じて明に其披靡を見たりと傳ふる處、今人の入り得べきもの僅に二町、石を積んで更に行くことなからしむ、人穴より上井出に至れば一時しらぬ雪解の水か神代よりとはに落ち來る白糸の瀧あり、道傍祐經の墓と稱するあり、淵より大宮へ三里、それより途中福泉寺境内、曾我兄弟の墓に詣で、鈴川に出で、浮島沼の景を愛で、沼の名物鰕魚に舌鼓を打て此旅行終る、

立ちにけりうなぎの烟り富士の空

## 東海の名區

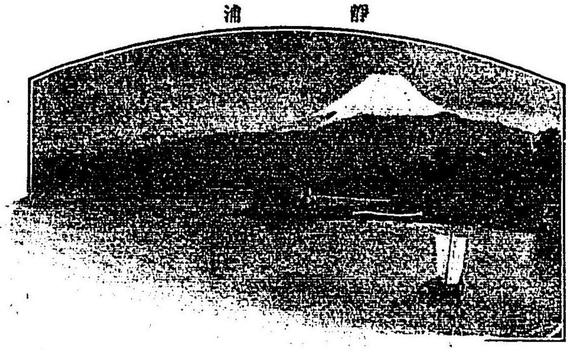
**沼津驛**

青松白沙數十里幾箇の名區を點綴す、田子の浦曲一帶なんぞそれ愛づべきの風光多きや、靜浦、我入道、牛臥、千本松原、田子ノ浦、吹上ノ濱、清見潟、薩埵山、久能山、清見寺、龍華寺、三保ノ松原、勝地あげて數ふべからず、加之芙蓉の靈峯至る處姿をあらはし、風趣更に一段の美を點綴す、宜なるかな「東海名區」の稱、

千本松原は沼津驛より十八町の海濱、白沙青松遠く相連り、名其實にそむかず、南は伊豆の山呼べば將に應へむとし、遙に三保ノ松原と相對して駿河灣を成す處、波靜に鏡の如く海水浴の好適地なり、

坊やは巻い子ぢやれんれしな、此見の可愛さ限りない、天に昇れば星の數、山には木の數草の數、沼津に下りれば千本松、千本松原小松原、松葉の數よりなほ可愛い、

**靜浦**



**原驛**

我入道、牛臥、靜浦は皆此海に連る、我入道は驛より二十町、岩頭不動巖の奇あり、其南桃郷御用邸に至る海濱に、兀立する獨基の石山あり、疎松亂立して恰も臥牛の如く牛臥山と稱す、牛臥の東南岸は卽ち靜浦、波に漂ふ芙蓉八朶の雄峯を松間に拾ふ風光他に類なし、

原驛より六町、松陰寺あり、白隱和尚曾棲の禪刹、荊叢塔といふは其墓、鈴川に至る道に浮島沼あり、今狹くなりて蘆荻おのがまゝに生ひ茂れど、昔は富士沼とて名高く東西三里餘、富士川邊まで續きたる大沼なりきといふ、治承四年平維盛、富士川の四岸に陣し、夜此沼より飛揚せる水禽の羽音に驚き、敵襲來せりと潰走したるは、史上に詳なる好笑の種、

**鈴川驛**

鈴川驛の海濱一帶の地は田子ノ浦、田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ不二の高根に雪は降りける」赤人の歌三尺の童子尚暗誦す、

**岩淵驛**

沙丘あり、天香久山といふ、靡天の大嶽北に峙ち、原野江海の眺望廣遠なり、

**蒲原驛**

富士川を渡れば岩淵蒲原、白沙一帶山を戴き水を抱く、吹上濱といふ、六本松とて淨瑠璃姫の塚あり、薩埵山は由井興津の間に横出し、山勢斗絶、激浪其東南を洗ふ、山ノ神は此山の一端眺望無比、富士、三保相點頭いて登臨の人を欵待す、

山の神さつた峠の風景は　　三下り半に巻きもつくさじ　　蜀山人

「闕の戸のさゝぬ御世にも清見潟心をとむる三保の松原　義敎」清見潟、薩埵崎、許奴美等、古く歌にうたはれたるは皆興津の海岸なり、北に薩埵山を負ひ、西清水港に連り、東は原吉原に續ける伊豆の山々、南駿河灣に臨む處、三保ノ松原ながく突出して、翠一帶を曳ける風光、誠に八湘を捲いて、一望の中に收めたるものならし、海濱波靜にして水清き處、浴場の設あり、清見ケ關の址は清見寺々門のある處、寺は高く青山に倚りて展望廣遠、觀月の美須磨明石に讓らず、興津より江尻、清水にかけて、白沙青松路迷はす、共に海水浴場あり、清水は海道風指の港、百貨輻輳して帆影絶えず、舟を儲うて三保ノ松原に至るべし、

**興津驛　江尻驛**

三保より富士を見る

三保ノ松原は又三保埼といふ、海上突出の一洲なればなり、宛然浮島の如し、折戸より眞崎まで、一條の青松葉の如く長さ一里餘、潮風松に衝りて不斷の琴を奏で、白沙一路露の降ること繁し、御穗神社の邊、松聲漏耳靜かなる處、羽衣ノ松あり、碑に「昔天女降りて羽衣を松枝にかけしと傳ふれど、其松は已に枯れ果てたり」とあれば、今の松は其後のものなりと覺ゆれど、枝は古りて千古の遺風を傳へ、根は蟠屈して龍もこれを居眠の枕とやせむ、富士は湯上りの薄化粧の姿を見せて、腰より下の足高や、裾はぼかしの涙模樣、天女の舞樂今目の前に見る心地す、

**静岡縣**

お富士さん霞のころもぬがしやんせ
雪のはだへが見たうござんす　　蜀山人

龍華寺は江尻より一里餘、清水より十數町のみ、寺は背山に倚りて眺望絶佳、伊豆の山々より薩埵峠、さては興津江尻の長汀曲浦、樓影淡きは清見寺か、富士の大岳盆山の如く、駿河の海灣盃水の如く、三保ノ松原屏風を立て、遠山近海の奇勝一目の中に集る、「駿の龍華寺は天下第一の絶觀なり」と、服部洪齋が述べしも宜なるかな、庭前大蘇鐵長蘇鐵あり、北隣の鐵舟寺松風の聲、ことに心澄む處なり、珍奇の寺寶に富む、久能山は海拔八百九十尺、麓は清にして有度濱と言ひ、東北三保ノ松原に連り風光優美なり、靜岡、江尻兩驛より共に二里半餘、頂上東照宮あり、結構壯麗を極む、山を削りて石壁を作ること、二十一間一千三十六級、正門後水尾天皇御宸筆「東照大權現」の額を掲ゝ、賤機山は靜岡驛より十六町背葉ヶ岡と稱す、南端社殿の壯麗を以て誇る淺間神社あり、山上より靜岡全市及阿部川の清流を望み、駿河灣上に來往する帆影を指點するを得べし、龍爪山は靜岡北方の鎭、標高三千六百尺、滿山森鬱遠望直に之を識る、松杉陰昏き處穗積神社あり、山中三流の瀑布あり、幽邃清涼又好箇の避暑地、寶台院、臨濟寺、吐月峯、柴屋寺、今川義元、由井正雪、かしくの墓、木枯ノ森、蔦ノ細道、麻機ノ沼等遊杖を促すの地、多く市の附近に散在す、

人知れぬおもひするがの國にこそ
身をこがらしの森はありけれ

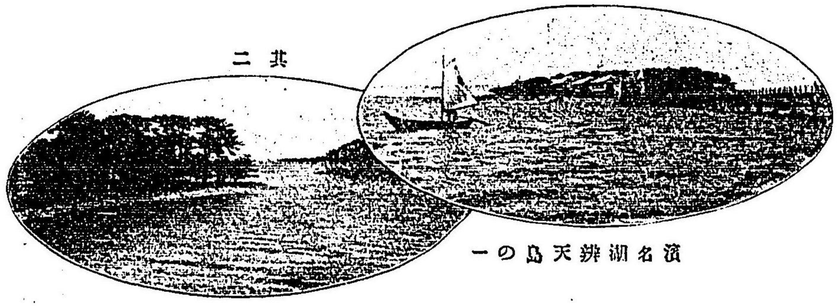
**掛川驛　天龍川驛　濱松驛**

## 濱名湖附近

靜岡より西、島田金谷の間大井川を渡る、蓮蓮或は肩背に擔りて、渡りし昔可笑しく、朝顔が川留の歎き悲し、

秋葉山は鎭火の靈祠、老杉古檜蟲々として天に朝し、幽邃塵外の境、千年の廟宇殿として立てり、掛川驛より約九里、西麓天龍の大河流る、川舟を備うて下れば、三時間にして池田の宿に達し、天龍川驛に出ることを得、池田には諧曲に名高き熊野の墓あり、

濱松は東海の名邑、城址今尚天主臺を存す、樓上に登れば、東に天龍川、南に遠州灘、北に三方ヶ原を見渡し、眺望甚佳なり、三方ヶ原は元亀三年信玄家康の鎬を削りて戰ひし處、



濱名湖辨天島の一

其二



**舞坂驛　辨天島驛**

濱名湖

當年甲斐と三河との武士が、肉薄搭鬪して流血淋漓たりし地、今多く茶園となれり、この地由來名松多し、中にも颯々ノ松は、足利の風流將軍義敎の吟賞に入りしを以て名高く、琴聲今も昔に變ちず、

汽車舞坂より今切の鐵橋を渡りて鷲津に至るの間、北に濱名の平湖あり、南に太平の巨洋あり、左顧右眄宛然たる橫拔の大活畫を觀るが如し、「立ちわたる濱名の橋の朝霞見てすぎがたし春のけしきは　時朝」豈啻春の眺のみと言はむや、水光漫漫眼界限りなく、軟沙海に浮んで古松亂立し、涼風徐に來りて秋を醸す處、誠に夏しら波の仙境なり、宮嶽はかく遠ばなれたる處にも秀姿を惜まず、月明かなる夕、湖面を鏡にほんのりと薄化粧の姿を見すとかや、辨天島は湖中の一小島、內外の勝景恋にするを得べし、ことに水清く遠淺なれば、婦女子の海水浴場としても恰好の地、夏期中茲に假停車場の設あり、宗良親王を祀れる井伊谷宮、俗に奥山の半僧坊といへる方廣寺、堀江の館山寺、鷲津の本興寺、古歌に名高き引佐細江、高師山等、形勝の地湖邊に多く、浴閑舟を傭うて巡遊せば、興更に盡くるを知らざらむ、

夏をとへばいなさ細江や秋の聲　紹巴

**豐橋驛　御油驛　蒲郡驛　名古屋驛**

鐵軌三州に入りて三河灣の勝あり、渥美半島遠く太洋に突出して、尾の知多半島と相對して灣をなす、靈頭伊良湖崎の壯觀は世に喧傳する處、渺茫たる太洋千里其果を知らず、海風怒來して亂濤奔雷の如し、豐橋驛に下車して半日より舟にて至るを得べし、

豐橋は豐川線の接根地、豐川吒枳尼天、砥鹿神社、野田城址、鳳來寺山、長篠古戰場など同線附近亦見るべきもの多し、御油、蒲郡は海濱の地、海水浴地として早く世に知られたり、蒲郡の浴場は懸の松原に至り、竹島、大島、龜岩等前面に羅列し、晴灣の水太だ明淨、「海のながめは蒲郡」とうたへる鐵道唱歌人を欺かず、

大島や小島がさきの佛島
涼の森に懸のまつばら　後成

## 名古屋の山水

名古屋は實に三府に亞げる大都市、近年私に中京の稱を立つ、畿內、坂東の中間、尾濃巷勢の江山別に一區實を成し、此地恰も其腹心にあたるを以て、人物の輻輳商工の殷富、おのづから他に異なり、汽車は東京より來るもの此處に二分し、一は岐阜より近

名古屋城

江を經、一は伊勢路を經て共に京阪に向ふ、又中仙道を經て東京に至るの道も、中央西線の竣工に因て近く事實にあらはれむとす、若しそれ熱田の築港完成するに至らば、將來の繁榮蓋量り知るべからざるものあらむ、

名古屋城　甞瓦粉壁、巍々たる五層の樓閣、高く雲表に聳ゆるものは、問はずして名古屋城の天守閣なるを知るべし、屋上更に一雙の金鯱を置く、光輝朝暾に映じ夕暉を帶び、數里の遠きより仰望すべし、城は加藤清正の自ら指揮して作る處、諺あり「昔に聞えし名古屋の山をひきやならした肥後の衆」

若宮八幡宮は市中第一の大社、境内廣く樹木森々翠色滴るが如し、西本願寺別院は門前町に、東本願寺別院は橋町にあり、結構壯大なり、大洲の觀音は市人遊展の向ふ處、稍東京の淺草に似たり、豐太閤及清正の生地として名高き中村は四一里、常泉寺内彫堂あり、秀吉の木像を安置す、頑童藤吉の植ゑたる一幹の狗骨樹、今尚繁茂して古を偲ばしむ、成之助曾樓の宅址は卽ち妙行寺、境内清正堂あり、蓋世の風雲この一小地より起りたるを思へば、感慨堪きざるものあり、

熱田驛

熱田神宮は熱田驛の東數町、日本武尊草薙の御劍を此に安置し給へるより、後世崩祝永く其靈威を仰ぎ、朝廷の崇敬接過伊勢大廟に亞ぐ、境域頗る廣濶、江道四通して地に寸埃なし、華表八方に立ちて、海藏門には不實梅あり、これを四大門とす、瑞籬長く匝りて内に本殿あり、豐の丹碧を施さず、釣殿、祭文殿、拜殿、勅使殿等參差相連り、攝社末社左右相望む、松杉亭々四境に繁茂して神威を護り、靜かなること太古の如し、「いつかわが身のなはりなる熱田の八劔伏拜み」と、東下りに歌はれたる八劔神社は、大宮の南にありて下宮と稱す、

木曾路の勝を探らむとする人は、名古屋より中央西線によるべし、途次名勝多し、勝川驛より二里なる小牧山は、長湫の役家康が織田氏の舊館を重んじ、僅に參遠二州の力を以て、豐太閤百萬の軍を制せし處、今公園となる、山は廣漠たる平原に屹立する孤峯にして、形狀荷に似たり、老樹鬱然、翠滴るが如し、

虎溪山





長良川の鵜飼

虎溪山永保寺は東濃第一の勝境、夢想國師の開基、聖觀世音を以て本尊とす、土岐川の急湍、奇巖怪石の間を屈折して走り、危樓高閣巖に倚り流に枕んで、眺望佳なり、境内は七千*餘坪なれども全溪凡方一里、山あり水あり皆永保寺の園地をなす、無際橋、龍浮淵、十八瀨の勝景も聞ゆ、多治見驛より僅に十町、

安藝の國御薗の山のなかりせば
美濃の虎溪は日本一なり

名古屋より岐阜に至る、岐阜は濃尾平野の北偏、飛騨高原を背にして長良川を帶び、山水清麗なり、稻葉山は又金華山といひ、市の東に屹立す、峯巒甚高からずと雖、平野の上にありて山色秀潤、北長良に臨みて岸崖の間頗幽趣あり、山の北偏は謂ゆる岐阜の古城址、西麓伊奈波神社あり、

鵜飼は實に美濃の奇觀、長良の川水石清淨にして多く香魚を生じ、其美古來人口に膾炙す、鵜匠あり鵜を放つて香魚を捕らしむ、毎年五月中旬より始め十月中旬に終る、月明を厭ふを以て、上絃の夜は月の沒するを俟つて出で、下絃の夜は月の未だ出でざるに先つ、舟毎に篝火を點じて流に從ひて下る、宵氣陰雲のところ、火光水に映じて、螢の水面を渡るが如し、鵜匠鵜を繫げる十二條の繩を持し、魚の篝火に集り來れるを察して、吐嗟に水中に放てば、舟子篙を執つて舷を亂打し、叱々聲を放つて鵜を勵ます、鵜は之に勢を得て、波を切り流を潤り、出沒浮沈端倪すべからず、鮎爲に逸するの遑なし、鵜已に七八尾を啣めば、則波上に浮び出づ、鵜匠繩を曳いて、嚙を開さて籃中に吐かしめ、復水に逐ひ入る、その手業の疾きことあやしく見事なり、觀者別に舟を儛ひ酒肴を齎して之を見る、一夜の清遊直に夏を忘れむ、

またやたくひながらの川の鮎鱠　はせを

大垣驛

大垣の巨麗城は驛より四町、これ關ヶ原の役、三成の諸將と出陣の軍議を凝らし、處、天主閣尙依然として仰ぐべし、今公園たり、養老の瀧は驛より三里、養老山中にあり、山甚高からずと雖、老樹鬱葱石逕磊落なり、登路十數町にして、飛泉の音琴々として層巒皓線の中に響ふを聞く、瀧は高さ十丈五尺幅十二尺、削成の石壁支ふるものなく、水灑々として落つ、瀑底只一枚の岩石のみ、水の深さ漸く膝を沒するに過ぎず、人衣を裳げて直に瀑下に至るべし、瀧を距る四町養老神社の銅背、沸泉あり菊水と

## 關ヶ原驛

古の不破關址は字松尾の大木戸坂にあり、

秋風や藪も畠も不破の關

養老の瀑

いふ、これ養老改元の詔に效を述べたまへる、多度醴泉の址、泉性今變じて尋常の水となれり、

關ヶ原は關ヶ原驛附近一帶の曠原、今須峠松尾山を以て四南を限り、東は桃配山野上に至り、北は小關の山脚に至る、藤川の一水伊吹山に發し、西北より來りて原の南邊を過ぎ、北邊藍川ありて東に流る、東西一里南北半里、東山道と桑名敦賀の南北路、此原頭に相交り四通の街を成す、慶長五年九月十五日、三成家康の兩軍茲に相會して、屍山血河の修羅場を現じたることは、今詳しく說くの遑なし、當時の陣所皆木標を建て、この大戰を偲ぶ人々の栞をなせり、

芭蕉

## 長濱驛

米原より、北汽車は琵琶湖を左に見て北陸に入る、竹生島は湖上の名島、長濱驛より航路三里なり、島形葵實の如く南北に長しおよそ二十一町、斷崖創立神巧鬼鑿の趣あり、老樹鬱蒼として湖光山色に掩映し、勝絕言ふべからず、「綠樹影沈魚上木、月浮海上兎奔波」とは空海の詠ぜし處、巖を礎にして辨財天の祠あり、秀賴の寄進に係り、桃山聚樂殿の一邊を移し構へたるものなりといふ、

目にたてゝ誰か見ざらむちくぶ島
波にうつろふ朱の玉垣　隆祐

## 木ノ本驛

七本鎗を以て名高き賤ケ嶽は、木の本驛より三十町、山麓より頂上まで十二町に過ぎず、山は余吾、琵琶兩湖の隔障をなし、北國街道に臨む、松籟濤聲と戰ひ、叱咤突擊、當年柴田羽柴の奮戰を思はしむ、

## 敦賀驛

敦賀は敦賀灣の南濱にして、古來外蕃異方の船の來著せる處、琵琶の大湖と綫に一嶺を隔つるのみ、本邦中原に於て要害無雙の點にあたり、海山の景甚美なり、驛を出づれば直に氣比神社、仲哀天皇の御廟なり、廟宇壯麗境內廣く幽邃掬すべし、海は卽ち氣比の海、一帶の松原亦其名に呼ばる、白沙逞々として碧海に枕み、翠松颯々として琴聲斷えず、聖上駐蹕風色を愛でましゝ處、今紀念の碑あり、松間の松原神社は武田耕雲齋、藤田小四郎等を祀れり、辨天島の勝は普く世に知らる、海路半里に過ぎず、舟遊の



樂限りなし、

南朝の悲史なんぞ人を泣かしむること多きや、金崎落城の如き其最なるもの、延元元年の冬、尊良恒良の兩親王、新田の一族を率ゐて金崎に入城、足利の勢と大戰數旬、尊良終に自刃し給ふ、恒良は賊手に捕へられ、後海を仰いで無殘なる最後を遂げさせらる、地は敦賀の東北八町の小岬、兩親王を祀れる金崎神宮あり、山を負ひ海に枕みて、瞰目開豁、ことに月夜の美觀たぐひなけれど、遊子多く北景に親まず、兩親王の末路に袂を潤す、

新田義貞及其一族を祀れる藤島神社は、福井驛より十六町、足羽山上に在り、山は高からずと雖、四方眼界を遮るものなく、眺望甚佳なり、福井は古の北庄、柴田勝家の雄踞せし處、近世松平氏之に居り北陸の雄藩たりき、驛より二町にして福井城址あり、壘濠の設厚大にして、樓閣墻垣撤去の餘、尙往時の土木を想ふに足る、烈士橋木左內の墓善慶寺にあり、景岳先生の墓と題す、一世の經綸事志と違ひ、空しく風露の下に眠る、行いて英靈を弔ふべし、永平寺は曹洞宗の大本山、驛より四里永平寺山の麓、幽溪の窮處にあり、枯木奕岩の色、鳥聲風籟の音おのづから世間に異る、

## 福井驛

福井より金澤に至る途に東尊坊の勝あり、金津驛より二里、北、雄島と相對し風景明雅なり、岬端二町四方に擴り千疊敷の名あり、稜々たる怪石刀鋸の如く峙ち、巍々たる奇巖障壁の如く連り、衝然角列怒濤を嚙んで海中に雄踞す、又海水浴の適地、附近蘆原溫泉あり、

## 金津驛

山中溫泉は風景の幽邃なるを以て其名高く、北陸第一の鑛泉なり、地は三面山を負ひ、大聖寺川其東を貫流す、川は岸高くして斷岩之に連り、橋あり蟋蟀橋と名づく、風色清絕なり、夏夜橋上に立て蟋蟀の鳴く音に醉ふ人多し、下流道明淵あり、深淵一碧鏡の如く、山影相映じて俗塵絕す、黑谷橋の眺望蟋蟀橋に讓らず、山代溫泉も同じく有名なる鑛泉なり、宇越中谷に九谷陶器製造所あり、山中山代兩溫泉共に大聖寺驛より至るべし、

## 大聖寺驛

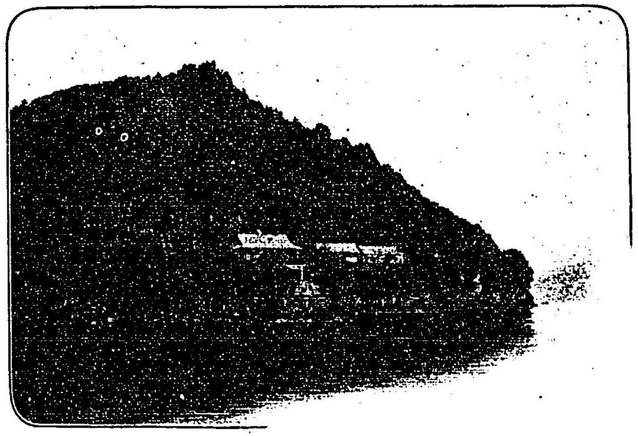
那谷の觀音堂は古來世に聞えし靈場なり、勅橋驛より一里、山巒岩洞の形狀頗奇異、獰獅蟠り猛虎怒るが如し、蓋し加州中の最奇境か、只其境內の狹きを憾むのみ、境內楓樹多し、

## 勅橋驛

石山の石より白し秋の風

はせを

竹生島辨天祠



小松驛　吳川驛　松任松驛　金澤驛

東尋坊の奇勝

勸進帳によりて名高き安宅の關は、今の小松驛の西二十町、安宅の海岸に設けられたる、北陸の關門なりしかど、沿桑の變其址を尋ぬるに由なし、吳川驛は直に日本海に臨む、青松參差白沙を蔽うて遠く汀上に連り、小舞子濱の名あり、松任は女俳人千代女の生れし處、聖興寺內墳墓あり、

月を見てわれも此世を急ぐかな　千代女

金澤は前田氏百萬石の城府、兼六公園を以て名高し、園は驛より十七町日本三公園の一なり、文政の元金龍公の經營に係り、宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝を兼有すとの意を以て、白河樂翁公の命名せられたるもの、園中池沼瀑布あり、松杉鬱蒼、花木研麗、泉石亭榭みな雅致を極む、

白山は日本三山の一、海拔八六八一尺「白山の名にあらはれて三越路や峯なる雪の消ゆる日もなし」峯頭五箇に岐れ、北の三峯を大御前、大汝、劔ヶ峯と稱し、南の二峯を別山、三ノ峯と言ひ、大御前を主峯とす、彌陀ヶ原は廣さ牛方里、海拔七八六〇尺の高原なり、黑百合、花菖草を初とし、種々なる草花咲き亂れて、盛夏仲

富山驛　魚津驛　津幅驛

富山は賣藥を以て洽く世に聞ゆ、地は神通川の右岸、二里にして岩瀨港に至るべし、神通橋上の眺望清絕にして、附近神通八景の選あり、吳服山は驛より四十町、神通の長流有磯海の烟波、能登半島の風色一眸の中に落つ、

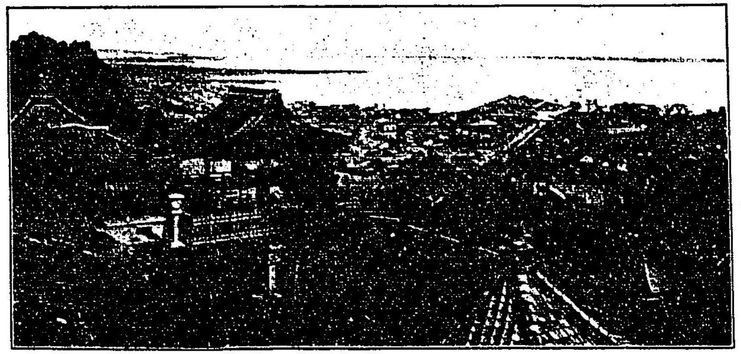
汽車魚津に至て停まる、これより八里道越後に入れば、北陸第一の險親不知子不知なり、市振と外波との間凡五十町、嶮崖亂峰屏風を立てたるが如く、其下潮汐の衝に當り、道路風沒して幾度か氣を失ひ魂を消さしむ、行人間を候うて疾走す、若し風潮俄に至れば、山壁の窟中に難を避く、此際步武の遲速怒ち死生を爲す、子、親を扶け、親、子を顧みるの遑なしとて此名あり、然れども今は沙濱遠く水際と隔たり、風波の日も危險の虞なし、遠く佐渡ヶ島の蒼を望み、水天髣髴の間、白帆點々蝶の飛ぶが如く、眺望壯快なり、近時山中に孔道を通じたるため、旅客屋岸を迂るものなきに至りしかど、板沓を穿つて古の奔馳の樣を偲ぶも、また面白き旅ならずとせむや、

日本海に突出せる能登半島の風色、多く人の口に上らず、內浦路外浦路、畫趣詩趣兼れ備へて、人の訪ふなきを怨むるが如し、明媚なる七尾灣、秀麗なる九十九入、雄偉なる祿剛崎、海山の光景變又轉、うたゝ遊子の目を樂しまじむるものあらむ、津幅驛より七尾線に乘り換ふれば、二時間にして七尾灣頭の人となりて、和倉溫泉に浴するを得べし、



米原驛　彥根驛　石山驛　馬場驛

米原より馬場に至る間、汽車は琵琶湖に近づきてはなれ、離れてはまた近づく、車窓の眺望凡ならず、「旅衣ほころびぬれや磨針の峠に來ても縫ふ人のなき」嶺は米原より一里、絕頂望湖堂あり、瑠璃盤上に玉を投じたるが如き、湖上の島山一眸の下に集まり、東坡の「望湖樓下水如天」の一句、此處の爲に言ふものゝ如し、幕府時代關西の諸侯江戶參覲の折は、必ず此堂に休息して日を樂しましめたりといふ、



三井寺よりの湖を望む

彥根は舊井伊侯の錦城にして、德川幕府の重倚なりき、西は太湖に臨み、北に姉湖を湛へ、水陸形勝の地なり、驛の前面金龜山の森林中に、白壁皎々湖水に映するものは、彥根城の天主閣、此地今公園となれり、朦吹山は右に、四明峯は左に、多景島其前に浮びて山影湖光繪けるが如し、麓に崇々園あり、姉湖に臨む、模造の八景をはじめ結構數奇を極む、三成の佐和山城址は町の東にある岡陵、今尙古壘を存す、墓あり、往いて苦忠空しく挫折せる英魂を弔ふべし、

汽車石山、馬場に至つて湖島の景更に新なり、見よ周廻七十餘里の烟波、滉洋として碧落を涵す、春は融蕩に秋は澄爽に、朝陰を籠め夕暉を盪し、浮嵐暖翠千萬の狀を呈し、時として淸ならざるなく、處として奇ならざるなし、幾代の詩人徒に吟罷を捻斷して、この湖の晴好雨奇の勝を道破する能はざるに泣く、三井晚鐘、石山秋月、堅田落雁、粟津晴嵐、矢橋歸帆、比良暮雪、唐崎夜雨、勢田夕照、所謂近江八景とは卽ちこれ、近衛關白の瀟湘八景に擬して選まれたるもの、人僅に之によつてこの勝の片影を覗ふことを得、

三井寺は馬場より二十四町、長等山園城寺と號し、海內屈指の貴刹なり、門を入りて石磴數百級、登り盡して寺境に至れば、四顧洞達、俯して太湖を望み、澄碧明奩の如く八景極指點すべし、湖の左方宛然屏風を樹てたるが如きは比良の山、春風尙未だ江州に至らざる間、峯頭の白雪夕暉に照る、翠黛地を蔽ふ數百坪、支柱數百基を以て垂枝を支ふる唐崎の松は、さながら盆に栽ゑたる菫の如く碧灣に浴うて小し、「にほてるや矢驛の渡りする舟をいくそたびしつ勢田の橋守」風帆欹仄して矢驛に向ふ處、曛日新なり、湖水勢田の西に繫束し、一條の

川となるところ、橋あり中ころ絶えて一嶼に通じ、更に又一橋を起すものこれ「永き日や蝶とつれだつ勢田の橋」なり、川の西堂塔を圍んで岩樹の屹立するものは石山寺、にほてる月のさやけさは、もろこしまでも盛なからむ。

石山の驛を下れば粟津ケ原、翠松一帶道を挾み、瀬田川を東方に望む風光得も言はれず、「大木曾の荒山櫻すゑつひに雪と散り行く粟津野の原」、嘉永二年義仲上京の時、茲處にて平家の軍を敗りしが、半歳にしてまた此處に戰死す、墓は馬場の義仲寺にあり、「木曾殿と背中合はせの寒さかな」俳聖芭蕉其傍に雖を安んず、勢田の唐橋、石山寺尙石山の驛よりすること便とす、石山は山皆石其名に背かず、石は世に謂ふ太湖石に類して更に妙なるを覺ゆ、臥し川たるあり立ちたるあり、躍れるあり舞へるあり、苔深く色黑みて雅致言ふべからず、山の高き處觀月亭あり、清風稀星の夜、玉兎湖心に落ちて山水苔茫、欄頭の客神澄み氣平に、身の塵世にあるを忘れむ、此地また營を以て著はる、山の北方營谷より流營幾千萬、湖上爲に闊光なからむとす、宛も銀河を見るが如し、觀者多く輕舸を放つて清波を上下す、また銷夏の一樂事なり、

馬場驛よりの遊所、三井は已に說けり、矢橋は湖上一里舟して至るべし、「からさきやかすかに見ゆる眞砂地に紛ふ色なきひと本の松」は二里、人車汽船の便あり、遠く望めば翠巒の如く、就て看れば蟠龍に似たり、湖岸唐崎神社あり、堅田は四里半人車及汽船の便あり、水に枕める滿月寺より、汀岸の邊一橋を通じて、湖中に觀音堂を置く、浮見堂とはこれなり、鴻雁幾行更に孤ならず、曉風月を帶びて東湖に落つるの時、遊子一味の新愁を覺えむ、比良山は八里舟車の便あり、山勢雄偉海拔二千九百尺、絕頂を蓬萊と名づく、獅子谷に落拜瀑あり、上段高二十間下段高六十間、清濕幽淵の間より下りて四練を下すが如く、穉松洞壁に繁茂して飛泉と映帶し、湖四の一壯觀をなす、

## 神奈川

社頭祈也

御製

とこしへに民やすかれと祈るなる
我世を守れ伊勢の大神



皇后宮御製

神風の伊勢の内外の宮ばしら
ゆるきなき世をなほ祈るかな

五十鈴川の上、神路山の麓、神さびたる一區の淨地は、これ國家無上の太祀、天祖天照皇大神を奉祀せる大廟の在る處なり、凡そ此土に生を享くるもの、誰か誠恐誠惶、神德を尊崇せざるものあらむや、

汽車龜山より南す、津は古の安濃津、東阿漕浦に蒲み、鵜崎港を擁し、街衢整然百貨輻輳、伊勢は津で持つしの俗諺實に誣言にあらず、津公園は驛より二町の西に在る安濃川に臨める丘陵にして、元藤堂氏の別業、老樹蒼鬱たる間、淵水と巖石との照映宜しきを得、園藝の妙天然の幽谷に遊ぶが如く、關西屈指の良園なり、中河原一帶海濱遠淺にして潮清し、海水浴場の設あり、

龜山驛　津驛　阿漕驛　高茶屋驛　松阪驛　山田驛

歌枕に名高き阿漕浦は阿漕驛のあるところ、波靜に清遠く、松奇にして沙白し、海水浴場の設あり、松間結城神社あり、結城宗廣を祀る、かの稗史に有名なる阿漕平次の塚、また老樹鬱蒸たる間にあり、

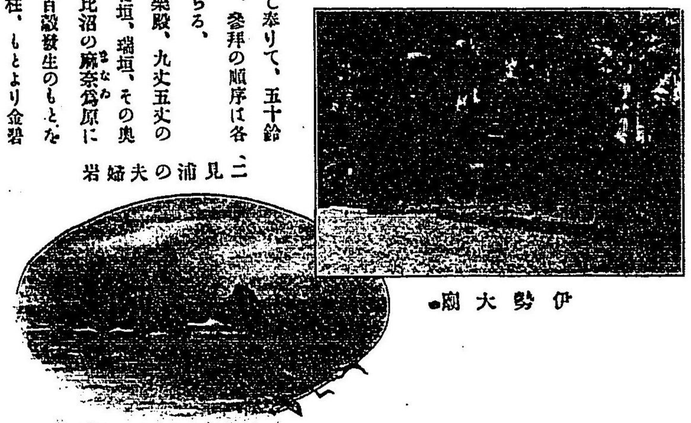
香良州浦は風光伊勢灣中第一の稱あり、海水浴地として知らる、高茶屋驛より三十五町、白沙渺々として限なく、松樹鬱々其間に枝を交へて一帶の森林をなし、尾濃の連山、伊勢の神路、朝熊の峯巒眼界の中に集る、

林間香良州神社あり、祠畔の風光住吉に似たり、

松阪は本居翁の生地、鈴の家の書齋今尙魚町にあり、墓地は町の西南山室山の嶺、櫻樹蔚れる下に在り、

汽車已に山田に至る、大廟は內外の二宮に分れ、內宮は　皇大神宮と稱し奉りて、五十鈴の川上に、外宮は　豐受大神宮と稱し奉りて、高倉の山麓に鎭り坐せり、參拜の順序は各人の任意なれども、勅使參向の大祭は、悉く外宮を先とし內宮を後にせらる、

外宮は驛より五町、一ノ鳥居を渡れば右に清齋館あり、二ノ鳥居より神樂殿、九丈五丈の二ツの殿、三ツ石、御池、木々森々として自ら心靜まるを覺ゆ、玉垣、番垣、瑞垣、その奧に立たせらるゝは豐受の大神宮なり、そもそも此大神は、もと丹波の國比沼の麻奈爲原に坐しましゝを、雄略の御世、今の大宮地に鎭め奉らせ給ひしものにて、百穀蠶生のもとなり、天下の人民に衣食を幸ひ給ふ神なり、正殿は南向にて瑞垣の掘立柱、もとより金碧の飾なく、白木を儉の結構なれば、遠き神代も偲ばれて、



伊勢大廟

二見浦の夫婦岩

何事のおはしますかは知られども

かたじけなさに涙こぼるゝ　四　行

内宮は外宮を距ること凡三十町、間の山を過ぎりて、お杉お玉の間の山節に興がるも面白し、電車の便によるもよし、宇治橋に至れば五十鈴川流は澄みて、神路山は杜に茂りたり、一ノ鳥居を潜れば即ち神苑、古杉老檜森然として立ち、地に寸埃なし、苔涼の氣身に逼りて、我已に塵世をはなるゝこと遠し、下馬先より二ノ鳥居をくゞり、御垣の下に進みて跪きて拜すれば、森々たる木立に風靜に渡りて、神下りますかと宮居尊く、清淨無垢なる白木造に、一點の塵も許さず、頓づけば得もしらぬ美き薫りうつりて、衣の香ばしきも嬉しく、木の間より洩れ來る日の光の嚴かなるを仰ぎては、恭けなさに涙のほふり落つるを禁じ得ざるべし、宮は崇神の御世までは、宮中に奉祀せられしを、神威を懼し奉らむことを恐れまして、大和の笠縫の里に移しまゐらせ、後垂仁の御世、倭姫命神謨を請けて、今の地に齋き祀られぬ、御殿代は長くも八咫の御鏡にして、三種の御神器の一なり、長さあたりにて宗廟とあがめられ、俗にお伊勢様と唱へ奉りて、庶民その靈德を仰望する、また忙なりと言ふべし。

おりたゝむことも畏し神垣や　知　紀

御裳濯川の清きなかれは

二見浦は山田より東二里電車の便あり、沙白く松青き長汀曲浦に、のたり〳〵とひれもす波の打寄せて、遠くは尾鍳の山々を望み、近くは眞帆片帆を見るさへあるに、夫婦岩の美觀何を以てたとふべしや、曉を冒して旭日兩岩の間より登るを見る、最壯觀とす、賓日あり、古器物を陳列す、潮水澄みて玉の如き處、海水浴場の設もあり、

朝熊山は風光の明媚、神部中第一と稱せらる、山田よりは二里、二見浦よりは一里餘なり、海拔一七〇〇尺、朝熊神社あり、眼下伊勢の海島々として一大鏡をなし、大島小島烟波に浮び、白帆點々其間を縫ふ、天霽れ氣澄むの時、遙に芙蓉峯を望むべし、富士見臺あり、

二見浦より一里半鳥羽港あり、日和山は北西に屹立する丘陵、高さ七八十間に過ぎざれども、眼界極めて廣く、答志島、阿波羅岐島、神島、菅島、坂手島、安樂島等縱横に羅列し、右は鳥羽の城址、左は小濱の岬を望み、鍳尾の海山をも并せ收む、風光松島に髣髴たり、若し夫れ舟を屈うて島巡りをせむか、興盡くるを知らざらむ。

伊勢の海のあまの志摩津かあはひたま
とりて後かも癒のしけ〳〵む

# 名古屋の旅宿

關西線は奈良を中心として蛛網の如く縱横す、名古屋より奈良を經て湊町に至るもの其本線なり、





汽車名古屋を後にして木曾川、揖斐川の長橋を渡れば、樂翁公の故地桑名、多度山は驛より西北三里、三十六峯巖石の怪異なるもの多く、八窟谷の幽溪特に勝區たり、山麓多度神社あり、

宮田驛の南方、白沙青松相連る處霞ケ浦といふ、海水浴の適地なり、波穏にして潮水深からず、沙魚釣貝拾ひの樂あり、

四日市は伊勢灣の帆影一眸の中に萃る、羅渓石の奇あり、青嵐の涼あり、風土脚氣患者に適す、

平原伊勢灣の帆影一眸の中に萃る、羅渓石の奇あり、青嵐の涼あり、風土脚氣患者に適す、

勢州鈴鹿關より伊賀の柘植に踰え、山城の笠置に向ひ、以て京都、奈良、大阪に通ずるは即ち古の伊賀路、今鐵道は關より柘植に至りて二分し、一は上野を經て笠置に向ひ、一は北折して草津に向ふ、柘植は實に俳聖芭蕉の誕生地、碑あり阿伽の水絶ゆることなし、

上野は藤堂氏の支鎮、城址今公園たり、町の北隅老樹蒼木の鬱茂せるを見るものそれ、芭蕉の此地に人となりて、其主良忠の病死にはかなみ、「雲とへだつ友かや雁の生きわかれ」の一首を殘して、靈水の人となりしは人の知る處、愛染院内故郷塚あり、郊外鍵屋辻は、世に伊賀越の復讐として名高き、渡邊數馬が荒木又右衛門の助勢によりて、其仇河合又五郎を要擊したる處、驛より二十二町の南にあり、

岩倉峡は巖石の奇を以て鳴る、驛の西凡二十五町、長田服部の二川合して流るゝ處、即ち峡の入口、山相攻むる間奇岩怪石錯立して、或は急湍激して泡沫空を飛ばし、或は深潭渦をなして藍を流す、また塵外の境なり、

赤目四十八瀧は伊賀第一の壯觀、一流の渓水高見山に發して屈曲四里、瀧長坂に至り懸水と爲りて琵琶淵に落ち、更に飛流激湍と爲りて、四十八所の多きに及び、一里にして名張川に入る、中に布曳の瀧は高さ百八十尺に餘り偉觀を極む、驛より六里、

名張川青嶂の間より出でゝ、青嵐翠微を浮べて水色縹碧、淵となり瀨となり、以て梅あるの村を貫く、蓑蓙拙堂以來、月ノ瀨の勝已に天下に藉甚す、此地怪石紛錯して梅と雄を爭ふ、河心亦巉石疎峙し、流水石を嚙んで驚奔怒號す、拙堂の記、水石の奇に及ばざるは惜むべし、溪また杜鵑花多し、夏月毎に花燃えて水猩血色をなす、これ躑躅川の稱ある所以、月ノ瀨の遊、豈梅時のみを選ばむや、上野よりは四里、島ヶ原よりは二里半にして至るべし、

汽車木津川に沿うて笠置山麓を走る、四邊の風光一幅の畫圖を展開せるが如し、笠置は山高くして一片の白雲峯を埋め、谷深くして萬仞の青岩路を遮る、古は笠置寺、岩に架し崖に倚りて、殿閣宏壯なるものありしかど、元弘の亂一山焚燬し盡して、今殘坊を存するのみ、行宮の址荒草離々として方三百歩、「さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし」悲痛感慨去るに忍びざるものあり、山上岩石の名あるもの多し、驛より山頂まで十町に過ぎず、山麓笠置温泉あり、木津川の鮎漁は浴客の一興、

「奈良七代七堂伽藍八重櫻」九重の都なりし古も、星と霜との數を積みては、瓦に内裏の古を偲び、礎に寺の面影を悲しむばかりの處多かれど、なほ當代の神社佛閣の現存せるものあり、誠に我邦文藝美術の淵叢ともいふべきにや、四人皆て此地に遊んで、其山容水態の溫藉優雅なるを見て、奈良の風物は佳酒の如し、人をして美情煕々眠りを思はしむといへりと、まことや足奈良に

入りて、先づ溫然たる若草の山に對する時は、歩行自ら緩かに、衣帶自ら寛ぐを覺えむ、

春日神社、東大寺、興福寺の境内は今奈良公園といふ、規模の大、風致の美他に比すべきものもあらず、驛より直路猿澤の池畔に至り、衣掛柳に采女の古を悲み、石階を登れば興福寺址、尙南圓堂、北圓堂、金堂、五重塔等を存す、南圓堂は八角寶珠形の堂宇、丹老い碧褪し古色偏に愛すべし、東金堂の前、弘法手植の花ノ松あり、淸陰百歩の地に敷いて花よりも麗なり、一ノ鳥居を潛れば春日神社の境内、春日野の平蕪草色煙の如く、幾群の鹿悠々徘徊して、能く人に馴る、白藤ノ滝に汗を流し、衆路の左右に立てる燈籠の數を讀みて社頭に至る、廟宇の華麗また言ふを須ゐず、祭神四座四宇百五間の廻廊左右に度り、千餘の釣燈籠錦華花の如く古色掬すべし、廟の背後に峙てるは春日山、一山鬱蒼として頗る佳色あり、「青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」三千里外遊子をして、故郷の月を想ひしめたるは卽この山なり、若草山はまた手向山ともいふ、滿山小芝生にして翠麗を被るが如く、形容溫雅笠を覆せたるに似たり、春燒の眺殊に雅趣多く、兒女鹿衣

奈良公園の鹿

して遊べる狀、宛然たる土佐家の圖樣、之に對する久しうせば將に眠に落ちむとす、手向山八幡宮は楓の名所、紅葉のにしき神のまに〳〵、當家の詠によりて世に名高し、社を過ぐれば東大寺、二月堂、三月堂、四月堂、中に二月堂は山腹に倚りて眺望佳なり、大佛殿は卽ち寺の中堂、樓門仁王の巨像あり、人いまだ大佛を見ざる前に先づこの雄偉に驚く、大佛は結跏趺坐五丈三尺五寸、仰望氣魄を動かさざるものなし、掌上十數人を載せて尙餘地あり、鼻孔或は人を容るべし、想ふこれ一千二百年前の鑄造、また世界の珍とすべきものならずとせむや、

郡山驛附近、藥師寺、唐招提寺、西大寺巡拜すべき名刹少なからず、法隆寺驛に至れば北十三町法隆寺あり、寺は卽古の斑鳩寺、用明天皇の願に因り、推古天皇の旨を奉して、聖德太子の建立せられしもの、歷朝勅願寺中第一の古刹なり、伽藍の結構配置恰も人面を形成す、これ佛面伽藍の稱ある所以、金堂、五重塔、中門、共に元明朝再興の儘にして、推古式建築の典型を遺す、識者推重して天下無比の貴寶となす、宜なりと言ふべし、富の小川の法の水とこしへに流れて、永く我邦の誇たれかし、背後の梵天山風光佳なり、

「千早振神代もきかず龍田川からくれなゐに水くゝるとは」紅葉の名所として知られたる龍田は、王寺驛より東北二十町、「渡らば錦なかや絶えなむ」景色は夏になれど、楓葉淸流と帶映して雅趣言ふべからず、

郡山驛　法隆寺驛　王寺驛



信貴山歡喜院は驛より三十三町、信貴山の東半腹にあり、毘沙門堂、護摩室、多寶堂等懸崖の上に倚り、樓閣漂渺、壺中の趣を具ふ、近時境内に遊園を拓き、爲に一入の雅趣を加へぬ、

# 紀伊路

三輪驛

奈良より南して三輪に至る、驛の東二町、三輪山の西面大神大物主神社鎭まり坐ます、國土修成の功神、古來國家の崇奉する處なり、山は孤峯峻拔にして林樹背惣たり、眺望群山に異なり春日の三笠山と比すべし、泊瀨川山南を繞りて三輪川の稱あり、諸曲鉢ノ木に「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕くれ」かやうに詠みしは大和路や、三輪ケ崎なる佐野のわたりといふはこの邊か、社前三輪の茶屋あり、長谷寺は驛より五十町初瀨にあり、佛殿山に倚り高きにあり、堂塔諸宇四傍に散在し、儼然たる大伽藍なり、古より衆者盛に初瀨詣の名あり、

櫻井驛

櫻井驛に至る、談山神社は驛より五十町、多武峯の半腹にあり、藤原鎌足を祭る、社殿宏麗にして四境幽邃、世に西の日光と稱す、

たづれ來てこゝも櫻の峯つゞき

雅章

吉野泊瀨の花の中宿

吉野川の風光

畝傍驛

「神代をもかけてぞしのぶ玉だすき畝傍の山を今日し見つれば」畝傍驛より八町、一座の丘陵他に連接せず、頂上畝傍明神あり、神功皇后を祭る、叢鬱たる樹林之を圍繞して幽邃の境たり、麓に皇祖神武天皇の御陵あり、御陵の南方數町、橿原神宮立たせ給ふ、地は神武創國の皇居の址、國家鼓舞祥の基地、衆者襟を正して、帝業の偉大なるに感泣せむ、

壺坂驛

高田より南壺坂驛より二十五町、壺坂寺あり、古今不易の名藍なり、寺を去る八町、高取山の半腹、巨巖所々に起伏し、其面に佛像を彫刻す、これ有名なる五百羅漢石にして卽ち奥ノ院なり、

吉野口驛

吉野は吉野川の南金峯山の下、爽塏に據りて村をなす、吉野口驛より二里なり、六田渡より金峯に至る一里餘、寺社民家景勝を相して相並べり、櫻花萬朶の絶景は今說かずもがな、吉野朝廷四十年、蒼冷萬古の事蹟を傳へて「吉野山嵐のおくは知られども見ゆるかぎりは櫻なりけり」の風雅の地、「眉雪老僧時止掃、落花深處說南朝」この歌書よ

りも平常に悲しき悲情なる山となりぬ、懐古賢勝の寄推して天下第一とする宜なるかな、蔵王堂、吉水院、吉野行宮址、如意輪堂、吉野陵、太平記を讀んで涙を禁じ得ざりしもの、更に此處に至りて古に泣くべし、

みやこたにさびしかりしを雲はれぬ　みだれの空

吉野の奥のさみだれ　後醍醐御製

「吉野川その水上をたづねれば葬かしづく萩の下露」その露しづくも集りては大川となり、吉野山林の運輸一に此川による、宮瀧、大瀧、蜻蛉瀧、流水石に激して急湍となるもの多し、「鮎の子の心すさまじ瀧の音」、鮎は古來この川の名産なり、宮瀧の四、上市町の東、川を挾みて相對せる丘陵あり、これ古歌に名高き妹兄山、

兄の山にたゞに向へる妹のやま　ことゆるすやもうち橋わたす

汽車紀伊に入りて高野山、橋本驛よりは四里、高野口驛よりは三里なり、山は伊都郡の南偏に盤踞し、横亘數里山上今高野村といふ、此四面高嶺平原幽境の地は、即空海の金剛峯寺の盤城にして、周圍十三里僧坊百三十餘、結構壯麗言語の及ぶ處にあらず、名所圖會に四時の風景を敍せる、頗る面白し、「郭公はおのが五月の時を逆へすしば〳〵聲ふり出で、五月雨暗き樹の雫にぬれひつつ、黄泉路よりの言傳を談るに似たり、土さくる六月七月も暑さいと薄く、麻衣を著ることなく、老僧などは綿入の衣を重ねて著るもあり、夕づけても蚊の名のり絶えて聞えず、宵ながら明け行く月影も、そぞろに身にしむ心地して、起き伏し甚安ければ、暑を避くる爲に來り遊ぶ風流男も多かり、八月ばかりよりは霜うちさやぎて、谷々の鹿の聲いと悲しく、一夜宿かる旅人も、うき世の夢を覺して曉の袖を絞るめり」と近時夏期登山の人いよ〳〵多きを加ふ、

稻妻や座禪のこゝろ引いて見る　也有

「父母のめぐみも深き紛河寺ほとけのちかひ氣もしの身や」紛河寺は紛河驛の北八町、堂は壯嚴巍々として殊勝極りなし、鐵軌和歌山に至りて盡く、地は德川氏親藩の舊府、市の中央特起の岡阜、和歌山城址あり、天守閣尚依然として仰ぐべし、市より南して和歌浦に至る其間一里餘、行樹翠を交へて逍歩輕し、西は歌枕に名高き吹上の濱、今古の俤だになし、東は片岡辯天山、今公園となれり、雜賀崎より毛見崎まで、和歌村紀三井寺村の江灣は即和歌浦、和歌村の南一條の沙嘴あり、延長二十町に及び内灣外灣を隔つ、これ出島にして天ノ橋立、三保ノ松原と地形を同じうす、古松白沙の間に僅塞し、時に仙禽の大空に長鳴するを仰ぐべし、紀三井寺は浦の東岸名草山の西端にあり、樓閣翠微をぬきんで、丹青波瀾に俯し、雲樹に映發しては、天台の霞蒸るかと疑はる、和歌の浦には名所が御座る一に權現と謠はれしは、玉出島の北なる伽羅山の東照宮、金碧目を驚かすもの此宮を推すべし、岡下南龍神社あり、

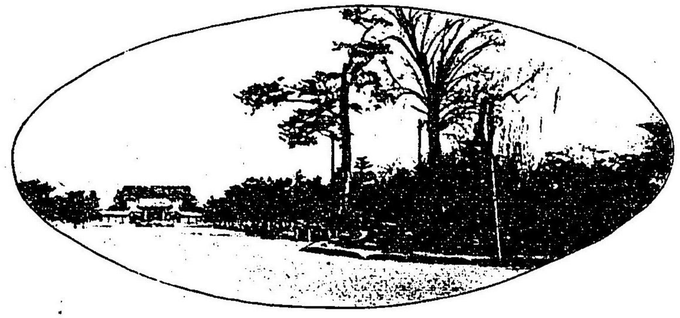
和歌の浦にしほみち來ればかたをなみ　葦邊をさして田鶴鳴きわたる　赤人





京都は山紫水明の地、東山の麗四山の翠、鴨河の清大堰川の奇、一容一態其趣なかへて人を厭かしめず、淹留旬日尚戀々として歸去來の嘆なからしむ、まして桓武の帝の此處を大宮處と定め給ひしより、七十二朝一千百餘年の星霜に織りなされたる、美術工藝の花の匂は、また世に比すべきものもあらず、なべて世の美といふ辭は、唯此里にのみ占められて、山水の美、樓閣の美、風俗の美なると共に、人もまた美の美を抜き、粹の粹を抽きて、鴨東の艷色音ならず、翳す扇に靡る秋の風に吹かれては、人の心も和らぐべし、

御所は驛より三十町、外郭を大内御苑といひ、南北凡七百間、東西凡三百八十間、長方形を爲す、御所は中央稍偏西北にあり、南門を建禮門と曰ふ、前殿は即ち紫宸にして、其正門を承明と爲す、清涼以下の後宮内殿其北に羅列す、明治二年三月車駕東遷、東京に宮城を定め給ひしより、此所別宮となれり、されど尚大號を存し、皇宮殿、寢陵清程其觀を改めず、即位の禮、及大嘗會の大式、永世茲に行はせらる、蓋桓武帝の遺範を率修せらるゝもの、洪謨無窮嘗望に餘あり、



京都御所

「蒲團著て寐たる雲や東山」北如意嶽より南稻荷山まで鴨東三十六峯、總して東山といふ、形容溫藉にして嶋峻の狀なし、圓山公園、知恩院、八坂神社、長樂寺、其他世に知られたる勝地、概此山の中腹より麓に相連り、巡遊數日尚日の足らざるを思ふ、

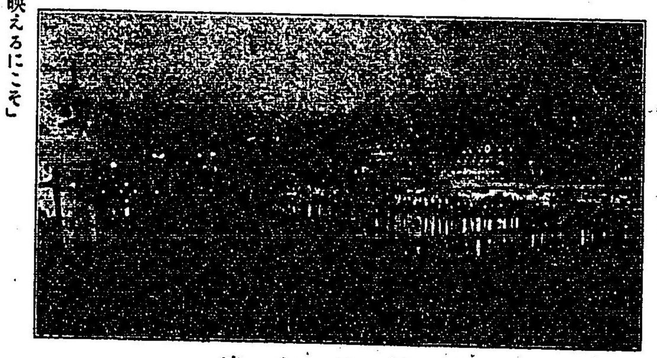
清水寺は洛中眺望第一の稱あり、堂宇の奇巧また見るべし、南蛭淺淵一縷の水あり、これ世に名高き音羽ノ瀧、方廣寺はまた大佛殿とも號し秀吉の創建する處、洪鐘あり銘中の國家安康の四字、遂に大阪役の原因を爲し、豐臣氏の滅亡となりぬ、大佛殿の南豐國神社あり、社後の阿彌陀ケ峯は、即ち蓋世の英傑の骨を埋むる處、寛永年間豐國廟壞せられしより、風雨三百年、唯慈記によりて、その雄大魂魄なりしを偲ぶのみなりしに、今や枯骨再び花咲きて、偉大なる壁域を見るに至る、亦昭代の餘慶乎、社前耳塚あり、

京都の地殆んど神社佛閣を以て埋む、今其名目を掲ぐるだに數頁尚足らざるべし、帝都既に東に遷りて、痛く舊時の繁華を殺がざるもの、豈に蒼者四方より至るが爲ならずとせむや、平安神宮は實に此地第一の尊崇の的、桓武の帝を祀る、前に疏水運

河を廻し、後に聖護院森の翠緑を負ひ、瀑布あり泉池あり、清掃拭ふが如し、社前の模造大極殿、結構往時の半に及ばずといへども、尚古の盛觀を偲ぶべし、北野天滿宮、平野神社、上下加茂神社、貴船神社、松尾神社、醍醐神社、梨木神社、建勳神社神威仰ぐべし、寺は西本願寺、現今の御堂は寶暦十年の創造に係り、頗崇壯なり、唐門は東山豐國廟の舊構を移したるものにて、彫刻精妙を以て著る、摘翠園あり、其飛雲閣は聚樂第の遺物、亭榭水石の美、夙に好事者の推す處なり、東本願寺は近時の建築、堂宇の壯麗壯偉天下無雙と號す、金閣寺、銀閣寺義滿義政の風流奢侈想ふべし、東寺は一千餘年大災巨害を被ることなく、佛神の呵護空しからず、經像圖書の寶藏、海内第一なり、三十三間堂、建仁寺、獅の中山清閑寺、南禪寺、壬生狂言の壬生寺、牛祭の廣隆寺、一休の大德寺、尊氏の等持院、御室の仁和寺、遊杖至る處空しきことなし、

「川風や涼衣きたる夕涼」鴨川の水源深として流るゝ處、涼風一味已に夏なし、四條橋は東祇園の花街に接し、四に先斗の狹斜あり、白雨一過塵を洗うて、晩涼人に可なるの時、東山の翠巒漸く紫に、鴨川の水漸く明に、水樓遠近に湘簾を捲き、涼臺洲渚の上に設けられ、燈を懸け琵琶を奏いて客を迎ふ、玲瓏の月上に照り、清淺の水下に流る、「檜隈の畫には愛宕の雪を思ひ、花筵の花には音羽の嵐をさそふ、まして皆月をむかへ有明を惜める、こゝに四時の風景を集めて、そよ時鳥いづち行くらむ、況や都人の錦繡を飾り、蝶鳥の香も風におふらむ、夜はひと際もの〳〵映えろにこそ」

行きちがふ舞子の顔やおぼろ月　紅葉



鴨川の夕涼

嵐山は大堰川の南岸、京都線嵯峨驛より五町のみ、月明に對して想夫戀を彈ぜし小督の昔は何處か、祇王祇女の祇王寺、横笛の三寶寺皆途にあり、川に沿うて長松一路三軒屋あり、春麗嵐山山下樓といふ、雅客の山水掩映して尋常に新なり、

大堰の川、嵐の山、已に幾多の人に其美を歌はれぬ、春花秋葉また說かずもがな、白沙青苔水明に山紫に、全山樹木鬱蒼として壁立一千尺、雪旦月夕可ならざるの時なし、長橋あり、この勝境に導く、これ所謂渡月橋、橋下奔流矢の如し、水底の石玉の如きもの皆沿川疏鑿の功を成し、角倉了以の像この閣内にあり、山の廣延二十町、斜に西北に向ひて深淵となる、所謂嵐峽これなり、舟遊の樂あり川の上流は則保津の急瀨、亂石奔濤の奇あり、遊子先づ汽車にて亀岡に至り、路路川舟を儀へ、杜鵑花咲く比最可なりとす、峽中石あり水之と鬪うて下る、流れては渦となり、停りては淀となり、懸りては泉となり、激しては湍となる、舟子巧に一竿を操





り舟を行る、舟の下るや箭よりも早し、兩岸の風光須臾にして百變す、亀岡より嵐山の麓まで流程四里、唯一時間を要するのみ、

高尾神護寺、槇尾高山寺、栂尾西明寺共に紅葉の名所、世に三尾山の稱あり、楓葉の美豈秋のみならむや、涼風手葉を弄ぶ時清陰最愛すべし、しかも清瀧の清流屈曲する處、三尾相竝んで西崖に臨む、楓葉千章兩岸を挾みて、此地未だ皆て夏の暑きを知らず、

二條驛より一里餘にして至るべし、

平等院は京都支線宇治驛より五町、驛を下りて市廛の間を過ぎれば宇治橋、水色緑碧流るゝこと甚駛し、橋の西は橘ノ小島、「平等院の艮方橘の小島崎より武者二騎かけ出でたり」盛衰記の妙文思はず口をついて、佐々木梶原の二勇士が、渡川の先を爭ひし昔偲ばる、橋を渡れば二町にして平等院に至る、佛殿を鳳凰堂といひ、本堂兩翼及後尾より成り、屋上銅鳳あり、結構壯麗美麗絶倫なり、往年米國市俄古大博覽會の際、政府本堂の模造を彼地に建て、平安朝時代の樣式を示して、世界の目を驚かしたるは、今尚記憶に新なる處とす、觀音堂の堂傍を扇芝といふ、これ「埋れ木の花咲くこともなかりしに」と歌ひつゝ、源三位頼政の居腹したる處、風雨七百年短草昔ながらに青し、また悲しからずや、

「鮒多の手だうちもらされの盤かな」宇治の流盤は古來已に幾多詩人の品題に入れり、舟遊の興いかに多しとはするぞ、若しそれ宇治は茶所茶は緑所、薫風五月、村娘幾隊茶圃に下りて芳芽を摘むの時、一樣の藍裙一樣の笠、一唱一歌相答へて日の斜なるを知らず、遊子また欲發の輕きを覺えざらむ、

摘みやれおつみやれ、宇治の里の茶摘、はたち餘りは茶の花よ、甘の人の木と背いて、茶といふ文字によむわいな、伊豫簾おろしてちやとつみやれ、

嵐峽の舟遊

比叡、愛宕、鞍馬は京の三山、好箇の避暑地、遊子は淹京の數日を、この登山に割愛せざるべからず、

巍然として市の東北に聳え、蟠蟠方五十餘町、山城近江兩國に跨るものは比叡山なり、山勢峭峻絶頂を大嶽といひ、東傍延暦寺中堂あり、大嶽の西北、四塔の峯勢北走して、大原魚山の嶺となり、横川嶺大嶽と一縱谷を隔て、東北に横亘す、四明峯無動寺は大嶽の南にあり、琵琶湖を眼下に望み、沿岸の好景恣にすべく、京都より淀川の末、また矚目の中に入る、四嶺三塔共に、幽遠の勝を占め眺望の遠を攬れり、老杉喬松峯を掩ひ谷を埋めて、陰鬱靈尚暗き處あり、秀巒峻嶽空に聳え雲に峙ち、明媚天亦近き邊あり、近時内外人の晏月を此處に過すもの多き宜なりといふべし、近江の坂本より中堂まで二十八町、これを東坂といひ、山城の修學院より四十町、これを西坂といふ、

愛宕山は嵯峨村の西北、一ノ鳥居より登路五十町、杉檜路を蔽ふ、土盤投の戲

あり、執て空中に抛ては、恰も飛鳥の如く輕揚し、久しうして始て深谷に墮つ、また佳興なり、項上愛宕神社あり、東嶺大鷲峯の月輪寺、登臨最閑靜の地、謂ゆる十六州の山河目前に呈はる、

鞍馬は市北方の名嶽、三條大橋より三里、山の半腹鞍馬寺あり、其西北に貴船山神鎭座す、枕草紙にいへる「近くて遠きもの鞍馬のつゝらなり」とは、山下より寺門にのぼる坂路を言へるなり、亭々たる老杉金山を掩うて、凄冷肌膚に迫り、巍々たる怪岩巡路を遮りて、攀躋幾度か昏倒せむとす、寺の西北十町僧正谷に魔王堂あり、俗說鞍馬天狗の栖居とす、巖石樹林の態翠常にあらず、岩面刀痕を殘すもの、これ遮那王牛若丸の修業の迹、

今や奈良京都附近の勝地を說きて、更に西に移らむとするに際し、尙一事の遊子に奬むべきものあり、皇陵巡拜のことそれなり、方今四海九澤皇風を仰ぎ、文明昌大の美化、萬國に秀づる所以のもの、一には列聖の德澤、宏遠深厚なるの致す處たらずんばあらず、而して歷代の山陵は、我邦の鎭護として、我等黎民を萬代無窮に守らせ給ふ聖域なり、されば我等臣民たるもの、報本の義を明にせむが爲め、列聖の靈域に稽顙して、尊嚴なる遺蹟を仰ぎ、謹みて歷代先皇の德を同想して、以て忠孝の情を發ふことを勉めざるべからず、かの佛敎に於ける靈場巡拜の如き、四國巡禮といひ、四國遍路といひ、或は秩父坂東に、或は京地熊野に、名山大澤を探りて、親しく佛光の靈氣に打たれ、以て偉大なる感化を受くるを思へば、山陵歷拜の如き、亦我國民の志氣を發揮する一助たるなからむや、神武帝より孝明帝に至る、御代一百二十、北朝の五帝を加へて百二十五帝なれども、重祚の二代を減じて百二十三帝なり、然れども一の御陵にして、數代の御靈を鎭めまゐらするものあるが爲に、帝陵の所在地は、實に九十二箇所、十箇國に渉れり、中に和泉は堺市の東南に近く、仁德、履仲、反正の三帝陵あり、攝津は高槻驛に近く繼體の御陵あり、近江は大津に弘文の御陵あり、丹波は山國に光殿、後花園の二帝陵あり、淡路は福良港に近く、淳仁の御陵あり、讃岐は鴨川驛に近く、崇德の御陵あり、長門は赤間關に安德の御陵あり、其他は山城に四十一箇所七十二帝陵あり、大和に三十箇所三十一帝陵あり、河內に九箇所十二帝陵あり、いづれも鐵道線路よりさして遠からず、遠隔の御陵を除かば、巡拜一週日にして終るべし、山城大和河內は山陵多きが故に、左に各方面にわけて巡拜の栞とせむ、

山城國

(一)御室嵯峨方面、い金閣寺附近、花山、三條、二條、ろ龍安寺、宇多、一條、堀河、後朱雀、後冷泉、後三條、は御室附近、光孝、村上、圓融、に嵯峨附近、嵯峨、文德、後嵯峨、龜山、後宇多、後龜山、ほ水尾、清和、

(二)乙訓郡へ大原野、淳和、と海印寺村、土御門

(三)伏見山科方面、ち桃山、桓武、光明、崇光、り深草、仁明、後深草、伏見、後伏見、後光殿、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成、ぬ竹田、白河、鳥羽、近衛、る東福寺、仲恭、を泉涌寺、後堀河、四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝、孝明、わ醍醐、醍醐、朱雀、か山科、天智、

(四)東山一帶、よ三十三間堂、後白河、た清閑寺、六條、高倉、れ粟田口、花園、そ鹿ヶ谷、冷泉、つ神樂岡附近、陽成、後一條、後二條、

(五)大原、ね勝林院、後鳥羽、順德、

大和國

(一)奈良附近、い奈良、開化、元明、元正、聖武、ろ佐紀、平城、は平城村附近、垂仁、成務、安康、孝謙、に春日、光仁、

(二)櫻井附近、ほ柳本、崇神、景行、へ忍坂、舒明、と倉橋、崇峻、

(三)畝傍附近、ち畝傍山周圍、神武、綏靖、安寧、懿德、り石川、孝元、ぬ鳥屋、宣花、る飯合村、欽明、天武、持統、文武、

(四)吉野を如意輪堂、後醍醐、

(五)御所附近、わ三室、孝昭、か掖上、孝安、よ軍木、皇極、

(六)王寺附近、た王寺、孝靈、れ志都美、武烈、そ下田、顯宗、

河內國

い千早、後村上、ろ嶋泉、雄略、は道明寺村、允恭、に磐田、應神、ほ長野村、仲哀、ち古市、安閑、り磯長村、敏德、ぬ用明、る山田村、推古、孝德、



成、後一條、後二條、

(五)大原、ね勝林院、後鳥羽、順德、

(一)奈良附近、い奈良、開化、元明、元正、聖武、ろ佐紀、平城、は平城村附近、垂仁、成務、安康、孝謙、に春日、光仁、

(二)櫻井附近、ほ柳本、崇神、景行、へ忍坂、舒明、と倉橋、崇峻、

(三)畝傍附近、ち畝傍山周圍、神武、綏靖、安寧、懿德、り石川、孝元、ぬ鳥屋、宣花、る飯合村、欽明、天武、持統、文武、

(四)吉野を如意輪堂、後醍醐、

(五)御所附近、わ三室、孝昭、か掖上、孝安、よ軍木、皇極、

(六)王寺附近、た王寺、孝靈、れ志都美、武烈、そ下田、顯宗、

河內國

い千早、後村上、ろ嶋泉、雄略、は道明寺村、允恭、に磐田、應神、ほ長野村、仲哀、ち古市、安閑、り磯長村、敏德、ぬ用明、る山田村、推古、孝德、

## 浪速路

名殘に戀さぬ京を後に大阪へと志す、山崎驛を過ぐればはや浪速ノ國なり、驛の前面巍然として屹立するは天王山、山崎の弔合戰、秀吉此山を得て勝を制す、山頂の眺望秀麗なり、水無瀨宮は驛より十町、承久の三帝を祀る、ふるき軒端のしのぶにも尙あまりある昔なりけり、石清水八幡宮は男山の上にあり、伊勢に次げる國家第二の宗廟として、朝廷の崇敬公武の歸信厚かりしほ、皆人の知る處、壯嚴麗殆んと言語に絕す、驛より一里十町、

大阪驛

大阪は本邦第二の都府、海內無雙の商業地なり、市內大小の運河四通八達舟楫の便を備へ、南方攝津灣を控へて海陸交通の便を全うす、まことや大阪は水の都なり、河流の橋梁幾百、中に難波橋、天滿橋、天神橋を三大橋と稱へ、長さ百十五間乃至百八十八間に及び、構造の偉外觀の麗、本邦稱に見る處なり、夕陽西に春づけば、淀の川瀨に燈火の影滿天の星と落ちて、風にゆらるゝ柳の絲の、招く手振りに月ほのめきて、往き來るさの涼舟、目もくるめかむばかりな

く波青き處に通ず、風光甚佳なり、近時海水浴場の設あり、堺、濱寺共に形勝の地、四に面して茅渟の海を控へ、淡路島眠るが如く波に浮ぶ、また海水浴の適地とす、

箕面ノ滝

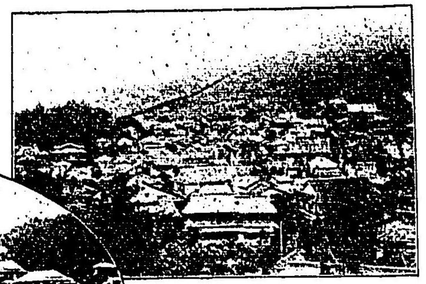
汽車神戸に至りて東海道線こゝに盡く、驛を下りて先づ訪ふべきは湊川神社、社は驛より僅に一町を隔つ、落々たる長松の下碑あり、高さこと一丈、これ水戸黄門の修せられし嗚呼忠臣楠子之墓なり、殿廡門垣の結構壮麗を極む、此地もと空野寂々、一堆の荒塚を見るのみなりしが、方今神戸第一の繁闠巷と爲れり、湊川は即正成戦死の地、堤上花樹を栽植して遊園地となす、和田岬は兵庫の南端に突出せる海濱にして、岸頭舊砲臺及燈臺あり、海を隔てゝ紀泉の翠黛と相對し、淡路島手を伸せば正に捉へ得べし、展望秀絶市第一の名勝たり、

三ノ宮驛の東北五町生田神社あり、社後の森林は生田ノ森、壽永の役に於ける樫原源太箙の梅の風流は、また知らざる人なけむ、生田川の源流布引山の中腹、二條の瀑布懸れり、布引温泉の前を過ぎて坂路を登れば二町にして雄瀑、尚三町にして雄瀑、削れるが如き岩石を傳うて落下せる狀、白布を敷くが如し、瀑の上方を滝谷といふ、一條の幽淵また探遊に可なり、誓訪山は再度山の山口にして諏訪明神あり、老樹森々たり、地甚高からずと雖眺望遠大なり、東麓諏訪山温泉あり、布引と并稱して此地の二遊所とす、歴耶山は六甲山中の一峻嶺、山麓より十八町の嶮路、七折の難所を過ぎて、山頂に達すれば忉利天上寺あり、大阪灣の風光を恣にす、阪神の人夏季に至れば、避暑の計を此處に取る、峯陰は即ち滝谷なり、

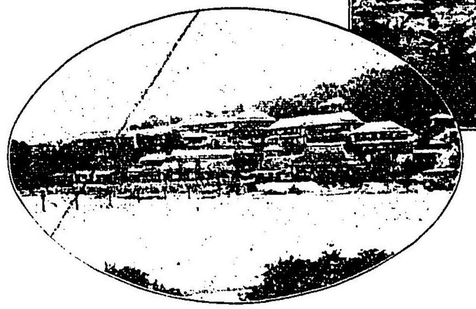
汽車神峠より岐れて舞鶴に至る、池田驛より東一里半にして箕面ノ公園あり、園中の滝安寺は役小角の草創に係り、本尊の辨財天は竹生島、江ノ島、殿島に並び四所の辨天宮といふ、寺より滝に至る十八町、楓樹滿徑日光を遮り、渓水夏しら波を起て〜流る、楓葉きて松來り、水窮りて石出づ、巨岩嵯峨して層屋の如きものあり、唐人戻と稱す、滝は幅三間高さ四十間、鞍轡山谷に







寶塚鑛泉



有馬温泉

震ひ壯快言語に絶す、楓は其勝高尾に優り、瀑は其雄那智に亞ぐといふ、

紫雲山中山寺は中山驛より七町、聖德太子の建立に係る、香煙常に荐虚に靡びき、鐘聲遠に白雲に響く、山嶽の遠望甚佳なり、蓬萊山清澄寺は中山寺奥院の西南十町餘、米谷の山中にあり、方丈の庭園は支那廬山の風景を模擬せしもの、幽麗酷だ愛賞するに堪へたり、荒神あり、寶塚驛よりは東十五町を隔つ、字多天皇の勅建に係る、境内日本第一清驛のある處は寶塚ノ温泉地、後に兜山を負うて、武庫川の清流に臨み、風色明媚なり、生瀬より武田尾を經て道場に至る此間約八哩、汽車武庫川の河峽を縫うて過り隧道十一あり、本邦鐵道中有數の難關にして、碓氷の絶嶮と并稱せらる、其間奇勝多く耶馬溪に讓らず、碧潭池塘の如く蛟龍茲に潜むかと思へば、飛瀑巖隙に懸りて雷鼓の響を發す、一條の棧橋危く溪水を渡るに便し、閑散なる漁翁靜に深淵に垂釣す、車窓の眺望また飽く時を知らざるなり、若しそれ遊子一日の閑を吝むなくんば、茲に武田尾鑛泉あり、一浴して奇勝を探る亦可なり、

有馬温泉は近く京畿の山に在るを以て、古より著聞す、而も其湧出盛にして效驗多きが故に、今に至りて益〻興る、湯山は六甲山の北麓、三面山を以て包まれ、北の一方僅に開けたり、海抜一千一百尺極暑八十五度に上らず、大氣清淨避暑に適す、浴場の構造宮殿に擬せり、上谷に妬泉あり形盆池の如し、女子盛裝して之に臨めば怒吼して止まず、明目泉はよく翳を除くといふ、鼓瀧松風、有明櫻春望、落葉山夕照、温泉寺晩鐘、功池山秋月、有馬富士雪、これを有馬六景と唱ふ、三田驛より南二里半なり、生瀬驛よりも行路略同じ、途上翠巒縈迂渓流紛糾して巨巖甚多し、四十八瀬の名あり、

有馬富士麓のきりは海に似て
なみかと聞けば小野の松風

花山院御製

# 播磨路

## 須磨驛

神戸より西行すれば、軌道次第に海濱に接近して、青松白沙の間を縫ふ、兵庫より姫路に至るまで、右は翠巒迴りて屏風を樹て、左は紀泉の山遠く煙をなし、淡路島近く呼べば應へむとす、須磨は水碧沙明太だ優雅の地、加ふるに源氏の君、行平の風流、平門一時の夢などを粉彩して、旅情豐なり、風土特に腳氣患者の轉地療養に適す、驛より八町須磨寺あり境内今遊園となる、寺寶に敦盛の青葉笛、武藏坊弁慶の若木櫻の制札と傳ふるあり、驛の西北に巡ゆるは鐵拐ヶ峯、一ノ谷より二ノ谷、三ノ谷と打續き ぬ、九郎判官が險阻を横絶し、直に一ノ谷城の背を突きて奇捷を博せし、朝越は嶽の北、谷の上方に清水帝の内裏跡あり、翠華一たび去て春秋七百歳、今唯松風の昔を語るあるのみ、

## 鹽屋驛

鹽屋驛の東十一町海に近く五輪石塔あり、北條貞時平門修福の爲に建る處、何の世よりか敦盛塚と呼び做したり、塔の前に蕎麥を賣る家あり、敦盛蕎麥といふ、諺あり、「そばは敦盛あんぱいは義經、大茶碗に鐵拐やまもり、それを知りつゝ九郎判官、うどんは色の白い玉織姫、酒は一ノ谷源平躑躅のもとはく、三うらの大杯で一盃飲めば顔は辨慶、座敷は千疊敷水は帆掛舟、紀州熊野浦までやりっぱなし、お茶はせったい陽摩守たゞのみ、御遊處のお方は惡七兵衛、食ひ逃げしたら後に平山、草鞋は熊谷の陣屋の草鞋、破れるまでは受合に候」と、塔の西七町細流あり歩渉すべし、これ攝播の界川なり、

かたつむり角振り分けよ須磨明石

はせを

## 舞子驛

舞子は紀淡海峽の潮流緩和にして浴場として賞賞の壁高し、舞子は紀淡海峽の潮流、其海岸に舞込み來るを以て、舞込ノ濱と呼ぶに至れるが、今は避暑の爲に旅客の舞ひ冒へりしを、後訛傳して舞子ノ濱と呼ぶに至れるが、今は避暑の爲に旅客の舞ひ込む濱となれり、松は皆高さ二三丈に過ぎず、概其枝を寄うして枝幹屈曲す、高きは舞ふが如く躍るが如く、低きは伏すが如く蟠るが如し、一樹に一樹の趣態あり、百樹に百樹の風韻あり、砂はさながら白玉を散するが如く、南明石海峽を隔て〜近く淡路島と相點頭さ、青松碧波一色をなす處、白帆ノ一片其間を縫ふ、附近古墳散在す、また浴閑の一樂事、

## 明石驛

汽車檜の如き舞子ノ濱を過ぎて明石に至れば、西北三町一群の老杉森然たる中に、高く白堊の聳見するを見る、これ明石ノ城、城に續ける丘陵は人丸山にして歌聖

須磨寺



川の西は明石の里、鹽屋は一小村に過ぎざれど、驛前潮流緩和にして浴場として賞賞の壁高し、舞子は紀淡海峽の潮流、其海岸に舞込み來るを以て、舞込ノ濱と呼ぶに至れるが、今は避暑の爲に旅客の舞ひ冒へりしを、後訛傳して舞子ノ濱と呼ぶに至れるが、今は避暑の爲に旅客の舞ひ込む濱となれり、松は皆高さ二三丈に過ぎず、概其枝を寄うして枝幹屈曲す、高きは舞ふが如く躍るが如く、低きは伏すが如く蟠るが如し、一樹に一樹の趣態あり、百樹に百樹の風韻あり、砂はさながら白玉を散するが如く、南明石海峽を隔て〜近く淡路島と相點頭さ、青松碧波一色をなす處、白帆ノ一片其間を縫ふ、附近古墳散在す、また浴閑の一樂事、

汽車檜の如き舞子ノ濱を過ぎて明石に至れば、西北三町一群の老杉森然たる中に、高く白堊の聳見するを見る、これ明石ノ城、城に續ける丘陵は人丸山にして歌聖人丸を祀れる祠あり、祠前の眺望實に須磨明石一帶の風光を占斷す、海水浴場は驛より南八町、水清く波靜にして白沙青松一條の長堤に連り、淡峽の矚目甚佳なり、中崎遊園といふ、

## 土山驛

岩屋は淡路島の北端須磨明石に對す、海水浴場として名あり、明石より毎日數回汽船往復す、明神宮あり、繪島は岩屋明神の磯邊につゞける一塊の丹石、之を望めば赤珠あまた凝り集れるもの〜如し、石紋自ら人物花鳥の象あり、彫れるが如く繪ける如く玲瓏として愛すべし、寄せ來る波の石を磨して畫文を成したるにや、頂上寶篋印塔一基を安置す、岸壁直峭にして巒ちがたし、島の磐根は平にして席を敷けたる如く、海潮に臨んで潔し、月明の時最賞遊すべし、平家物語に記せる「福原の新都にある人々、名所の月を見むとて、須磨明石を經て淡路の瀬を渡り、繪島が磯の月を見る」の風流を偲ぶも亦一興か、

明石の四、土山、加古川、寶殿、曾根各驛の海岸、播磨名所巡りと稱する名勝あり、土山に下車して西南に向へば、砥の如き坦道參離の間を貫く、一里十町にして別府に至る、住吉神社の華表を入れば手枕松、清隆四十歩の地に布き、龍幹虎枝縱横に蟠蟠す、大枝あり長さ十數間、個個して長蛇の怒れるが如く、中程一風して自ら地上に臂つきて體を支ふ、宛然人の手枕をなせるに似たり、別府より西行二十二町、尾上神社内に相生ノ松あり、雌雄兩松根を同じうして生じ、雌枝に雄葉あり、雄枝に雌葉見ゆ、誠に奇觀なり、相生ノ松に隣りて都戀しき片枝ノ松あり、枝靡く東に向ふ、社前鐘堂なる尾上ノ鐘は神功皇后の三韓より齎らしたまひしもの、風韻凡ならず、之を鳴せば音響則に遙なる海上に澄む、響灘の稱ある所以なり、聖德太子宮居の舊蹟なる鶴林寺に詣で、轉じて加古川の長橋を渡れば、高砂神社内相生ノ松あり、尾上ノ松と同じく、謠曲に隱れなき雌雄合體の奇松にして、千秋の契り日出度、枝葉四方に蜿蜒として偉觀限りなし、順德の御製に「波間より夕日かゝれる高砂の松のうは葉は霞まざりけり」とあるもの、これ、海邊の驛望明媚なり、高砂を後に荒井川に至れば、河心二つに裂けて二箇の長橋之に架り、上流の二橋と相迴りて巨蛟の相逐ふが如し、橋を渡れば伊保崎村、岐路石標あり「右すれば石の寶殿左すれば曾根の松」と、松は曾根天滿宮境内にあり、菅公手植ノ松は、寛政の頃枯木となりて遺株尚存す、碑あり「枯れてなほ千歳の花や曾根の松　蕉風」と刻す、今の松は二代目實生のものにして、齡百數十歳に過ぎざれど、龍幹高さ三丈、周り二丈、枝の長さ十二丈に餘り、恰も一大青傘を張れるが如く、風彩の壯美四所中の第一なるべし、石ノ寶殿は名所中最奇觀を極むるもの、ゆるぐが如き一塊の巨巖、社殿を横さまにせるが如し、方二丈三尺高さ二丈六尺、周圍常に水を湛へて宛も池中に泛べるに似たり、上部土を留めて稚松の雜茂するあり、寶殿の南二三町、山腹一大巖壁あり「觀瀑處」の三大字を刻す、丘上に登れば、山南數里に亙れる郊村の風光より、波靜かなる沿海を瞰望し、家島群島を水面に拾ふ、優美譬ふべきなし、山を下れば坦道一直二十町にして寶殿驛

城ノ崎温泉

寶殿驛

**姫路驛**

に著す、姫路は酒井氏の舊地、城は世に名高き白鷺城、五層の天守閣屹然として半空に聳ゆるを見る、此地播但線の分岐點にして、南は飾磨北は八鹿に至るべし、飾磨は海水浴の適地、家島の群島前面に蒼布し、風光松島に似たり、島巡りの樂あり、

**飾磨驛**

書寫山圓教寺は姫路より北、野里驛より一里半、性空上人の開ける古敎の道場にして、殊に花山上皇の歸依を辱うしたるにより、後人追仰して巡拜霊場の最と爲す、古杉老檜四面を圍み、幽靜自ら別天地の感あり、避暑をかねて登山するもの多し、天叱石、甲岩、如意瀑を始め、奥ノ院には辨慶幼時の學問所、和泉式部の塔、文殊堂等あり、

**野里驛**

汽車但馬に入りて八鹿驛より八里、山陰第一の稱ある城ノ崎温泉あり、城ノ崎川の西岸、來日嶽の麓、北は津居山港を距る一里、海山の勝を兼ねる處、樓屋巍々として避暑の人の至るを待つ、城ノ崎川の末内川村の江流を二見浦と呼び、古來歌枕に名高し、河流稍濶き處、山峙ち石現れ容態頗佳なり、碧海丹巒の勝數里の間に續く、對岸玄武洞の奇あり、志賀氏の日本風景論に「玄武岩聳立の最顯著なるは但馬の玄武洞にして、八角七角六角五角なる黑色堅緻の玄武岩柱、高さ二十尺乃至三十尺なるもの、纍々として排列する、萬千條なるを知らず、柱は七八寸乃至一尺毎に横に裂理あり、故に疊々として幾多平石を累積するが如く、眞箇に天巧の極」と記せるもの即これ、

**八鬼驛**

姫路より西龍野の南二里室津の港あり、これ德川時代西國大名參覲往來の著岸、翠巒三面を包みて江灣一方に濶り、海上千里美景を觀望し、潮徐かに波穏にして、泊舟池中に遊ぶが如し、港に三島ありて雁次す、地の唐荷中の唐荷沖の唐荷といふ、港埼明神山なる加茂神社社頭に立てば、小豆島及四國の山影、遠髣髴として煙らむとす、月明の夜甚美觀を極む、

**龍野驛**

**赤穗驛**

赤穗は那波驛の南三里、城址今唯四方の壘壁と老松とを存するのみなれど、大石屋敷、大石櫻等、元祿の故事を追想せしむるもの多し、華岳寺内長矩三代の墓及義士の墓あり、忠義碑あり、香煙常に絶えず、

**吉永驛**

**岡山驛**

## 後樂園

那波の西、上郡より三石に至る間、汽車は山陽線第一の稱ある舟坂山の長隧道を過ぐ、山は播備の界、備後三郡高德が鑿與を奪ひ奉らむとして果さざりし處、吉永驛の南二十町、新太郎少將の開谷聖堂あり、廟堂以下の諸宇尚存す、山低く水長く竹樹幽邃、祠あり閑谷神社と言ひ、光政公を祀る、

旭川の長橋を渡りて汽車岡山に至る、これ池田侯の舊地、烏城の天主閣雄然として古の壯觀を存す、後樂園は驛より十二町、綱政公の經營に係る、林泉の美斯の如きは稀なり、地は西南稍高くして丘阜の狀をなし、雜樹蓊鬱として宛然深山に入るの感あり、東北は平夷にして、園外の風景亦瞬目の中に入る、園中四箇所の池沼を繫ち、渠を通じて水を旭川の上流より引き、同流して復旭川に入る、一脈の水流、或は瀨となり或は淵となりて、岩を噛み苔を洗ひて迂曲し、以て園の風致を加ふ、延養亭、望湖閣、茂松庵、蘇池軒、流店、一亭一榭眺望各趣あり、仙鶴悠々池畔に徜徉して人に馴れたり、園中十景の選あり、



**庭瀨驛**

**金神驛**

**福山驛**

**尾ノ道驛**

後樂園

借樂園は東山公園といひ、東南三町操山にあり、西は旭川を隔てゝ岡山市一萬の瓦壁を視、南は參籠樂園を掠めて遥に兒島灣を望み、風光明媚なり、人工の美後樂園に及ばざれども、天然の勝却て此處に多きが如し、

吉備開國有功の大祀吉備津宮は庭瀨驛の北一里、祠宇頗る古風を遺して、規模の宏大なる、建築の壯麗なる、安藝の嚴島と其左右を爭ふ、廻廊長さ百八十間、社内御釜の御殿あり、饗者阿曾女に請うて吉凶禍福を卜す、社後の丘岡は即ち吉備の中山、絶頂にある甕形の大塚は吉備津彦命の御墓なり、一條の小流この山に發し、祠域を横ぎりて去る、これ古歌に名高き細谷川、

まがれふく吉備の中山帶にせる
細谷川の音のさやけさ

沙美海水浴場は金神驛より一里十町、地は後に山を負ひて積翠滴るが如く、前面奇岩起伏して沙白く水綠なり、寄島の一青螺近く笑ふが如く、水島、鹽飽の群島遠く眺るが如し、

瀨戸内の海岸至る處風光に富む、中に鞆ノ津、尾ノ道は特に其名聞ゆ、遊子若し福山に下りて、今公園となれる福山城に至り、五層の天主閣の巍然として雲表に聳ゆるを仰がば、更に妙見山より海に沿うて南すべし、二里にして鞆ノ津の勝景已に眸中に入らむ、鞆は瀨戸内海の要津、神功征韓の時、此地に兵船を艤裝し、鞆を以て神明を祭られし故事によりて、此名ありといふ、港形巴字形をなす、故に或は巴津の稱あり、南に玉津島、津嶋島あり、東に辨天島、仙醉島あり、仙醉島の風光最愛すべし、島は皆松、翠色白波に映じて甚けるが如し、六灣あり、西南の灣中海水浴場を設く、海に臨む處眞言宗の巨刹福禪寺あり、海山の勝景を攬り特に一樓を設きて對潮樓といふ、樓の下に横はるは即ち仙醉島、正德年間朝鮮の聘使季邦この地を過ぎりて風光を嘆美し「日東第一形勝」の六字を題したりとて、文場の一典故となりぬ、今樓の欄間に掲ぐるものこれ、後丘沼名前神社あり、社頭の眺觀對潮樓に劣らず、

鞆より海岸に沿ひ西に迂廻すること一里、一岬海上に突出するあり阿伏兎ノ岬といふ、口無ノ瀨戸を隔てゝ田島と相對す、瀨戸は潤さ二鏈にして潮流急なり、漲潮は南方に向ひ落潮は之に反す、瀨戸内海航行の船は、多く此瀨戸を過ぐるを以て、風帆靡煙絶ゆる時なし、峭巖の上大悲閣あり、觀音を安置す、水濱より磴道を開き、廊を造りて之を蔽ふ、廊の中程に鐘樓あり、閣は潮より高きこと九十二尺、欄に凭て下瞰すれば、海山の眺望奇絶、身は空外に懸るが如し、

尾ノ道は備後第一の海市、大寶愛宕の二山其後に峙ち、向島其前面に横はりて一海峽をなす、海山の展望まことに溫藉なり、この風光を恋にせむには、大寶山なる千光寺あり、千手觀音を安置す、堂前數十歩巖石の天に抽するあり、玉ノ岩といふ、傳へい

ふ昔時殿上如意の寶珠あり、夜々光を放ちて海を照せり、玉ノ浦の稱こゝに起ると、寺後登ること五六町にして山嶺なり、坪地あり千疊敷といふ、風望吉備第一の稱あり、幾十の背蝶眼下に錯落して、海は正に幾多の平湖を作し、遠くは伊豫讃岐の翠巒煙るが如く、絶勝言ふべからず、この地佛閣多く四十八寺と唱ふ、中に千光寺、西國寺、淨土寺を三大伽藍といひ、皆山に據るを以て望觀に富む、尾ノ道より糸崎を經て三原に至る間、風光明媚須臾明石を恥ぢしむ、驛に接して三原城址あり、今公園となる、水に臨んで眺望佳なり、淨城の稱實に其名を得たり、野畑山の半腹なる妙正寺、山海の勝色を一眸に

**三原驛**

あつむ、詩人文儒の寄題詠稿を卷子と爲し寺寶とす、

**本郷驛**

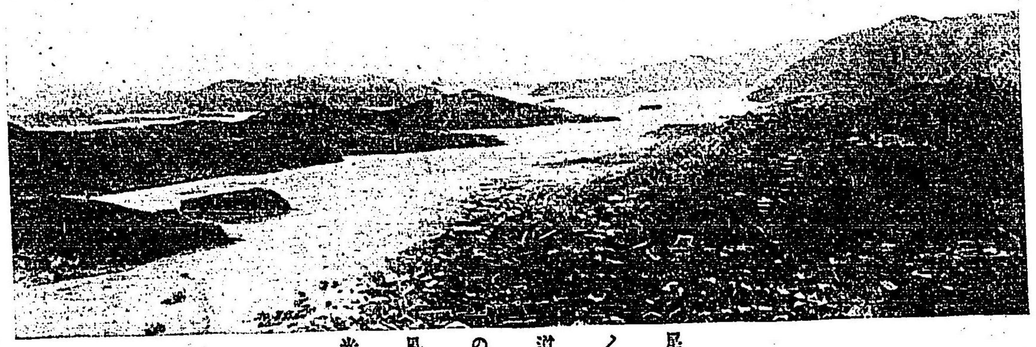
三原より路藝州に入りて、本郷驛の東北一里半佛通寺あり、これ所謂安藝の御幹山なるもの、境内奇巖屹立し老樹枝を交へ、激湍奔流中を貫きて境を二分す、東南を伏龍窟、西北を猛虎岩、川を活龍水と稱す、上流三級の瀑あり、誠に塵外の靈地にして、詩人替て山中三十二勝を選びぬ、

**濱崎驛**

汽車未だ廣島に至らず、海田市より南に折れて矣に至る線あり、濱崎は附近風指の海水浴場にして風光また明媚なり、

**廣島驛**

廣島は中國第一の繁華にして、淺野氏の舊府、城は毛利輝元の創築する處にして尚天主閣を存す、今第五師團の營城たり、征清の役聖上親征駕を廣島に駐め、城中を以て大本營となし、軍國の事を統べ給ふ、我軍大捷武威八表に揚る、此地實に國史の上に不朽の名を得たり、驛を出づれば四北樹木の鬱茂せる一丘陵を望むべし、これ二葉山にして今公園たり、藩祖長政を祀れる鏡塗神社あり、後丘の眺闊頗る開豁なり、縮景園は四十三町、淺野侯の別邸にして泉邸といふ、泉石花木の幽勝を以て世に著はる、謂うて一覽するまた不可なりとせず、備藝の勝景島に至りて其妙を極む、島は廣島灣の西南、佐伯郡の隣岸に沿ひて、東西三十町南北二里半、北偏厳島神社あり、風光秀麗の境を占めたり、其殿閣海に向ひて、江中に基礎を建つ、今其結構を見るに、大宮寶殿其中央にあたり、幣殿拜殿祓殿其前にあり、祓殿の前に高舞臺、其左右に平舞臺あり、樂屋それにつゞいて左右に分れ、門客神社樂屋と並びて左右に立てり、



尾ノ道の風光



**宮島驛**

廊嘴は火燒前といひ、更に海に突出すること七間餘、遙に海中の大華表と相對し、其一端に一大燈籠を設く、寶殿の左右廻廊あり、屈曲百四十八間の長きに亘り、一間毎に鐵燈籠を釣る、潮來れば廣厚波忽ち生じ、百燈長く照映して、光彩陸離美觀名狀すべからず、「波間より見えて數あるともし火も宮居もしるしいつく島山」社頭の明燈實に八景の一とす、有名なる海中の大華表は、火燒前の前方七十間、軟沙の上に立つ、參詣の舟白帆を揚げて潛り入るべし、本殿より左折して廻廊を渡れば客殿

**廊嘴**

滿潮の時は、參詣の舟白帆を揚げて潛り入るべし、本殿より左折して廻廊を渡れば客殿

**島神社**

神社、寶殿幣殿拜殿祓殿並び倡ほる、社殿の後方圓形の一瑞池あり、鏡ヶ池といふ、潮干の時と雖、泉自ら湧きて涸るゝことなし、月夜明鏡の奚、嫦娥姿容を寫す、「殿島いづくはあれど蟹りなき鏡ヶ池の秋の夜の月　正風」また八景の一なり、殿閣の前方、左右の江濱長松落々たり、松に傍うて百八の石燈籠あり、樂鹿逍遙甚人に親しむ、凡そ此神社の制作、江山自然の形勝を利用して、殿閣廊廡の排布を爲す、高きに攀ぢて俯視すべく、舟に泛びて遠望すべく、江山樓閣相掩映して、無限の妙趣を見る、

**廻廊**

御手洗川を渡れば大願寺、海に沿うて更に西すれば大元神社、境内今公園となれり、大元浦の後山二層の寶塔あり、多寶岡と稱す、これ陶晴賢義隆を弑して國を奪ふ、を按ずるに、大内義隆山口城に居り勢甚大なり、其臣陶晴賢義隆を弑して國を奪ふ、義隆死に臨みて、書を毛利元就に遺し、讐を復せむことを以てす、元就乃討賊の勅許を請ひ、城を殿島の要害ケ鼻に築きて敵を誘ふ、晴賢步騎三萬軍船千艘を以て之を攻め、堂岡に陣を取る、元就大に喜び、龍燈海に遊ぶ時は如何ともすることなし、せゝらぎの淺水にあらば自由を失ひても、猛虎の陷に落入りたるごとき陶を打取ること、掌の中にありと、夜風雨に乘じ、精兵三千を以て大に敵の陣營を敗る、晴賢遂に自刄す、成敗の疵具に見るべし、

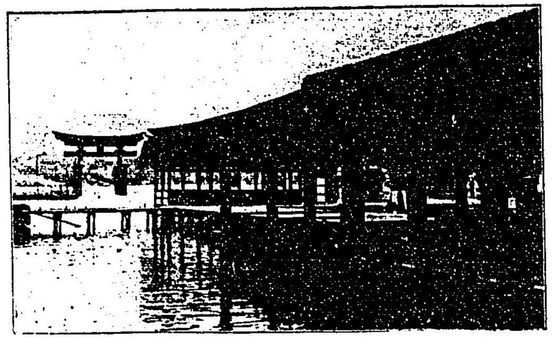
**紅葉谷**

紅葉谷は八景の一、公園なり、小洞幽邃、御手洗川源々として石上に奔れり、岸の兩邊楓樹多く、危橋怪岩景趣佳なり、宮の東岡、豐公第一征韓凱旋の時築造したる、千疊敷及五重塔あり、東北町を隔てゝ瀧ノ尾の高原あり、四行返りの坂を下りて、海邊に出れば長濱神社、眺望佳なり、北端海水浴場の設あり、一岬海に突出するは卽ち要害ケ鼻、

**彌山**

彌山は大宮の後なる靈秀の峯、又御山と呼ぶ、海拔一千三百六十五尺、登路二十八町と傳ふ、山巔頂上石あり、願望すれば前には神殿參差として、青龍の蟠踞せるが如く、後には巨海波高くして、皎月眞如の影を宿せり、白雲頭天にたなびき、松杉蓊鬱として山勢異相也、麓に白糸ノ瀧あり高さ十二丈、瀧ノ宮あり、夏夜螢多く八景の一に數へらる、

この宮の光りそへてやよひ〳〵の
螢も瀧の玉とみだるゝ　光榮



廊

島に七浦あり、各浦に江比須祠あり「安藝の宮島まはれば七里浦は七浦七江比須」島巡りの樂また盲ふべからず、

## 岩國

鐵軌防州に入りて岩國驛、驛より一里にして岩國町あり、錦川迫々として町の西南を過ぎる處錦帶橋を架す、一に算盤橋といふ、本邦架橋工事中、構造の奇巧と堅牢とを以て名あるもの、長百二十五間、最高水面を拔くこと十三間、河中に石を疊んで四箇の橋脚を築き、半月の五小橋を架す、橋下一柱なし、枠を組みて層々相懸らしめ、以て橋を支ふ、延寶元年藩主吉川支信の創設せるものにして、其制能く泰西の建築術に適合すといふ、苔城址は宇槙山にあり、今吉香神社の社地たり、藩祖を祀る、錦川一帶の風光瞬目すべし、

## 神代

岩尾ノ瀧は神代驛より十五町、高さ五十尺、中流巨岩突出し、落水之に激して飛沫雪の如く四散す、瀑下水淺く廣し、以て水浴に適す、山中奇石多し、七曲の嶮を冒して山巔に至れば、住吉神社あり、海面の眺望佳なり、

## 下松

下松より德山に至る間、沿岸の風光愛すべし、殊に魚ケ邊一帶の眺望開豁にして、汀に横はる奇石削岩、妙霊くる處を知らず、

## 櫛ノ關

淺水數町を隔てゝ、笠戸の島山低く波に浮ぶ、宮ノ洲に海水浴場の設あり、

山陽線の霊くる處は即下ノ關、海峽の北岸に居り、水を隔つるの背山はこれ鎮西、門司と相對して中國九州の咽喉を扼し、形勝天與海西の要津なり、市街は麓に沿ひ海に瀕して、約二海里の間に櫛比し、道路狹隘なるを免れざれども、其後山に登れば眼界忽開け、山光水色霊くが如く、山陽線中稀に見るの佳景なり、

日本戰史中最慘なるもの、源平二氏の爭に過ぐるもの蓋少なからむ、「今で知る御裳濯川の流れには波の底にも都ありとは」劫沖の天子、空しく壇ノ浦の藻屑とならせ給ひしより、茲に七百年、山は舊によりて青々の容を變へず、水は古の如く蒼々の色を改めず、赤間宮頭そゞろに懷古の念に耽れば、雙神自ら湧ふを覺えざるべし、宮は驛東二十町、紅石山麓にありて官幣中社なり、御陵は境内に隣し、安德天皇阿彌陀寺陵の九字を刻したる建碑あり、四邊淨地褻者穢を正す、宮の左側紅石山に登る坂口に平家一門の墓あり、兩行相望んで風打雨蝕字體を辨ぜず、撫摩數遍漸く推讀すべし、山に上れば眼界愈濶く、豐山は澹にして染むるが如く、筑山は淡にして眉を曳くに似たり、加ふるに豫州の山脈蜿蜒として遥に霞む、佳瞰なんぞ之に過ぐるものあらむや、況や瀬戸内海濱一路の背松穿波は、漸く此處に霊きんとし、眼下怒濤の天を衝くの奇觀を呈するに於てをや、更に平氏一門の末路の詩的なるを、壇ノ浦に偲び、日清談判の劇的なるを、春帆樓に思ふに於ては、景と情と相交はりて、遊子をして佇立數時去るに忍びざらしめむ、見よ左方漁家蟹莊相竝ぶ處、波悲しげに岸を打つは壇ノ浦、浦に異蟹あり、甲殼人面をなして憤怒の相あり、平家蟹といふ、魚あり形鯛に肖て金鱗、上に白斑あり雪の如し、小平家といふ、俗に傳ふ、平家の亡靈、男は化して蟹となり、女は變じて魚となると、宮の左側に巍々として聳ゆるは、これ日清兩國の使臣折衝の旗亭春帆樓、媾和使李鴻章の旅館に充てし引接寺亦近くにあり、



海峽の四口彦島の一島横りて附近嶮岩多し、島は蓄水の役、平氏の據りて一旦範頼の陸軍を擊退したる處、南方豐との海門を大瀬戸といひ、與治兵衛岩巖柳島あり、北方市の西偏小門との海門を小瀬戸といひ、距離凡五十間一竿を投ずれば或は屆かむとす、潮流最急にして奔馬に似たり、兩岸怪岩屏風を起てたるが如く、小赤壁をなす、小門海水浴場あり、附近の漁夫夏秋の交、夜々小舟に松明を焚き、網を以て魚類を捕ふ、漁火散じては螢火の如く、集つては火團の如し、また一美觀なり、

## 福地山

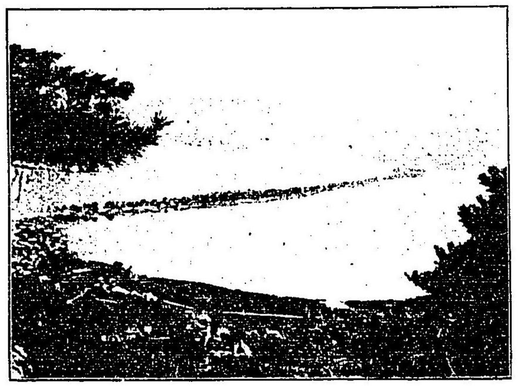
阪鶴の線路山陰に入りて福地山に至る、河守大神宮は驛より三里半、伊勢内外の大神は、遠く神代より此處に鎮座ありしを、雄略の御世遷し奉られしなりと傳ふ、社殿の構造、宮川、五十鈴川、英道橋など皆伊勢に同じ、内宮の左方谿間に天の岩戸の跡あり、岩戸より佛性寺に至る道に、鬼ケ茶屋といふあり、これ頼光が酒呑童子征伐の際宿泊したる處、大江山は更に行くこと三里、山勢巍巍其脈左右に分れ、坂路崎嶇羊腸峻嶮を極む、巔上怪巖嶄立する處に洞穴あり、これ往昔酒呑童子の棲みし處なりと、風雨多年今崩壊して、僅に痕跡を止むるのみ、巔上遠く若州の峯巒を雲煙模糊の間に臨み、近く與謝の村落を指點し、風光掬すべきものあり、

## 舞鶴

汽車已に舞鶴に至る、日本海第一要害の地、今軍港となれり、町の東邊田邊城址あり、これ慶長の役細川幽齋の籠城せし處、勅旨幾度か降りて、敷島の道の爲に、幽齋の命を全うせしめられたるは、風流の誇りとして傳へらるゝ美事なり、「古も今もかはらぬ世の中に心のたねを殘す言の葉　幽齋」心種園内紀念碑あり、永く其芳を傳ふ、

萬松一路海に浮ぶこと凡二十八町、上下概れ枝柯を齊しうして、一字を碧水の上に描き、遠く之を望めば、長洲海波に映じて、水中松あるが如く、碧水天と連りて、天上亦橋あるに似たるもの、これ丹後の天ノ橋立の風光にあらずや、

橋立は宮津の北一里餘、與謝海の西側なる門洲狀の沙嘴なり、舞鶴より宮津へは定期汽船の便あり、舞鶴灣内の風光に浴しつゝ、左顧右眄日本海に出でむとして又與謝内海に入る、此間唯僅に二時間を要するのみなるを以て、却て汽船駛走の速きを恨むの感あり、船の與謝内海に入るや、忽ち前面碧松一帶蓊蔚亞の如く、細く長く海面に浮べるを見む、これ松島、嚴島と共に、皇



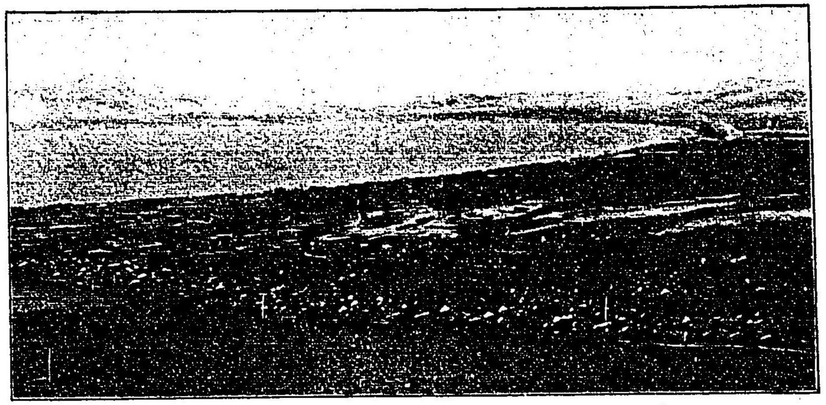
天ノ橋立

國の三勝と稱せらるゝ天ノ橋立なり、まことにこの松の林よ、幾千年の古より、風に吹かれ波に囓まれながら、更に枯淵の色なく、常磐の綠いよいよ濃にして、疎々たる碧波に影を寫せる風情、何を以てかたとへむ、「浪立てる松の下枝を蜘手にかすみ渡れる天の橋立」「俊賴」晴夜陰晴、春霞冬雪、皆この景を粧ひ、二十四節悉く其美を異にす、長洲の盡くる處鷺立明神あり、社殿清洒たり、祠四の礎清水、海潮に近接すれども鹹味を交へず、甘泉といふべし、

若しそれ橋立の景を眺望せむには梅峠あり、成相山あり、栃峠よりは横一文字に、成相山よりは斜に縱一文字に見るを得べし、籠神社に詣でゝ、社後の成相山に登れば、中腹成合寺あり、與謝の江山全景を萃むる處なり、人は言ふ松島の景は富山にあり、橋立の景は成相山にありと、褒路の傍松の陰より眺望するを最とす、試にこの美景に背いて、立ちながら身を屈めて股間より窺へ、一里の松翠波光に映じて、與謝の入江を劃する處、水中天あり天上水あり、上なるが海か下なるが天か、天ノ橋立股眼鏡は、實に天下無雙の奇觀なりといふべし、寺の奥に慈眼堂あり、其側に五六丈の瀑布懸れり、幽谷寂寞として塵外の靈境、

誰かためにうちに世をふる天の橋立　能宣

出雲は古王者の地、御埼山の麓、大社殿として神威赫灼たり、宍道湖其東にありて煙波洗洋周廻十三里、湖を廻りて形勝の地多し、唯地北に偏して交通の便に缺くる處あるを以て、人の多く此雲山碧水に遊ぶことなきは遺憾なり、播但線によりて城ノ崎溫泉に浴したる人は、海岸を傳うて鳥取に出でて股間より窺へ、一里の松翠波光に映じて、與謝の入江を劃する處、水中天あり天上水あり、上なるが海か下なるが天か、天ノ橋立股眼鏡は、實に天下無雙の奇觀なりといふべし、寺の奥に慈眼堂あり、其側に五六丈の瀑布懸れり、幽谷寂寞として塵外の靈境、



夜見ヶ濱

誰かためにうちに世をふる天の橋立　能宣

出雲は古王者の地、御埼山の麓、大社殿として神威赫灼たり、宍道湖其東にありて煙波洗洋周廻十三里、湖を廻りて形勝の地多し、唯地北に偏して交通の便に缺くる處あるを以て、人の多く此雲山碧水に遊ぶことなきは遺憾なり、播但線によりて城ノ崎溫泉に浴したる人は、海岸を傳うて鳥取に出でて股間より窺へ、一里の松翠波光に映じて、與謝の入江を劃する處、水中天あり天上水あり、上なるが海か下なるが天か、天ノ橋立股眼鏡は、實に天下無雙の奇觀なりといふべし、寺の奥に慈眼堂あり、其側に五六丈の瀑布懸れり、幽谷寂寞として塵外の靈境、



**境驛**　至り、それより汽車の便によるべし、阪鶴線によりて天ノ橋立に遊びたらむ人は、更に舞鶴より汽船にて伯耆の境港に至るべし、別に中國線津山より米子に出づる途あり、

境は山陰四線の起點地、汽車は南して米子に至り、西は松江東は鳥取に通ず、地は夜見ヶ濱の北端、島根半島其前面を繞りて、一帶の海峽を形成し、東は渺々たる大海に臨み、西は中海を介して宍道湖に通じ、舟行僅に三時間にして松江に至るべし、境より米子に至る長汀曲浦は、即夜見ヶ濱、美保灣と中海の間を、隔離する一條の堆洲にして、長五里洲一里に滿たず、沙濱一大弓

**米子驛**　**安來驛**　**松江驛**

狀をなすが故に、また弓ヶ濱の稱あり、一帶の蒼松雲の如く連り風光優美、詩人之を大天橋と呼ぶ、天ノ橋立に比して其景致更に雄大なるを以てなり、この絕景を眺望せむには、いはゆる伯耆富士の名ある大山の中腹、及、境の對岸鷹尾山を可なりとす、

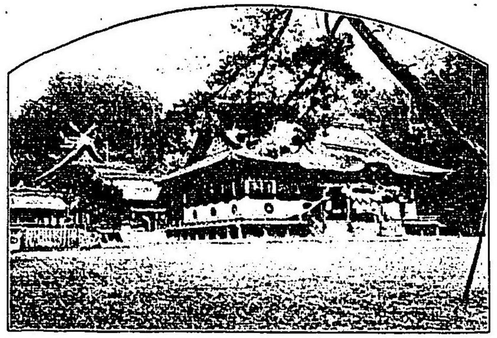
米子は池田侯の支地、城址尚壘壁を存す、島狀の一丘深浦に臨んで、山海の眺望太だ佳、北に隣りて米子公園あり、安養寺は驛より約一里、後醍醐帝女瓊子內親王の開基、境內御墓あり、金枝玉葉の尊體、かゝる邊陬に命を終へたまふ、元弘の昔なんぞ人を泣かしむること多きや、

米子驛より四安來驛の南一里半、清水寺あり、推古朝の草創、金堂は大同元年修造の儘なりと傳へ、雲州第一の古伽藍たり、境內閑雅幽邃また捨つべからざるの勝地、

松江は松平氏の城市、直に宍道湖に臨む、千鳥城五層の天守閣依然として中空に聳ゆ、今城山公園となる、松江神社あり藩祖を祭る、宍道湖は東西四里南北一里半、東馬潟瀬戸を經て中海に決す、碧雲湖の稱あり、周廻十三里の鏡面、伯耆富士常に其麗姿を粧ふ、東岸一小島あり嫁ヶ島といふ、全島皆岩、古松之を蔽うて水面に一字形を畫く、月明の夜遊舟の至るもの多し、湖上赤壁十六尖などいふ奇勝あり、一步に一景十步に十景、花槃々柳惣々、鳥闕々魚潑々、戶重々樓亭々、船搖々人來々、無盤の詩にも有聲の繪にも、寫しがたきは此風光なり、松江を本邦十二景の一に數ふる、要するに此湖の勝景によるなり、湖中に產する魚、鯉、最佳、巨口細鱗にして四腮あり、支那松江に產するものゝ如し、松江市の名產之に基因す、

松江より汽船に搭り、湖上十一浬にして庄原に達し、更に人車を傭うて、約五里を走れば杵築町なり、これ出雲大社杵築宮鎭座の地にして、宮は古日本の王者大國主命を祀る、創建遠く神代にあり、天照大神の勅を奉じて諸神之を經營す、いはゆる三十二丈造りと稱するものこれ、延仁の時本社を皇宮の如く改造して、十六丈の宮制といふ、天仁三年巨木百本、杵築の浦に漂寄す、武內宿禰造營を掌り社殿を新築す、寄木の御造營といふ、今の社殿は明治七年の造營に係る、

杵築の町を過ぎ、大華表より阪路を下れば、橋あり祓橋といふ、褒路の左右古松長く連る、更に碧銅の大華表を過ぐれば、即ち社境、拜殿あり構造壯麗を極む、殿の後八脚門あり左右に廻廊を廻らす、更に進めば楼門あり、これ天ノ日隅宮にして、燒らすに珠籬を以てし、廟宇高潔神威殿如たり、別に境內五社境外九社あり、社境三方丘陵を以て圍まれ、後丘を八雲山といひ、鵜山亀山其



出雲大社

左右に列なり、長松空を蔽うて俗塵を遮り、幽禽雲に啼いて靜なること太古の如し、

粁築の海濱は卽ち伊那佐濱、武雷神と經津主神とが、大國主に迫りて國譲の諾否を問ひ給ひし舊蹟なり、鯨岩あり形狀恰も鯨の如し、一帶の沙汀彎曲して三里濱の稱あり、船を儲うて更に日御碕神社に發する亦可ならずや、

この國は命のまゝにまつらむと
事避りましゝ神代しおもほゆ

**熊黨驛**

米子より東すれば熊黨驛、大山登山の人は茲に下車すべし、山は山陰第一の名山、伯耆富士又出雲富士の名あり、山勢雄偉一望人を動かすの概あり、海拔五千六百尺、山中大神山神社あり、大山寺あり、構造の大裝飾の美共に見るべし、眼を放てば因伯雲三州の海山手に把るが如く、名にし負ふ弓ヶ濱は、曲浦遠く連りて、波の打寄すると見ゆる一線白く曳きて、宛然布を晒せるが如く、美保ノ關を見越して、やがては八重の潮路、空も一つに際みなきが中に、隱岐の小島恰も浮べるが如く、漁船幾片丿〳〵の影白う、蝶の飛ぶかとも見ゆる風情など、うたゝ筆の幼きを嘆ぜしむ、

「忘れめやよるべも波のあら磯をみ船の上にとめし心は　後醍醐御製」

元弘三年帝隱岐判官の毒手を遁れ、伯耆の大坂の港に著き給ふ、名和長年出で迎へて、船上山に奉じて義旗を上げ、遂に正成の金剛山と相應す、建武中興同天の偉業實にこの擧に定る、陛下宸筆を賜ひて、其忠を御感あらせたまふ、御來屋驛の海濱、元弘帝御著船紀念碑あり、「水濱に向て往事を問はむと欲すれば一海の寒月茅軒に落つ」感慨窮りなかるべし、名和神社は卽ち長年以下の英魂を祀れる別格官幣社、社頭に立つて日本海を望めば、帝が榮塵の苦忠を嘗めさせられたる隱岐の小島は、杳然として煙波の間に横はり、公が勤王の義旗を飜したる船上山は、蟠然として雲霧の上に聳立す、俯仰感古誰か涙に咽ばざるものあらむや、驛より約十四町なり、

**御來屋驛**

**倉吉驛**

倉吉驛より三里半、三徳山三佛寺あり、岩洞の奇寺閣の勝伯州第一の名刹なり、奥ノ院の一閣を投入堂と稱す、方二間石壁削立の上、大巖窟の中に建つ、之を望めば投入したるもの〻如し、これ役の行者が窟外に於て組立て、屋成りて投入せしものなりといふ、爾來星霜一千二百年、基礎儼然として舊觀を改めず、

**倉吉驛**

**鳥取驛**

鳥取は山陰西線の盡くる處、興禪寺内に渡邊數馬、玄忠寺内に荒木又右衛門の墓あり、伊賀越の復讐を偲ぶもの、須らく此の墓に詣づべし、驛より一里武内宿禰を祀れる宇倍神社あり、風光清絶、社殿の結構又壯麗なり、今五圓紙幣の表面に刻せるもの實に本社の景とす、祠後の山は卽稲葉山「たち別れいな葉の山の峯におふるまつとし聞かば今かへり來む」在原行平の詠によりて、早く世に知られぬ、短草萋々として眺望太だ秀麗なり、

# 南海の風光

岡山より連絡汽船によりて高松に向ふ、瀬戸内海の眺望、人をして船室に委如たる能はざらしむ、近緣の山は逶りて名殘を惜み、



遙青の山は迎へて笑ふ、大嶼は坐するが如く、小嶼は浮ぶに似たり、白帆を孕ませて走る舟あれば、汽笛を吹いて霞む船あり、炊煙こなたの岸にあがり、漁歌かなたの波に起る、船の向ふ處、眸の及ぶ處、都て詩趣ならざるなく、壯觀ならざるなし、身は恰も一大畫圖の中を行くが如し、船小豆島の土庄に寄港す、遊子若し一日の閑を有せむには寒霞溪の奇勝を探るべし、岩を削りて作りなしたる石磴を登り行けば、溪流眼下に激し、白雲山巓に舞ひ、瀬戸内の海夢の如く島影を浮べ、豫海讃山の美皆瞬目の中にあり、一歩に一景十歩に十景、百歩にして景百變す、洞門、怪岩、瀑布、渓流、之に加ふるに水天髣髴の眺望を以てす、何れの地かよく之に勝るものぞ、豐の耶馬溪は夙く山陽の妙文によりて、天下に紹介せられたりと雖、この神斧鬼鑿の風色は世上説くもの稀なり、自然の景亦幸不幸あるか、近時成島柳北によりて、稍其名を知らるゝに至れるは、山神の喜ぶ處ならむ、土庄より四里にして至るを得べし、

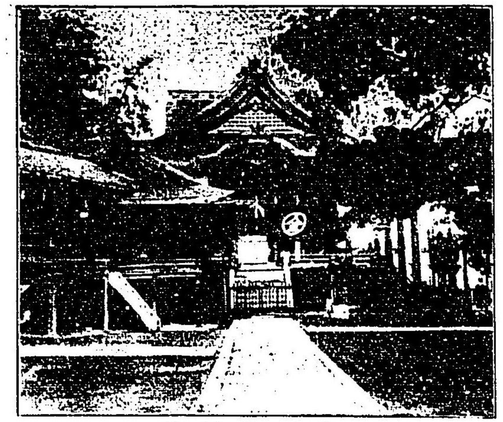
**高松驛**

高松は四國の大津頭、海に臨みて玉藻城址あり、樓閣壘壁尚遺存す、栗林公園は元松平氏の遊息所、紫雲山其背後に聳えて林叢四方を繞る、一樹の奇ならざるなく、一石の珍ならざるなし、一路窮る處また忽に開け、歩々其觀を改む、亭榭あり、坐して紫雲山の風翠を把ふべく、俯して小西湖の洗壁を掬すべし、驛より十町の近さにあり、

高松より一里半古高松あり、村の北一條の干潟を隔つる海島は卽ち屋島、島形菱實狀をなし、長徑五十町許、山島屋宇の狀ありこれ其名ある所以、屋島浦は東岸にして牟禮、庵治と相對ひ海灣を抱有す、壽永二年平宗盛幼帝を奉じて海に泛び此地に到る、阿波の豪族田口成能來附し、四國を徇へて行宮を建つ、翌年山陽既に定まるを以て、帝を福原に移し奉る、二月福原軍敗れ、復帝を奉じて屋島に還る、元暦二年二月源義經襲ひ至り、火を行宮に縱つ、平軍盡く舟に上りて西走赤間關に赴く、濤聲瀾語古を悲しむに似たり、屋島寺は屋島浦の山上に在り、殿堂宏麗長松落々として之を護る、什寶多く源平合戰の古器を傳ふ、寺の西一町獅子靈岩あり、巨巖懸崖の上に突起して獅子咆哮の狀を爲す、風光賞觀の位置茲處を以て全島第一とす、山陽の遠翠、南海の近碧、内海の青螺、天然の大畫幅眼前に横披せらる、那須與市の祈石、佐藤繼信の碑、七百年の史事親しく讀むことを得、

**鴨川驛**

汽車高松を發して鬼無、端岡、國分を經て鴨川に至る、白峯の御陵に詣で〻保元の古に泣かむと欲する人は、茲に下車すべし、驛より一里半なり、陵前今白峯神社あり帝を祭る、「命あれば堂が軒端の月も見つ知られぬ人の行すゑの空」萬乘の聲詠、かゝる悲調あり、涙なくして誰か吟じ得るものあらむや、「よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせ



金刀比羅宮

む」四行の古も思ひ出でられて、低徊去るに忍びず、白峯寺あり、内海の水一碧鏡の如く、鵜飼の諸島點々碁石を散せるが如く、瞰瞰頗佳なり、

丸龜を經て多度津に至る、鐵道はこれより南して琴平に通ず、尾ノ道との間に連絡汽船あり、高松より來りて琴平に詣でたらむ人は、此處より尾ノ道に出づべし、尾ノ道より來りて琴平に詣でたらむ人は、高松に至りて岡山に出づべし、

多度津より金藏寺を經れば善通寺、此地弘法大師の誕生所にして、其遺址を傳ふるが爲め寺塔盛なり、寺門を入れば、右に五層塔、堂行塔、左に積善功德塔、正面に金堂あり、更に左折して二王門を入れば、影堂あり、護摩堂、客殿、庫裡之に附す、堀川天皇の綸旨にいふ「善通寺は三國相承の燈を我等に挑げ、五智瀉瓶の水此處に灌ふ、一天の下誰人か其寶雨に濕はざらむ、四海の內執の塵か其智水に浴せざらむ」と、

汽車琴平に至りて停まる、象頭山の半腹金刀比羅宮あり、社は大巳貴命を祀り、崇德天皇を配祀す、近世海內無比の靈祠と稱し、群俗の崇敬極めて厚く、賽人の多きこと伊勢大廟に亞ぐといふ、報賽祈願の男女四時市中に塡充せる中に、赤銅色の顏逞しく、髮を大髻に結びたる船乘の行き交ふもの、特に目に新らしく、繪馬堂の中、風波難船の額多きを占むるは、此神の海神と仰がるゝが爲なり、船の海路に迷ふ時、此神を念じて著岸を祈れば、暗夜必ず一團の火現はれて導くとかや、蓋此地內海往來の要津にあたる、驟飽七島は其民最操舟を善くし、遠國近海航行至らざるなし、此神此形勝の地に居り、此航走の民を得、其盛大を致せる亦偶然にあらず、麓より祠前に至る迄九町、華表、燈籠、鼓樓等道を挾む、賽路の入口に輪橋あり、鼓樓の傍に清少納言の墳あり、數千級の長磴上り盡せば、神殿、拜殿、繪馬殿、參籠所、社務所等、皆近時の更築にして壯麗眼を驚かす、拜殿珠垣の邊より北望すれば、近く讃岐富士、八栗、玉藻の山を看、背螺幾點烟波十里の風光あり、

遺棲は四國第一の鑛泉、多度津より汽船にて高濱に至れば、汽車四十分にして遊子を溫泉に導くべし、高濱よりは山陽線宇品へ毎日三回の連絡船あり、

道後の發見は遠く神代にあり、海內の溫泉中その最古に聞ゆるもの、此湯の右に出づるものなし、加之歌行、仲哀、齊明、天智、天武、舒明、諸帝の行幸を奈うせしこと何等の光榮なるぞ、凡四國の鑛泉十餘、多く冷泉に屬し、溫泉極めて乏し、獨り此地の熱泉を湧出すること、誠に天造地設の奇と言ふべし、「伊豫のゆの湯桁はいくつ數しらずかぞへすよまず君ぞ知らむ」昔時は湯諸處に湧き出で、其所々に湯桁を架して浴びたりと見ゆ、源氏空蟬の卷に「いで〳〵およびを屈めて、十はた三十よそなど數ふるさま、伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見ゆ」などあり、今は浴場六區其一二三の湯は共に一屋の中にあり、四五の湯を養生湯と稱し、亦一屋に構へ病者多く之に浴す、新湯は近年の創設にして最華麗を極む、聖德太子建つる處の溫泉碑は、後世埋却すと雖、其文は載せて釋日本紀にあり、伊佐爾波神社、湯築城址、寶嚴寺、石手寺等浴閑杖を曳くの地亦多し、

讃豫の勝說き終りて尙阿州の風光殘せり、德島は卽ち其獄に入るの關門、大阪、神戸若くは和歌山より船して至るべし、市の中央に山あり、高さ十二仞、深樹鬱蒼として吉野川を帶にし海口に隣す、山勢孤圓之を望めば猪の伏するが如し、渭山の稱あり、





これ蜂須賀侯の舊治城のある處、今公園たり、紀の峯呼べば應ふべく、淡の海俯せば掬すべし、四望一盡瞬刻まりなし、城山の西南瀧の山に持明院あり、前は海上を望んで三面空濶、方十餘里の間瞭然指すべし、巖巒爭出して、石磴溪に沿うて登る處湯あり、塔閣其上に聳え、藥師堂菅公廟左右に對起す、勝景市內第一たり、

南海の勝鳴門の壯觀を以て其極とす、この壯觀を目睹せむには淡路の鳴門崎、大毛島の孫崎に至るべし、德島より北四里巡行船の便あり、

玄海洋の蒼龍、馬關海峽より入りて瀨戸內海に浮游し、淡路島と阿波との間の澁門を通りて、南海に出でむとする處、恰も南海の猛虎のまた瀨戸內海に進入し來れるに會し、龍虎相邀へて茲に一大奮鬪を起し、海面未曾有の大盤渦を作る、鳴門の壯觀にかくして人をして魂飛神驚、萬髮倒に立たしむるの光景を呈するなり、

蓋し本邦潮流運力の最强、鳴門の右に出づるものなし、大潮の際一時間七海里乃至八海里半、而も風候に因りては十海里以上十一海里に達することあり、淡路の鳴門崎と大毛島の孫崎との間、相距ること十五町、石灘あり中間に橫はる、中瀨と稱す、長さ二町二十四間幅十間、や〳〵形體を露はせり、島あり西なるを裸島といひ、東なるを飛島といふ、潮流大速力を以て之を通過する時、中瀨に碍へられて、激して渦を飛ばし渦を卷きて狂奔す、其の音數里外に響き、千輪の雷車を一時に物するが如し、

見よ南海の猛虎、徐々として來りて岩礁に激する時、其高さこと一丈許、內海の蒼龍これを海峽の窄き處に迎へ擊ち、相持し相鬪ひ怒號叱叫相逐馳す、龍門千尺の瀑布逆天に流れて、銀涘に落ち合ふかと疑はれ、灘谷の巴左右に流れて、淵穴の深さ金輪も見ゆるかと怪しまる、龍虎相擊ちて倒るゝ時、大小數十百の盤渦を作る、大なるもの直徑一町に至り、小なるも十數間に下らず、呀然として相呑吐し、分れては合ひ合ひてはわかれ、奔流數里長鯨百川を吸ふが如し、滿潮の時は南海より來り、干潮の時は內海より來る、陰曆月初滿潮の時最觀るべし、海潮盈虛せざる時は、海士釣を垂れ蜑女貝を拾ふ、往來の船帆を揭げて渡るさま、翩々として蝶の落花を追ふが如し、靜觀動觀收めてこの海峽にあり、

鳴戸より出で〳〵や來つるみつしほの
ひるまばかりも見れば戀しき

德島より汽車は吉野川の谿谷に沿うてのぼる、府中驛附近常樂寺、國府寺、觀音寺、井戸寺あり、鴨島驛附近藤井寺、熊谷寺あり、西麻植驛附近切幡寺あり、皆いはゆる四國遍路の賽寺、

汽車船戸に至りて盡く、此地阿州北部の咽喉、吉野川の淸流に臨みて風光掬すべきものあり、鮎漁の樂あり、

阿州の勝、鳴門と并稱すべきもの、祖谷の蔓橋の奇なり、祖谷は吉野川の一支、松尾川の山谷にして、鉞山の西北麓にあたれり、鉞山海を拔んずること七千四百尺、其嶺長く六派の山脈を曳いて六溪流あり、分れて六方に走る、溪の大にして奇絕なるものは卽ち松尾川、溪を隔てゝ東西祖谷村あり、溪澗左右絕壁を爲し、橋梁を架すべからず、蔓を編みて釣橋を設くるもの都て十三橋、善德橋最著名なり、長さ三十三間、之を望めば雲棧の中宵を渡るが如く、直下十八丈水石激怒せる上に懸る、渡りて中頃

に至れば橋搖々として輕く颺り、身は次第に天上に登るに似たり、住民は平國盛の遺裔なりと傳へ赤旗二旒を藏す、僻遠なる深山、外界の文化に感化の絲なきこと茲に七百年、言語風俗中世の遺風を留む、

## 多摩乃里

日野驛　立川驛　淺川驛

愛すべきは多摩の里の風致なり、連亙せる多摩の横山其襟をなし、多摩川淺川の二水其帶をなし、山光水色相待ちて、所謂武藏野西隅の景を新にす、

多摩川は古歌に名高き六玉川の一、源を雲取山の奥に發し、湛へては靜淨となり、激しては奔流となり、峽谷を流るゝこと凡十五里、青梅に至りて漸く山を離る、羽村の堰は東京上水道の口源として人の能く知る處、鮎を名物とす、「かゞり火の影にぞしるき多摩川の鮎ふす瀨にはひかり添ひつゝ　夫木」清流竿に親しむ興限りなからむ、日野、立川兩驛附近を好漁場とす、

立川より青梅線に乘り換へ、日向和田驛に下車して、多摩の鎭山御嶽に登る、山は標高八百六十米突、山頂御嶽神社あり、古杉老檜蒼鬱として夏尙寒し、奇石怪岩夥しきが中に鸚鵡石はことに珍らし、深谿に枕して特峙數百仞、呼べば應ふること木靈の如し、寶ノ瀧は一流七級三十丈に餘れり、七代ノ瀧と言ふ、湯邊岩石羅列最寂寥の境、

多摩川の上流、歩一歩水石の益奇なるを見る、丹波川と日原川と合する處、氷川の里なり、小河內溫泉は丹波川の峽谷中にあり、日本武尊東征の歸途、浴して金創を療したまひぬと傳ふ、鐘乳洞は日原にあり、氷川の奥三里、行路狹隘にして嶮崖に傍ひ、歩行頗る難し、洞中暗黑にして咫尺を辨ぜず、火を執て中に入れば、石佛あり、鐘乳石あり、瓏玲瓏晶の狀をなす、洞中數岐あり、誤て途を失へば或は出づべからず、探險必ず先達の導を待つべし、

八王子の西方直立二百丈の斷崖あり、高尾山といふ、所謂多摩の横山の一なり、淺川の驛より一里、山麓高尾橋に至れば、松杉天に朝して、已に深山の趣あり、藥王院は行基の開基に係り、飯縄權現は俊源の勸請する處、堂宇宏壯、金壁燦爛たり、西岡見



晴臺は四顧十二州に及び、芙蓉堂上に開き、相海眸中に落つ、山中蛇瀧琵琶瀧の勝あり、夏期浴して病を療する人多し、武田、北條の古戰場として知られたる小佛峠へは、此山の裏道より一里に足らず、

## 峠中の路

猿橋驛　大月驛　笹子驛　初鹿野驛　日下部驛

馬入の水上　桂川の清流、遠く群山の翠を截せ來つて、猿橋町を中斷する處、兩岸欲立すること數百尺、水石相衝つて玉屑を吐く、一橋飛ぶが如く其上に懸る、長さ十七間、これ周防の錦帶橋、木曾の棧橋と共に日本三奇橋の稱ある猿橋にして、驛より九町、峽中山水の勝實に之に始まる、大月は吉田口より富士に登山する人の下車すべき處、驛は桂川を隔てゝ岩殿山と相對す、山は叛臣小山田の城址、天正年間勝頼信長と韮崎に戰ひ、敗れて此城に入らむとす、備中之を笹子の嶮に扼して、遂に天目山下の悲劇となる、小山田亦信長に誅せられて家亡びぬ、巖頭の松聲今尙其古を悲しむ、笹子峠は甲州街道第一の嶮路、海拔三千四百六十九尺、驛より頂上まで一里餘氣宇濶大なり、中腹矢立の杉あり、勝頼朝富士卷狩の時、弓箭を射込みし跡なりといふ、周廻四丈餘の大木なり、鐵軌此峠を横貫す、隧道の長さ一萬五千三百六十四呎、七箇年の星霜を經て漸く工を竣ふ、本邦鐵道創設以來第一の難工事として、東洋第一の長隧道として、普く世に知らる、

もの〻ふの手向の征箭もあとふりて
神さび立てる杉のひと本

天目山は初鹿野驛より二里、海拔三千五百尺、山は武田氏滅亡の地、古杉風に鳴りて當年の哀に泣く、首洗池あり、池水常に淡朱の色を帶ぶ、勝頼の怨猶いまだ乾かざるか、中腹に栖雲寺あり、鐘樓を對岳閣と稱して富士の眺望佳なり、山麓の景德院は則ち勝頼の居腹したる處、天正十年三月十一日勝頼已に敗れ、織田の軍金鼓雷擊湖來す、土屋惣藏單身留闕峽に敵を防ぎて、主君の自害を全うせしむ、一族主從五十餘人の塔を拜して當年を偲べば、香烟風に迷ひて涙自ら下るを覺ゆ、

笛吹川は源を國師ヶ嶽に發し、流程十四里、市川に至り釜無川と會ひ、大幹となりて富士川の名あり、沿岸勝地多く、又探涼の足を誘ふに足るべし、差出ノ磯は其最なるものにして、日下部驛より十五町、一丘河心に入りて欹ち老松鬱蒸、遠く望めば巨鼇の佃釣するに似たり、夕靄甲橋上に立つて、慧

差出の磯

御嶽昇仙橋

峽中山水の勝は御嶽の絶景を以て其極とす、甲府より參拜するものは、荒川の峽谷より入る、山路四里にして近し、釉磨、髭磨、猿岩の奇勝を過ぎ、轆轤瀑、石動瀑、奥山拾得巖、駕籠岩等を望み、鉾を昇仙橋上に駐めて、右に鶯圓峯の崔嵬を仰ぎ、左に雨避巖の峨々たるを觀れば、身は已に仙境に立つの思あり、これより巖足を繞り碧水に沿うて行くに、一路苔蒸れたるが如く、鶯圓峯時に左し時に右す、路の迂餘宛轉するを知らず、峯の遷轉して定まらざるを疑ふ、洞門あり、青苔紫草石上に繁絡して、千年の匂あり、門を入れば山水益奇絶、應接に遑あらず、猪狩の里を過ぎて金櫻神社に詣る、社は雄峰の御宇の創建にして日本武尊を祀る、樓門、神廟、金碧煌燿たり、大華表の前群山缺くる處、富嶽の靈姿を仰ぐ、望岳第一の稱あり、社前名物の蕎麥あり、屯雲鼓腕英氣を發ひ、更に五里の途を辿ぢて金峯山の本宮に發する、又快心の遊ならずとせむや、

身延山久遠寺は日蓮宗の祖山、甲府の南九里、賽客は先づ鰍澤に至り、舟を傭うて富士川を下り、波木井より上陸するを捷路とす、堂塔伽藍の結構は言はずもがな、千巖秀を競ひ、萬壑奇を恣にし、法鼓山に應へ、讀經水に響き、目に觸るゝもの、耳に聞くもの、皆一切成佛安樂國の觀あり、本堂より一里半、絶頂奥ノ院に至れば、駿遠豆房總の山々、歴々として眼界に連り、風光濶大なり、思親閣あり、日蓮遁に房州を望みて、父母の墳墓を拜したる處、

せめて世を脱れし甲斐の身延山
すむらむ月をたづれてや見む　元政

富士川下りまた逸すべからざる夏期の壯遊、相傳ふ慶長十二年、角倉了以命を奉じて、船制を定め瀬灘を浚ひ、此川始めて舟楫の利ありと、釜無笛吹會流の下一里半鰍澤あり、即舟筏の繫泊地にして、甲府より四里餘馬車の便あり、小舟一度岸を離れて中流に泛べば、奔湍船を飜弄して走ること矢の如く、兩岸の山樵須臾にして百變す、大巖迎へて粉碎せむとし、急水雪を吐いて推倒す、舟子一條の竹竿を操り、石を回り水に隨ひて一髮の機を制し、思はず拍手快哉を叫ばしむ、鰍澤より岩淵まで流程十八





里、僅に八時間を要するのみ、誠に壯快なる船路なり、

甲府より龍王に至り初めて釜無川を見る、川は駒ヶ嶽の西陰に發し、八ヶ嶽裾野を過ぐ、一岸斷崖自然に成り、堤防を要せず、恰も屏障を樹て列れたるが如きもの七里、七里岩の名あり、天正九年勝頼此岩上に新府を築いて移居す、翌年三月織田の侵入に遭ひ、支ふる能はずして遂に亡ぶ、韮崎驛のあたり車窓うたゝ感深からむ、

駒ヶ嶽は日野春驛より山麓まで二里、途に白須松原あり、御料林なり、釜無の沿崖に纏いて一里餘、直幹雲を拂へり、白沙清麗海濱の光景に似たり、嶽は海拔九千九百尺、登路富士よりも嶮惡なりといふ、頂上神祠あり、夏日參拜する人多し、八ヶ嶽は甲信二州に跨り、峯巒岩峻として八葉に分る、赤嶽を最高頂とす、靈秀高く雲表に見はる、山麓小荒間に武田村上の古戰場あり、小淵澤驛より山麓まで一里十町、

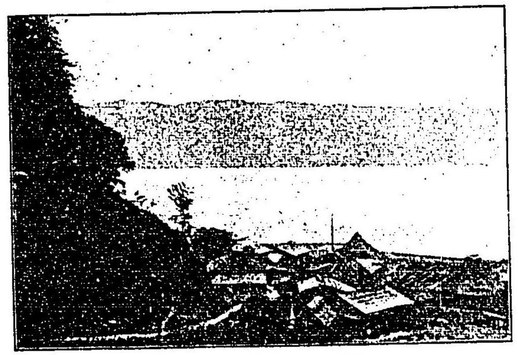
## 信濃

撫子にあはれ心のかゝりけむ
むかしおぼえて袖ぞ露けき

韮崎驛より汽車は次第に爪先上りとなり、日野春、小淵澤を經て信濃に入る、富士見高原を其最高頂とす、海拔三千二百尺、盛暑倚衣の薄きを感ず、原頭に立て四顧すれば、北方八ヶ嶽の巍々として天を突くあり、南方駒ヶ嶽の聳ゆるあり、東南遥に富士の秀麗を望むべし、首を回せば御嶽、乘鞍嶽、槍嶽、大菲蕃山等、所謂日本アルプス山系、巍蜒として西北方に雄を爭ひ、展望自ら氣宇の大なるを覺ゆ、原の高背を分水嶺と言ひ、金澤川西に流れて諏訪湖に入り、落合川東に流れて釜無川に合す、此地一帶欹枕に名高き古の穗屋野、聖上御巡幸の際、輦を駐めて富士を觀賞せられし處、千曲渡邊千秋氏、分水韮を營みて碑を立つ、

俯仰乾坤、　維新鴻圖、　高於富嶽、　深於鶯湖、

諏訪湖は一に鶯湖の稱あり、周圍五里に近く、海拔二千六百四十尺の高地にある名高き湖、山村水廊之を匝りて韮の如し、富士見分水嶺、八ヶ嶽の裾野、鶯ヶ峯鉢伏山などより出づる溪流、皆此湖に注ぎ、溢れて四方山嶽の間を破り、拉に東海の大河天龍川の源をなす、四周の翠巒倒に水面に映じ、雲表遥に富士



諏訪湖

の晴雪を見る「すはの海衣が崎に來て見れば富士のうへこぐあまの釣舟」なるものこれ、小舟を泛べて網を投じ、觀楓橋畔の旗亭に上り、澄測たる獲物を酒肴に一酌を傾くれば、清風一陣醉面を吹いて、夏の樂こゝにあり、湖畔鑛泉湧出す、上諏訪、下諏訪の旅館料理店、皆清らかなる浴室あり、諏訪神社は信濃無雙の名神、社殿壯麗なり、凡そ立春より立秋まで上諏訪に奉祀し、立秋より立春まで下諏訪に移す、春ノ宮、秋ノ宮の稱あり、

**鹽尻驛**

木曽路の勝を探らむとする人は、鹽尻驛に下車すべし、これより中央西線坂下驛に至る凡二十三里、道多く木曽川に沿ふ、「都人來ても見よかし麻ごろも夏は住みよき木曽の山里」歩行尚汗を知らず、德音寺ノ晩鐘、駒ヶ嶽ノ夕照、御嶽ノ暮雪、棧橋ノ朝霞、曙覺ノ夜雨、風越ノ晴嵐、小野ノ瀑布、與川ノ秋月、これを木曽路の八景と言ひ、中に曙覺ノ床の勝を最とす、臨川寺畔兩頭の翠巒雙々出で、九曲の奏水杳々として來りて蒼潭となる、藍青寂寞須臾にして岩と相擊ち、千渦萬渦滾々として相逐りて流る、潭邊奇石怪巖重疊起伏して、奇勝筆の及ばざるを恨む、

**松本驛**

鹽尻より桔梗ヶ原を過ぎて松本に至る、「もの〳〵ふの草むすかはれ年ふりて秋風寒しきちかうが原」原は武田小笠原の古戰場、今多く開墾せられたれど、車窓尚古を偲ぶべし、松本城は松本市の中央にあり、五層の樓閣尚仰ぐべし、三十町にして淺間温泉あり、土地高燥にして氣清く、東北山を負ひ、西南田圃を隔て〳〵松本の市街を望む、泉は無臭無味以て飯を焚き茶を點すべし、

梨花

湯上りの櫛千嬉しや風薫る

如泉

**姥捨驛**

汽車冠着山の隧道を出で〳〵姥捨に至る、驛前の眺望、他に比なし、屋代を中にして左右に幾村の人家散在し、千曲川より川中島のあたり長野まで、善光寺平一面の地視下に落つ、前面一重山を麓にして鏡臺山美しう聳え、今潜りし冠着山南に高し、山は古より名高き日本第一の觀月の勝區、形椀を伏せたるが如く半圓形をなす、驛下長榮寺あり、滿月殿を設く、二間四面の草堂なり、傍に巨巖あり、姥石と稱し、石に近く有名なる桂の樹あり、庫裡の一室を月見堂と言ひ、欄を設けて客の月を觀るに便す、堂に上りて遠望すれば、千曲の清流を隔て〳〵鏡臺山を仰ぎ、仲秋空清き夜、一團の名月其巔より登り、影水田に映して所謂田毎の月を現ず、

月夜よし田毎の數を小盃

如泉

姥捨山

**篠ノ井驛**

川中島は千曲川犀川の中洲を言ひ、篠ノ井驛實に其中央にあり、機山、不識庵の古戰場たるは、三尺の童子も之を知る、茶臼山、西條山、陣營の跡今尚互に眸睨す、武田信繁、山本勘助の墓また遺からず、行いて英雄を弔ふまた可ならむ、

**長野驛**

長野は海内著名の靈刹たる善光寺のある處、寺の左方一丘陵あり、城山といふ、



城山館あり、館は頗る眺望に富み、姥捨の絶勝、千曲、犀川の碧流、歴々雙眸の中に在り、

**田口驛**

戸隱山は主峯標高八千尺、飯綱、高妻、黑姫、妙高の諸峯に連接す、長野の西北凡五里、登路甚嶮ならず、山中奇巖怪石多く、老樹蒼鬱として日光を遮る、平維茂の鬼女を退治せし跡あり、

長野より越後に向ふ、田口驛より四一里赤倉温泉あり、地は北越第一の雄峯妙高山の東麓、海拔二千五百尺、北方遥に直江津の海を隔て、佐渡ヶ島を雲烟杳茫の間に望み、東北米山の山脈蜿蜒として長く連るを觀る、風光閑雅幽邃、人の多く知らざるを惜む、妙高山と黑姫山との間、地震ノ瀧あり、四層にして一ノ瀑十八丈、二ノ瀑十八丈、三ノ瀑十二丈、四ノ瀑六丈、水聲轟轟、大地震ふ、下深潭をなし、水烟四散雲霧を生じ、目爲に眩し耳爲に聾す、宜なるかな、河村瑞軒が稱して扶桑第一と言へることや、

**直江津驛　青海川驛　鯨波驛　新潟驛**

直江津は北越の要津、能登半島、佐渡ヶ島を左右に望み、直に日本海の怒濤を見る、西南一里上杉氏の春日山城址あり、これ當年不識庵の據りて天下を睥睨せし處、馳望爽快なり、泓泉あり、林泉寺あり、また遊子の捨つべからざる處、

直江津より柏崎に至る八驛、椏著海に瀕し眺望濶大なり、中に青海川驛附近を以て第一の勝景とす、地は米山の山脚左右に突出して、較々灣形を爲したる處、無數の危岩海上に巷布して、天然の巧を極め、佐渡の島山夢よりも淡し、次鯨波海岸景又佳、海水浴の適地として賞讃の聲高し、

新潟は信濃川河口の西岸、四百二十八間の萬代橋上に立てば、直に夏を忘るべし、佐渡ヶ島への定期汽船あり、「こいと言うたとて行かれよか佐渡へ佐渡は四十九里浪の上」但歌今笑ふに堪へたり、島習内地と異なるもの多し、行いて其俗を探るまた面白からずや、「鳴けば聞くきけば都の戀しきに此里すぎよ山ほと〻ぎす」黑木の御所跡に至りてこの御製を拜すれば、承久の古偲ばれて涙落るを覺えざらむ、順德院御在島二十二春秋、仁治三年三月、御齡四十六歳にて崩御あらせらる、御火葬所を直野陵と言ひ、別に直野宮に祀る、

**前橋驛**

啼く蟬も腸あらばたえぬべし

## 榛名の東面

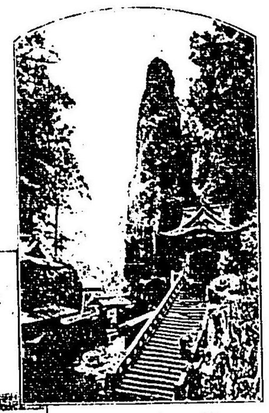
曉蓬

碓氷の東名山多し、赤城、榛名、妙義これを上毛の三山と言ふ、汽車高崎に至りて左右に岐る、右は兩毛線左は信越線、右して前橋に至る、赤城山は此處より東北六里、山頂數峯に分れ、中央の大輕水を湛ふ、大沼といふ、隱遁幽寂峯巒倒に影る、沼の南に赤城神社あり、山の中腹瀧澤に不動堂あり、堂後の瀧を不動ノ瀧といふ、高さ十六尺淙々として平源の中に入る、飛沫霏々として樹石皆潤ふ、前橋より馬車鐵道にて滝川に至り、それより二里にして伊香保温泉に達すべし、人家横れ喰屋に築かれ、乙樓甲樓の屋上に變え、層々相重なりて雜段の如し、温泉の噴口は吹上とて二獄の下なる溪間にあり、樋を伏せて各旅館の浴室に導く、伊香保

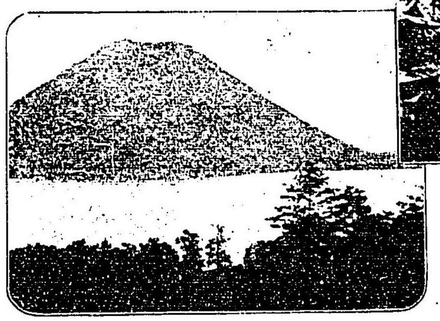
神社あり、物部山は町の東南に聳ゆる郭公の名所、所謂伊香保八景の一にして、全市街を眼下に見るべし、船尾山の南麓に鍋輪の城址あり、城は大永年中長野信濃の築く處、武田機山の雄略を以てして、尚五年を經て遂に拔くこと能はざりきといふ、二狀の麓に當年噴火の餘勢を殘したる噴氣孔あり、今其上に室を設けて人の游浴に供す、これを蒸湯といふ、浴閑一日の興として來りて體を蒸す人多し、

伊香保風吹く日ふかぬ日ありと云へど
あが戀やみし時なかりけり

伊香保に至りて榛名に遊ばざるは、尚寺に詣でゝ本尊を拜まざるが如し、伊香保より榛名神社まで二里半なり、榛名、伊香保は一山麓にして方面を異にす、卽ち南には專榛名山と稱し、北には伊香保嶽といふ、山中の湖は古の伊香保沼なり、而も今多く榛名湖と呼ぶ、この地一帶奇岩怪石甚多く、湖水の澈澄と祠堂の輪奐とは、益光彩を添ふ、加ふるに「草花や伊香保もどりの山つゞき」山間異草多ければ、夏季植物採集をかねて登山するもの多し、



伊香保



榛名神社

信州淺間の火山脈、蜿蜒東北に走り、其四處溫泉を湧出す、草津は其中に最名あり、熱湯坌涌の壯觀海內第一と稱へらる、輕井澤、豐野よりは道近けれど、交通不便なるを以て、前橋より馬車の便に由る人多し、道程十八里、地は四方丘陵を逶迤し捕盆狀をなす、海拔四千五百尺、空氣清冷、所謂高嶽の氣候自ら人體の療養に適す、四日根山あり、浴閑一日を倫みて登山す亦興多からむ、

高崎より左すれば磯部溫泉、驛は實に鑛泉浴客の爲に設けたるもの、北に碓氷の流清く、四に妙義の峯高し、名物磯部煎餅あり、妙義は磯部よりは二里、松井田驛よりは一里、山は白雲、金洞、金雞の三ツに岐れ、山勢奇秀、峭壁の削立、岩柱の巍峨、洞門の開通等、神槌鬼鑿も亦極まれりと盲ふべし、金洞の勝を以て最とす、山中の石門數を知らず、人の稀に至るもの十六門に過ぎず、多くは第四門に至りて、其嶮絕なるに怖れ、色然として踵を回すなりと傳ふ、妙義祠奧ノ院の傍、尖巖屹然として聳ゆるあり、鬆剝岩といふ、石階の蹴くる處路寬まり、鐵鎖に縋り、鐵梯に攀りて、蝸行猿攀、辛うじて絕頂に登るを得、四方の勝成萃る、而も人の能く佇立して、風望を恣にし得るものなし、僅に匍伏して自然の秘に觸る、

碓氷峠は坂東平野と信濃高原の通路にあたり、古來中仙道第一の天嶮と稱せらる、橫川驛に下車すれば、足は已に其山麓に立つなり、山路回轉曲折、登陟の難昇天の想あり、日本武尊東征の歸途、碓氷の坂に登り立ちて、遙に東の方を望みたまひ、三歎詔して「吾嬬者耶」とのりましゝは史に明かなる處、霧積溫泉は橫川、熊ノ平兩驛より共に三里、峯樹四圍を繞して翠色深き處村あり、霧積川の清流其間を貫流して風景幽雅、海拔三千八百尺の高地なり、

橫川驛より碓氷峠を度り、信の輕井澤驛に至る七哩の間は、我邦鐵道線路中第一の難處、アプト式鐵道により、十五分ノ一の傾斜線を登り、二十六の隧道を出入す、忽にして明、忽にして暗、一時間半にして二十六壹夜あり、輕井澤は碓氷の西麓高原の中に在りて、四面皆山を繞らし、樹は青く草は芳ばし、淺間山は萬丈の噴烟を吐きて遠く發え、釜戸岩、離山は峨々として近く對す、大氣新鮮飲水清冽、海拔實に三千八百尺、風に一味の冷あり、靜坐すれば輕爽を覺ゆ、都人酷暑に苦しむ時、此地偏に夏日の長きを愛すべし、淺間は有名なる活火山にして海拔八千二百尺、早くより其煙をたゝへて、富士と共に二名山と稱せらる、富嶽に登りしもの又此嶽を極めざるべからず、御代田驛より三里、



（磯部驛　松井田驛　橫川驛　熊ノ平驛　輕井澤驛　御代田驛）

汽車碓氷の隧道に入る

汽車上野を發して一時ならず大宮に至る、驛を下りて東北十二町大宮公園あり、園は氷川神社の境內、社は武蔵の守護神、素盞嗚尊を祭れる官幣大社、武蔵一の社と稱せらる、松杉相交りて天空を蔽ひ、櫻柳相掩して池沼を繞る、附近盛を以て名ある見沼川あり、また忘夏の一好地、

（大宮驛）

日光驛

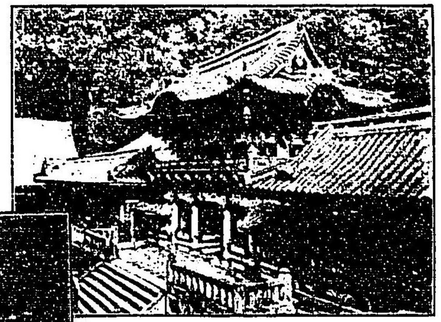
宇都宮にて日光線に乘換へ、所謂例幣使街道に沿うて北に走る、車の停まる處は卽日光町、自然の秀麗と、人巧の精華とを集めて、雙美の盛名を獨占す、人この山に遊ばずして、日に結構を語るなかれ、町を過ぐれば大谷川の急湍、左に神橋を望む、朱欄金珠、碧水に映じて綺麗繪くが如し、橋を渡りて左へ長坂を登れば、右に輪王寺あり、正面は四東照宮、元和二年家康駿府に歿するや、其遺骸を久能山に葬りしが、遺命に隨ひ更に北廟が茲處に卜す、朝廷東照大權現の神號を賜ふ、結構壯麗海內無雙なり、陽明門、唐門、廻廊、拜殿等、采畫の妙、雕刻の精、建築の壯、衆善美を極むるは今更

## 下聖の湯

めて說かず、二荒山神社、大猷院殿まで、遊覽者は案內者の口より詳しく說明せられむなり、

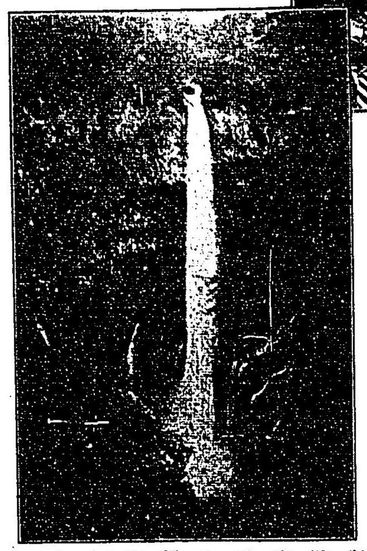
あらたふと青葉若葉の日の光　はせを

晃廟の拜觀終らば、翌一日を瀧廻りに費すべし、霧降、含滿、裏見、方等、般若、華嚴、布引、白絲、相生等、晃山七十二瀑の稱あり、中に最偉觀あるを華嚴とす、瀑は卽大谷川の源にして、中禪寺湖水の決する處、其初めて落つるや、一曲また一曲、之字の樣をなして流下する七八町、大岩缺くる處、天驟雨逸直下四十丈、草木震動して巖石碎けむとし、餘沫霧となり、蓬勃として槍嶺に上り、去つて雲となる、石間岩飛あり、水烟を破りて翻翔す、



陽明門

中禪寺湖は日光より四里、華嚴よりは十數町のみ、東西二里南北三十町、湖畔中宮祠あり、水光一碧拭へる鏡の如く、倒蘆の四山浮游の閑雲、洗洋として畫も亦及ばず、旗亭數戶あり、鱒を調理して客に勸め、船を泛べて湖心に至らしむ、



華嚴の瀑

湯本は中禪寺より三里、途戰場ケ原を過ぐ、原は夏期に至りて漸く春の時氣を得、數百種の花一時に開き、烟霞として花氈を連れたるが如し、御花畑の稱あり、植物採集の樂を有する人の必す行くべきの地、龍頭の瀑を見て湯本に至る、此地後に白根山溫泉ケ嶽を負ひ、前に湯湖の青藍を望む、湖畔の溫泉旅館、每歲陰曆四月八日より九月八日まで客を引き、其餘は家を閉して去る、地海面を拔くこと四千尺、盛暑客尙衣の薄きを恨む、

宇都宮より尙北して四那須野に下る、これより鹽原に至る五里、道路平坦なり「武士の矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」其荒漠たる篠原を過ぎて、關谷村の盡頭入將橋を渡りて、終に山に入る、「車を驅りて白羽坂を踰えてより、同願橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景初めて奇なり、これより行きて道あれば水あり、水あれば必す橋あり、全徑にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必す瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば必す熱あり、全村にして四十五湯、なほ數ふれば十二勝十六名所、七不思議一々探り得べくもあらず」とは紅葉の記するところ、大網、福渡戶、鹽釜、鹽ノ湯、畑下戶、



四那須野驛　黑磯驛

飛ぶものは雲ばかりなり石の上　はせを

稀川の清流

門前、須巻、古町、古湯本、新湯、これ溫泉場の重なるもの、稀川の清流迂餘曲折、其脈絡となりて、景物甚幽勝なり、

黑磯驛より四里那須溫泉あり、湯本、高雄、殷、辨天、大丸、三斗小屋、板室、これ那須七湯の名ある所以、北に活火山那須嶽あり、主峯を茶臼嶽と呼ぶ、直立六千四百尺、常に煙霧の上巔を望むべし、那須與市が扇の的を射る時、「別ては我國の神明、日光權現、宇都宮、那須の溫泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させたまへ」と念ぜしは湯本の溫泉神社なり、有名なる殺生石遊氣未だ亡びず、

白河驛　猪苗代驛　二本松驛

白河ノ關以北は古奧州の地、曠野百里に連りて天遠く山長く、山河草木皆島國の形態を脫して、大陸的風物の面影あり、「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く」と、能因に嘆ぜしたる白河ノ關址は、驛より三里、峯巒左右より逼り來つて僅に一溪路を通す、路傍白河神社あり、これ古關の址なりと、松平樂翁公建つる處の碑あり、白河の流潺々として古を語る、

白河城は戊辰の變、純義隊の會津兵と共に要守したる處、汽車正に其外壁に沿うて走る、關ノ湖は樂翁公の白河に城主たりし頃、士民偕樂の爲に修めし處、今公園となる、驛より南半里、

郡山にて岩越線に乘り換ふれば、一時半にして猪苗代湖を望むべし、湖中翁島あり、天晴れ風靜なる日、磐梯の山影湖心に映じて、山光水色畫くが如し、若松は戊辰の變一大悲劇の行はれし處、飯盛山に登りて、當年白虎隊最後の遺蹟を逍遙すれば「むざんやな兜の下のきりぎす」風淋雨打四十年、血は乾き骨は朽ちて、草蓬々と茂り蟲切々と鳴く、天いまだ秋ならざるに、遊子の秋露しげし、

郡山より尙北に向へば、二本松驛の邊右方に安達ケ原を見る、「みちのくの安達ケ原の黑塚に鬼こもれりときくはまことか　飯盛」春風秋雨幾百年、今この附近公園となれり、福島は仙臺に次ぎての都會、阿武隈川南に流れ、信夫山北に蟠る、山は驛より十六町公園なり、仰いで吾妻山の噴煙を望むべく、俯して阿武隈の清流を眺むべし、「みちのくの信夫文字摺誰ゆゑにみだれそめにし

福島縣　長岡縣　白石縣

我ならなくに」と、河原の左大臣に歌はれし文字摺石は、福島より東一里観音寺境内にあり、

文字摺の石の幅知る扇かな

飯坂温泉は福島より二里半、長岡驛より一里餘、摺上河畔にあり、河底巖龍石虎起伏し、水流相衝いて深々琴聲を聞くが如し、家屋は懸崖に據て建てられ構造妙を極む、瀧ノ湯、鯖湖湯、透達湯等あり、

白石驛の邊温泉多し、曰く鎌先、曰く青根、曰く遠刈田、曰く小原、遊子其選擇に迷はむ、

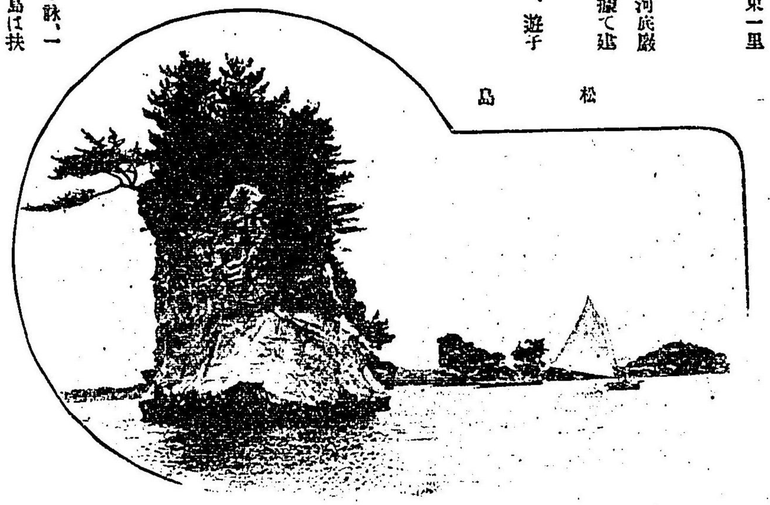
岩沼を經て仙臺に至る、仙臺は舊伊達侯の城市にして東北の鎮、廣瀬川を渡れば即青葉の城、これ曾て「さんさ時雨か茅野の雨か音もせで來てぬれかゝる」を歌うて、關北に雄視したる獨眼龍の經營したる處、瑞鳳寺内此英傑の靈像に對すれば、圖南の鵬翼を張らむとして、久しく扶搖萬里の風を待ちたれども、亦志と違ひ、空しく搏虎の腕を撫したりし怨、眉宇の間に閃くを見む、櫻岡公園、榴ヶ岡、青葉神社、政岡ノ墓、林子平ノ墓等遊杖の地多し、

岩切驛　松島驛

みちのくの榴ヶ岡のくまがつら
つらしと君を今日ぞ知りぬる

古の多賀ノ城址は、仙臺の次驛岩切の東南二十町、今尚往々にして古瓦を出す、堅緻鐵の如し、好古の士視に作りて珍重す、

天下有山水、各擅一方美、衆美歸松州、天下無山水、これ僧南山の詠、一時能く勝景海内に冠絶せるを言ひ得たり、「抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風景にして、凡洞庭四湖に恥ぢず、東南より海を入て江中三十里、浙江の潮をたゝへたり、島々の數をつくして、欲つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ひ、あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる、負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し、松の葉こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、風曲おのづからなり、其景色寥然として美人の顏を粧ふ、千早振る神代のむかし大山祇のなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆をふるひ調を盡さん」と芭蕉も奥の細道に說けり、其五山七浦八崎八百八島の晴好雨奇、雪旦月夕の勝概は、よしや一斗の墨を灑き盡すとも、尚よく寫し得ざるを憂ふ、凡我邦の東海岸太平洋に面するの地、怒濤岸を拍つて霧花を分たず、天清く風靜なる日も、波涙耳に喧しきに、曾此灣



松島



鹽竈驛

内のみ波穏にして鏡の如く、八百青螺の松翠影濃かに、白帆點々飛鷗低く飛ぶ處、宛然一箇の好盆栽、造化の技を弄ぶなんぞ極まれるや、五大堂、觀瀾亭、瑞巖寺、雄島等探勝の名地多し、遊子は先づ松島に下りたらむには鹽竈に出づべく、鹽竈よりせむには松島に至るべし、鹽竈には有名なる奥州一の宮鹽竈神社あり、

もしそれ此勝絶を雙眸の間に萃め、メノラマ的に觀望せむには、松島の四大觀あり、曰く多門山の美觀、曰く大高森の壯觀、曰く扇谷の幽觀、曰く富山の麗觀、中に富山を以て最とす、山は松島灣の北頭に屹立し、四近高嶺なきを以て眼界頗る廣く、海天一色遙に外洋に接す、遠きは相馬の諸峯眉黛の如く、左呼金華の山杳靄なからむとす、俯瞰すれば青螺錯落點々拾ふべく、十里の碧潭亦一泉池に異ならず、嶺上の大悲閣は、坂上田村麿の建立奥州三觀音の一、

逝ふことはいつしかとのみまつ島の
かはらず人を戀ひわたるかな

人丸

牡鹿半島の東側、苔海中に屹立する島山あり、「すべらきの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く」と、家持に歌はれたる金華山は即これ、五峯竝び分れて四十八溪谷、皆金沙を流す、頂上天女堂あり、石篤却を經て苔八重に厚く、松千年を過ぎて枝春秋を知らず、島の南端燈臺あり、晴天光十九海里半に達すべし、海中海鼠を産す、金沙を服したりとて金海鼠と稱し、乾して四方に輸す、金華山より船して江ノ島列島を廻り、十三濱に至れば、神劃巖の奇あり、萬石碌砢として層累森竪し、石壁海を劈て起る直立百餘仞、兩巖中裂十丈の門闕を排するが如し、知らず山靈海若、何等の刀劍を用ゐて、かゝる懸崖の絶壁を快斫するか、松島の偉麗、金華の奇峭を見たるもの、神劃の雄偉をのみ捨つべきにあらざるなり、

平泉驛

上國の戰塵飛んで到らず、東風占斷す九十年、白河ノ關以北縱横一百餘里、陸奥の黄金花咲く大野に盤踞して、其富王室に超えし、藤原秀衡父祖三代の治府たりし、平泉の榮華の春も夢のまた夢、今は唯一箇荒寥たる一村落、奥御館、伽羅御所、柳の館など今いづれに尋ぬべしや、嵐氣語らず、流水長へに逝いて、うたゝ遊子の腸を斷つ、

中尊寺はもと慈覺大師の開基、清衡に至り大に淨財を喜捨して、堂塔四十餘宇、附房三百餘宇を建立し、壯麗現美を極めしが、後世數災厄に遭ひて、寺塔大半烏有に歸し、

中尊寺杉街道

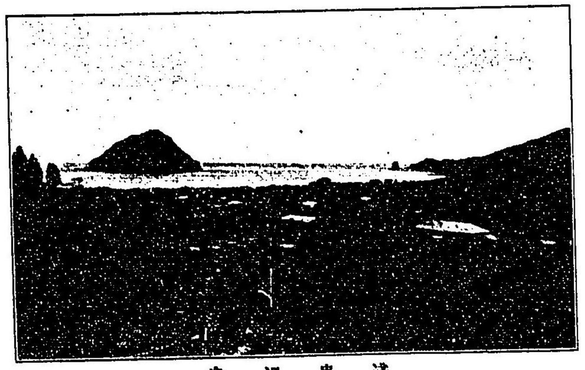
今は唯金色堂、經藏に昔の名殘を存するのみ、經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す、七寶散り失せて、珠の簾風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頹廢空虛の叢となるべかりしを、鎌倉の世願堂を建立し、德川の世勅して修復せしめ、明治の世二度保護を加へられて、千歲の紀念ながく其光を放つことゝなりぬ、

五月雨の降り殘してや光堂　はせを

義經の高館址は、金鶏山の東北に連なれる丘阜を占む、斷崖壁立し、下に北上の大河あり、形勢頗壯麗なり、堂あり、九郎の木像を置く、衣河のほとり阿部氏の衣河關址あり、頼義父子の安倍氏を討つや、貞任等得堪へず、城の後より逃れ落つ、義家衣河に追立て「きたなくも背を見するものかな、暫し引返せ物言はむ」と弓を彎して「衣のたては綻びにけり」と呼ぶ、貞任につゝふり返つて「年を經し絲のみだれの苦しさに」とつけたりけり、義家の絃空鳴して貞任を追窮せざりし千古の風流、今目の前に見る心地ぞする、

平泉の四二里遠谷の究谷あり、一大巖壁の屹然として峙つ、岩脚窟を穿ちて桁行八間の毘沙門堂あり、阪上田村麿の建立に係る、

これより三十町にして磐美溪に至る、



淺蟲温泉

殿美又五串に作り碎玉の瀑布といふ、磐井川の溪流衆瀾を聚めて漸く大、此處に至りて忽ち一峽の蹙むる處となり、怒つては濤となり、淀みては渾となる、溪背巖、赤松二三其上を裝ふ、天工橋上第を曳いて此風光に對せば、身の塵世にあるを忘れむ、正に木曾の寢覺と并稱すべし、

盛岡は南部氏の城市、仙臺以北第一の地、附近阿部氏の厨川の柵址あり、北上川に臨みて斷崖數丈巖壁尚存す、岩手山は南部の鎮山、形狀端麗、八面玲瓏として恰も倒扇の如し、これ奥ノ不二の名ある所以、盛岡より行程九里、登路三、瀧澤村口を以て最便なりとす、

時しらぬこゝも雪あり奥の不二

八戸は馬淵川の海口にあたり、東に鮫の港灣あり、三八城神社は市の北端丘陵の上にあり、松ヶ崎長く外洋に突出して翠松波に泛び、遠くは八甲田、十和田、階上嶽雲表に聳え、近くは馬淵の大河萬頃の田圃を貫流し、風景絵も及ばず、鮫は蕪島前に横はり、水清く魚介に富む、海水浴場あり、

汽車北を極めて青森灣に沿うて走る、灣頭淺蟲温泉あり、三面山を負ひて北嶋島、湯野島の翠を凝して波鏡に泛べるあり、夏は涼しく冬暖く、津輕の熱海は茲處なるべし、傳へ言ふ圓光大師遇々此地に來り、牡鹿の温泉に浴せるを見て

盛岡驛　八戸驛　淺蟲驛



效驗あるを知り、郷民を驅して浴場を開かしむ、これ北濱鵠なりと、

青森は北海渡航の名津、七月七夕の佞武多祭の奇觀を以て、善知鳥神社の靈異を以て、早く世に聞えし處、外ヶ濱の風光萃めて合浦公園より望むを得べし、

みちのくの外ヶ濱なる呼子鳥　鳴くなる聲はうとふやすかた　定家

八甲田山は中央火山脈の雄傑、青森の南七里、駒籠横内より之に登るべし、四絶温泉あり酸湯といふ、釜伏は舊噴火口、往時の活動尚見るべし、南すれば卽ち十和田湖、

十和田は羽後と陸奥の境にあり、日本奥羽兩線之を挾めり、日本線よりは三戸、奥羽線よりは大鰐、碇ヶ關、青森より八甲田に登りしものは直に南すべし、湖は約三里四方、汀線曲打出入して十灣の稱あり、湖面標高四百五十米、花部山、十和田嶽、戸來嶽、其周を繞り、北方更に八甲田群山の巍然として雲漢を摩するを見る、嘉美蔀島、甲島、鏡島、蓬萊島等、何れも古松を戴き翠風滴らむとす、近時稍此湖山の奇勝を說くものあれど、猶上下の困難を憚る者の如し、一徑の樵路寂寞の氣人に逼り、荊棘繁茂して歷絶えなむとす、されど一度湖畔に出づれば、村落二三炊煙迷離、湛々たる明鏡と對して幽邃の風致を極む、湖水下りて相坂川と爲る處、一大瀑布ありて魚道を斷つ、爲に久しく棲魚なかりしが、近時鱒、鮒、鯉を放生したれば、遊子また酒媒の憂なからむ、

弘前は津輕の舊府、市の中央丘阜をなし、喬木鬱葱たゝ處これ故城址、本丸は拓きて今公園となる、山光水色恣にするを得べし、長勝寺、最勝院は有名なる古刹、眺望また凡ならず、市の西北三里、津輕富士の稱ある岩木山、巍然として雲表に聳ゆ、項上の展望遠く北海道の島山に及び、遠山近海の眺比なく、中に旭日太平洋に昇るの光景を最妙なりとす、南麓百澤に岩木山神社あり、山項にあるを本宮とす、陰暦七月二十八日より八月十五日までは、所謂岩木山詣の期、懺悔々々、六根清淨、御山八代、金剛道者、一一禮拜、南無歸命頂禮の聲、笛鼓に和して、松明頂上に續く、

平川の流清き處、南岸に大鰐温泉あり、北岸に藏館温泉あり、大日堂の門外なる萩桂と稱する古木は、早く宣長の玉勝間にも見えて珍らし、阿闍羅山は大鰐の南一里、項に平地あり、窪池の狀をなし、小十和田湖の稱あり、山中往古三千の僧坊ありたりといへど今知るに由なし、馳望千里の勝あり、

碇ヶ關は津輕の南境、温泉あり、土地高うして大氣清く、山水の景亦見るべし、汽車碇ヶ關を出で、南すれば、先づ平川の溪流に沿うて走る、大鰐以南之を渡ること前後六回、道は次第に爪先上りとなつて、進んで矢立の山中に入る、これ陸奥羽後の境、海拔八百呎、隧道に入りては又出づ始終七回、水流之より北するものは平川、南するものは下内川、國道此間に通じて、溪流を渡ること四十八回、四十八川の稱あり、風曲上下豊尚暗し、而も旅客今室内に安坐して、又其峻嶮を覺えざるなり、車窓を開いて眺望すれば、老杉密樹蒼鬱として翠色滴るゝ處、水流深々として銀蛇走る、滿目の光景不覺夏を忘れしむ、峠を越えて下り入る處は卽秋田の陣場、

青森驛　三戸驛　大鰐驛　碇ヶ關驛　弘前驛　大鰐驛　碇ヶ關驛

# 米澤

福島より奥羽線に乘り換へ米澤に至る、元上杉氏の城市、城は即ち舞鶴城今松崎公園となる、中央上杉神社あり、不識庵鷹山兩公の靈を祀る、儉素力食の德風、今尙其恩を蒙るや大なり、赤湯驛の東十六町赤湯温泉あり、世に著聞す、浴閑白龍湖舟遊の樂あり、鶴脛温泉、高湯温泉へは上ノ山驛よりすべし、

山形市の東北四里、俗に山寺と稱する寶珠山立石寺あり、境内危石怪巖羅列して、洞窟を有するあり、圓柱をなすものあり、奇景實に愛するに堪へたり、山に入る深ければ、境愈峻にして景益奇なり、面白山、石橋、七滝之を山寺の三大奇景と稱す、道嶮なるが故に探る人稀なるは惜むべし、

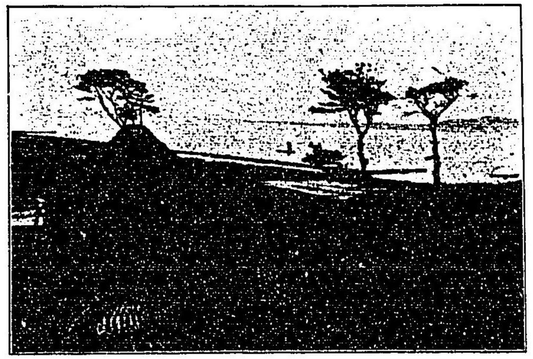
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲　はせを

月山は形狀臥牛に似たり、四時雪を戴き極暑稍斑紋を見る、湯殿山、羽黑山麓をなす、所謂出羽の三山なるもの、夏時參拜者山中に絡繹す、多くは羽黑を第一にし、月山を第二にし、湯殿山を最後にす、俗に三山縣越九里の稱あり、蓋雲霧松は、色心不二の曼陀羅を見せ、風聲水音は、聞聲悟道の眞言を唱ふ、雲の稚や霧の稜、一夜を山上に明して奇異を見ることありとも、唯先達の聲の如く勿言勿語、

雲の峯いくつ崩れて月の山　はせを

「五月雨をあつめて早し最上川」夏季水多く流急なり、大石田より酒田に至る流程二十二里、朝に發して暮に著すべし、左右山狹ひ蔓みの中に舟を下す、古口の邊兩岸四十八瀧あり、一瀑を過ればまた一瀑を迎ふ、大なるあり小なるあり、高きあり低きあり、或は潺々として樹陰に隱れ、或は巖石として巖面に露はる、白絲ノ瀧其名最聞ゆ、

最上川のぼれば下る稻舟の
いなにはあらず此月ばかり



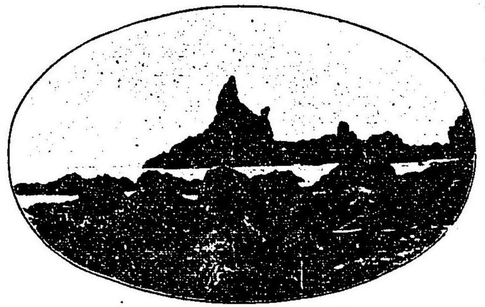
三倉鼻より八郎潟を望む

# 秋田

秋田は佐竹氏の城市、市の東北なる丘陵は即其址、今其一部は公園となる、秋田神社あり佐竹義實の靈を祀る、東に太平山あり、南に鳥海山あり、雄物川白練を曳くが如く、遠く日本海に入る、眺望東北に於ける公園中第一と稱せらる、太平山は市の東北四里、項上太平山神社あり、役の小角の草創にして、阪上田村麿の中興せし社なりと傳ふ、四望空濶遙に佐渡ケ島を雲濤杳靄の間に見る、山中鶏鳴瀧あり高十六尺、

八龍湖、男鹿半島、地僻陬に在るを以て、久しく世に知られず、勝景徒に漁翁草夫に委せり、今や汽笛一聲日ならずして此湖島に及ぶべし、粗三樹歌うて曰く、鴨村々下仙境を借る、嶮碧奇青海朝を出づ、崖樹陰冥にして老龍睡り、洋風空濶大濤驚る、窟は鮫殿を開いて黑うして底なく、石は龍身を卷いて天に橋あり、男子一たび男鹿ノ島を探りて、松州初て妖嬈に屬するを覺ゆと、まことや湖の又の名を琴ノ湖と言ふは、琵琶湖の勝に優れりとのことなるべく、芭蕉が松島は笑ふが如く象潟は怨むが如しといへるに對し、男鹿は怒るが如しとも言ふべからむ、

能代より南、地角斜に日本海に突出して、其端男鹿半島となり、更に土崎より北、地角の突出するありて、島と合はざる處僅に數百間、以て日本海の潮流を呑吐するもの、これ八龍湖、又八郎潟の名あり、東北第一の湖澤にして南北六里東西三里、



男鹿半島の奇巖

湖の風光は更に詩的の趣味を加へて一層の光彩を添ふ、春夏の交日華東天に匂ふ時、或は星女月明に羞づる頃、白氣空中に生じて、男鹿島かけて虹の如く、中に山川林丘、樓臺亭榭參差として人馬徂徠す、人呼んで狐館といふ、盂蘭盆の節の夜には、筑紫の不知火の如く、湖上無數の火光を生じて煙波の上に浮游し、明又滅、遠又近、曉に至りて止む、之を亡靈火と稱す、雨夜打魚の舟湖上に行くもの、燐光蓑笠を撲つて、之を揮へば益光を發すといふ、露伴が壯絶美絶又幻絶と喚賞せる亦宜なりと言ふべし、

秋田より北、大久保、五城目、鹿渡の間、汽車此湖に沿うて走り、うたゝ旅客の目を樂ましむ、鹿渡の四一里三倉鼻あり、湖の全景を總攬す、聖上嘗て鸞輿を駐めて風光を賞でたまひし處、

追分より天王村に至り、二百八十間の八龍の長橋を渡れば、男鹿半島の船越村、八龍神社あり、これより四脇木、船川、鵜ノ崎、小濱を經て門前村に至る間、奇勝應酬に遑あらず、本山は半島の神山標高七百米、門前より登攀一里半にして項上に達す、項上を俗に袴腰といふ、山容富士に似たればなり、赤上神社あり、廟前の大碑道皆巨巖を疊む、赤神の鬼を役して作らしめたるものと傳ふ、佐渡島は煙濤漂渺の間に隱見し、日本海の波濤荒き處直に露礁と相鬩む、壯快比なし、

男鹿半島巡りと稱するもの、門前又は小濱より、船を雇うて戸賀に至るものを言ふ、此間凡三里半奇巖怪石壓接に遑あらず、神工鬼斧の響も古し、中に菖蒲窟を最とす、窟は阿字ケ島の東方、直下十八丈の飛泉本山大瀧の近くにあり、窟前嶮壁駢立して屏風の如く、海濤相激して雲山を崩すに似たり、潜ぎ入ること半町窟口に抵る、高幅共に二丈餘、大石轟落人の帽冠に迫る、尙

進めば岩面玲瓏にして淵黄、陰寒の氣颯として肌を襲ふ、二十間餘にして砂礫あり、日光漸く微、二坑あり右は淺く左は深さ三十間餘、二人袖を聯れて進むべからず、火を執りて中に入れば泥あり脛を沒す、其奥窄くして極むることを得ず、遊子窟を探るや、伴ふ處の婦女側の島に上りて待つを例とす、女泣島の名あり、

戸賀より湯本温泉に至りて心神を慰めたらむには、更に勇を鼓して寒風山に登るべし、八龍の波光掌上に弄すべし、加ふるに南北の海洋茫々として際なく、心氣自ら濶大なることを覺ゆ、寒風より拂戸を經て八龍橋に歸り、半島一週茲に終る、

聲はすれど姿は見えぬそれかあらぬか蟋蟀
早苗雨とて慰しのばせて今は代田の落し水

（半島の曼多羅歌）

## 濱街道

**土浦驛**

關東の野に天の成せる一大望樓あり、名づけて筑波と言ふ、男體女體は其雙眼鏡たり、故山陪宮殿下の御經營に係る觀測所は男體社の傍にあり、海拔三千二百尺、四近之に次ぐの峯巒なきが故に、四望眼界甚大、八州の山川襟帶の勢ひ、全く雙眸の中に萃る、土浦驛より五里餘道路平坦なり、

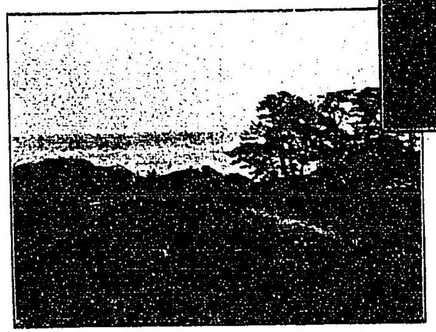
筑波根のこのもかのもにかげはあれど
きみが御影にますかげはなし

土浦は霞浦の西濱、長汀曲浦幾灣の風煙、佳趣窮りなし、舟を棹うて湖上の凉風を吸はむか、遠く富嶽の雲表に聳ゆるあり、日光山の煙外に峙つあり、近く筑波嶺の翠を凝して倒影を映ずるあり、帆船漁舟皆畫中の物ならざるなし、若しそれ汽船によりて鹿島香取息栖の三社に詣で、更に銚子の奇觀を探る又樂しき旅ならずや、

汽車仙波湖に沿うて水戸に入る、水戸は昔て東國文學の淵叢、英主に義公烈公あり、常磐神社威靈尊し、名士に藤田東湖あり、「表誠之碑」上市に見るべし、偕樂園は又常磐公園とも言ふ、烈公之を拓きて好文亭を園内に置く、結構古雅なり、地南に仙波湖を下瞰し、近く櫻山と相對し、遙に筑波加波の翠巒を雲際に仰ぐ、足水戸に至りて此園に遊ばざるものなし、

**水戸驛**

大洗海水浴場



勿來の關址



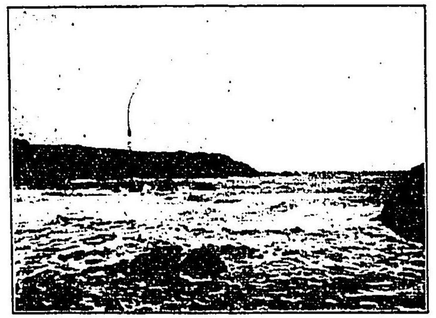
**助川驛　高萩驛　關本驛　勿來驛　湯本驛　中村驛　稻毛驛**

三ノ丸杉山通りの河岸より、汽船に乘じて那珂川を下れば、一時間にして祝町に達す、更に海濱を行くこと二十町にして、大洗の岬あり、海水浴地として名高し、岸上古松林をなして、苔老の態甚喜ぶべし、太平洋の波濤岸を洗ひて、白沫雪の如く飛ぶ、後山磯前神社あり、高深自ら神威高きを覺ゆ、社頭に立て旭日太平洋に上るを見れば、雲濤萬里直に暘谷に至るの感あり、社背平沙白く、矮松雜生して風景清雅、子ノ日ノ原といふ、「萬世を松に契りて今日までは子の日の松にひかれきにけり」と烈公の歌はれし處、碑尚存す、

水戸より岩沼に至る其間數十驛、多く海濱に沿うて走る、松青く沙白く萬里の海洋展望廣し、一帶の地近時海水浴場として世に知られ、夏期鈴蓙帽影絶ゆる時なし、助川、高萩の地、氣象游浴保養に適するを以て著はる、加ふるに山光水色の佳麗なるあり、世に第二の大磯と呼ばる、

平潟は風景を以て早く世に聞えたり、關本驛より十三町、地左右より岬角突出して關門の狀をなし、海水深く彎入して瓢形に似たり、右方の岬角、峭巖海に枕んで藥師堂あり、堂下波の洗ふに委せ、青松枝を交へて簾をなす、趣態愛すべし、左方の岬角、八幡神社あり、蕉路小碑あり、蕉翁の「ここのあたり目に見ゆるもの皆涼し」の句を刻す、山秀で水媚び一島一岬皆佳趣あり、狩野派の山水畫に對するが如し、八幡太郎の風流を以て名高き勿來ノ關址は、たる人は、其處より直に至るを便とす、地は小丘の頂にして古松翁鬱たり、樹間碑を立て覩らすに木柵を以てす、飛花鎧袖に落ちて將軍拂はず、馬を立てゝ「吹く風を勿來の關」と高吟したるはこの邊か、今唯櫻の化石に古を偲ぶあるのみ、

湯本温泉は湯本驛より三町、古來早く世に知らる、また夏期の一遊樂地、



銚子海岸

中村驛より二里にして松川浦の勝あり、海水彎入して長汀となる、江中岩礁星散し、其沙濱岸崖高下出入して、頗勝色を呈す、十二景の稱あり、全景收めて鵜ノ尾岬より望見すべし、中村より舟にて至るを得、濟波島影沙白く松青き處を行けば一華表あり、石階數十級を攀れば夕顔觀音の堂下に出づ、一望恰も一大庭園に望むが如し、右に遙く連山の青黛を眺め、左に近く大洋の白波を見る、眼前に碁布せる小嶼、時に帆影を吐き漁舟を呑む、堂後の一端斷壁直下數百尺、奔濤衝り碎けて白雨を作し地爲に震ふ、附近原釜海水浴場あり、又一勝地とす、

## 海岸

汽車兩國を發して千葉に至らむとして、途に稻毛の海水浴場あり、袖ヶ浦の海濱、矮松翠を凝して偃蹇沙上に俯仰し、小舞子の觀あり、芙蓉の秀嶺四に笑み、鹿野山、鋸

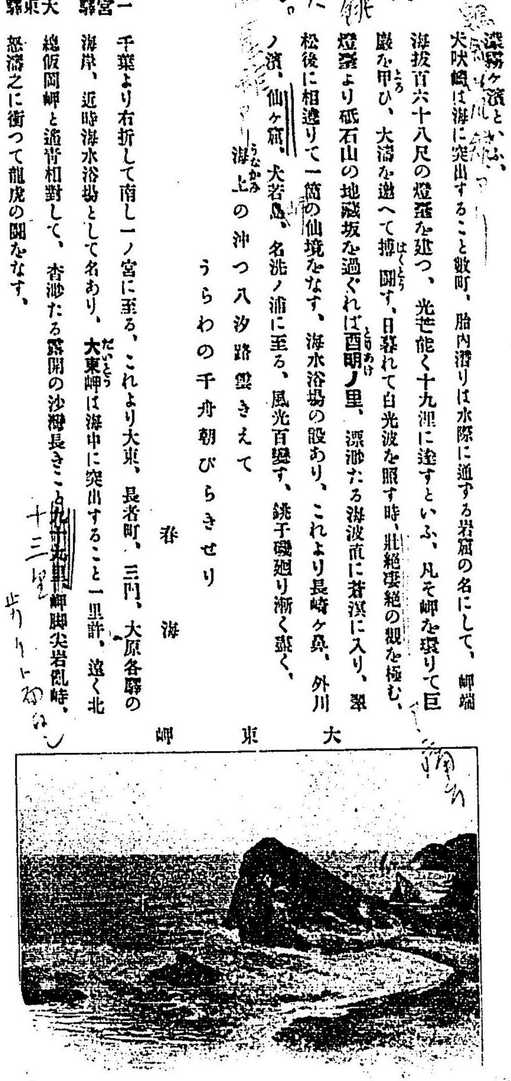
山南に聳ゆ、朝霞暮煙衆常に新なり、

**佐倉駅**　佐倉は成田鐵道の分岐點、宗吾靈堂、成田山新勝寺、小御門神社等、同線の名勝に遊ばむとする人は乘換を要す、佐倉より南して成東に至れば、駅より六町にして**渾切不動尊**あり、怪岩奇石重疊相倚り一大假山の觀あり、明王の堂其上に朱欄高く聳ゆ、登臨すれば兩總の山水雙眸に落ち、身已に世中の人たり、堂下鑛泉涌出す、以て浴すべし、

**成東駅**　兩總九十九里の沙濱の盡くる處を**飯岡岬**とす、南上總國大東崎より此處まで、海濱絶えて凹凸なく、渺漠たる平沙彎形をなして、恰も弓を張れるが如し、岬邊永井海水浴場あり、遙に**犬吠ヶ峰**と相對して風光畫に似たり、

**飯岡駅**　駅を去る二十八町、瀧郷村に岩井不動あり、弘法大師の手に成る、地は三面丘陵に圍まれ、老樹陰森たる間、四十八條の大湯小湯天外より落つ、滿山唯清涼一座を止めず、夏期浴して病を治するもの多し、

**銚子駅**　銚子は坂東太郎の海に朝するの口にありて、大日本東方の限たり、鹿島、香取、息栖の三社詣はこゝより汽船によるべし、霞ヶ浦に探涼の船旅をして、北上浦に出づる亦可ならむ、川口明神は圓福寺の背後、川口の方へ指出でたる仮貝根の丘上にあり、俯して川口を見るべし、七十幾里の長流、餘勢海に入りて流るゝこと里餘、鹹淡相闘うて波濤段をなす、高潮の時壯觀限りなし、川口の一ノ岩二ノ岩相距ること町餘、銚子の港門たり、東端女夫岬に至る一帶の海濱を平磯といひ、沙上文貝多し愛翫すべし、黒生浦の海中帆掛石あり海鹿島あり、一轉すれば背松白沙一望數十町、極端なる白色の高塔は燈明臺なり、此邊波荒くして白霧濛濛



犬吠ヶ峰

犬吠崎は海に突出すること數町、胎内潛りは水際に通ずる岩窟の名にして、岬端海拔百六十八尺の燈臺を建つ、光芒能く十九浬に達するといふ、凡そ岬を環りて巨巖を甲ひ、大濤を邀へて搏鬪す、日暮れて白光波を照す時、壯絶凄絶の觀を極む、燈臺より砥石山の地藏坂を過ぐれば**西明ノ里**、漂渺たる海波直に蒼溟に入り、翠松後に相邊りて一箇の仙境をなす、海水浴場の設あり、これより長崎ヶ鼻、外川ノ濱、仙ヶ窟、犬若島、名洗ノ浦に至る、風光百變す、銚子磯廻り漸く盡く、

**大東岬**

**海上の沖つ八汐路雲きえて**
**うらわの千舟朝びらきせり**
**春海**

**一宮駅**　千葉より右折して南し一ノ宮に至る、これより大東、長者町、三門、大原各駅の海岸、近時海水浴場として名あり、**大東岬**は海中に突出すること一里許、遠く北總仮岡岬と遙望相對して、杳渺たる霧開の沙灣長きこと九十九里、岬脚尖岩亂峙、怒濤之に衝つて龍虎の鬪をなす、

**大東駅**



**八幡岬**は大原の海岸に突出し、勝景を以て著る、岬頭八幡神社あり、祠邊松樹鬱生す、恒蓬矮小奇趣多し、南は太平洋の波濤萬里際涯なく、東は大東岬海洋を横斷して、鹽田浦の弓灣を護り、北は斷崖數百尺、此岬と相對して中に一小洋を抱く、數十の巖嶋巨鯨の口を開いて白馬の波を呑吐す、亦壯觀なり、

**大原駅**　**勝浦**は大原より四里、灣内一帶の海濱世に極濱と稱す、灣盡くる處、岡陵起伏し、蒼海と翠巒と自然の美を競ふ、遠見岬神社展望の勝地とす、海水浴地として知らる、

## 筑波山

### 上

**門司駅**　門司と一葦帶水對峙し、呼ばゞ將に應へむとするは卽ち門司、關門運絡船上、左顧右眄砲ノ海の勝に醉ふこと十數分、足は已に九州の咽喉に立つべし、想ふ十餘年前人煙蕭疎なりし一漁村、今や海に火船の來往織るが如く、陸に鐵車の著發暫も絶えず、駅より十六町和布刈神社あり、早鞆の海峽崛起し、潮水崖に激す、壇ノ浦、赤間關相呼應して風光佳なり、

**赤間駅**　赤間福間の邊一帶の林丘凡てこれ矮松、幹老い枝垂れて翠色滴らむとす、汽車此間を走りて清籟車窓の人を吹く、古より四宗廟の一として知られ、歷代の尊崇篤き香椎廟宮は香椎の駅より五町、仲哀天皇皇后と共に、熊襲を征討あらせられし時、行在所を置かせ給ひし靈蹟にして、宮居の址廟後の小丘に存す、廟は結構壯麗にして寂々たる林樹の間に嚴如たり、神功皇后を祭る、境内神功皇后御手栽の綫杉あり、

香椎驛　香椎箱崎の間、一水綫に流れて名島に至りて海に入る、川は多々良川、濱もまた其名に呼ぶ、尊氏西奔の時、肥後の菊池氏南朝の爲に、しば〳〵少貳大友と激戰せる處、名島の海岸帆柱岩の奇あり、元寇十萬の兵船、舷を連れて押寄せたるは茲處の濱邊、風光明媚の境、古を懷へば龍虎相搏ちし址、俯仰低徊うたゝ去るに忍びざらしむ、

箱崎驛　汽車箱崎宮の地に停まる、宮は應神天皇の胎衣を埋めたる神靈の地、廟前の箱松は即其靈蹟なり、廟の四邊大樹森然として幽高、苔滑かに塵飛ばず、海に向へる一扁額は「敵國降伏」の四字、實に醍醐天皇の御宸筆に成る、仰望襟を正さゝるもの誰かあらむ、宮の邊は千代ノ松原、滿目の赤松異態千萬、琴聲空に絶ゆることなく、松籟地に敷いて沙の軟かなる蒲團の上を歩むが如し、東は香椎灣に隣り、北は那多濱志賀島長く連り、西は博多につゞき、荒津の浦山近く、能古の浦唐泊まで遙に見え渡りぬ、元寇紀念館あり、亀山天皇、

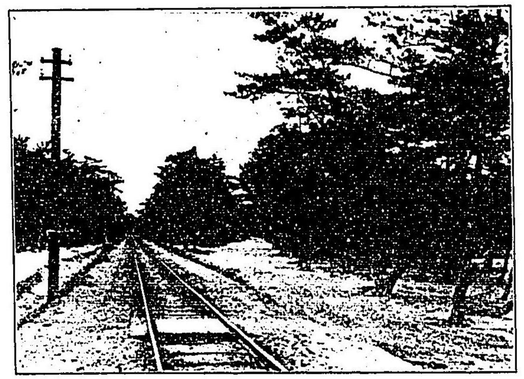
吉塚驛　僧日蓮の銅像あり、遊子暫く元寇の古に返らむ、

跡たれて幾世經ぬらむ箱崎の
しるしの松も神さびにけり

博多驛　博多は古の袖の湊、那珂川を隔てゝ福岡と隣し、今合して一の市となる、荒津山ノ公園あり、西公園と呼ぶは千代ノ松原を東公園といふに對せるなり、十里ノ松原、三十里ノ白沙、海ノ中道、志賀島、殘島等、博多灣の景勝悉く眸中に入り、遠くは玄海灘の荒波澎湃たるあり、筑紫不二の畫けるが如く浮べるあり、福岡の葵城赤瞩目すべし、驛より三十町、

雑餉隈驛　博多より二日市に至る凡てこれ太宰府の舊域、雑餉隈の邊水城の跡あり、天智の御世外寇に備へられしもの、元寇の時、この邊千騎萬騎來り犯せりと言へど、今唯堤の如きもの委蛇として走るあるのみ、築山と稱する小丘の邊、稻田の間大なる礎石を露はし、敗瓦片々狼藉す、これ太宰府の古址、北に都府樓のあとあり、南に府門の址あり、九州二島の政務を執行し、併せて對外の警備を司れる太政廳、當年の佛今何處にか求めむ、遊杖こゝに至りて斷礎を撫し、敗瓦を拾ふ、感慨いかに多しとはするぞ、都府樓纒岩に瓦色、觀音寺獨聽鐘聲、昔て菅公の吟詠に入りし、鐘四第一の大伽藍たりし觀音寺、朝夕の鐘聲尚當時の觀を改めざれども、輪奐の美見るべきなし、唯藏する處の什物は、凡て古澤を存して愛すべし、南都及下野に竝び建てられし戒壇院、これに隣す、

二日市驛　昔に聞ゆる天滿宮は今太宰府神社と稱す、二日市驛より三十餘町、大華表を入れば心字の池あり、石鼓橋を架す、大楠あり蟠蹲水に臨む、廟は壯麗雄偉を極む、梅樹あり柵を繞らす「東風吹かば匂ひおこせよ



千代ノ松原



梅の花あるじなしとて春な忘れそ」所謂飛梅は即これ、近時社背に遊園を開きて一段の雅致を添へたり、

久留米驛　鳥栖より四すれば佐賀長崎に至るべし、南すれば直に久留米、筑紫太郎の南岸、運輸の便に富む、川に臨みて水天宮あり、東京蠣殼町のは實にこれの分祠なり、寺町の迴照院に烈士彦九郎の墓あり、彼九州巡遊の途次、自ら殺して茲處に葬られしより、春風秋雨一百餘年、孤墳常に香華の煙絶ゆることなし、高良山は驛の東一里半、標高五百尺に過ぎずと雖、筑紫太郎流域下游の平野に屹立し、豐筑肥六州四通の交衝に當るを以て、兵家の最要害の地とする處、南北朝の時、菊池氏肥後より出でゝ毎に此處に陣し、以て太宰府を伺ひ、筑豐肥を制爲したり、山頂高良神社あり、神龜石は神祠の後阜より、周廻二十餘町の間、石疊を廻らすもの、構造嚴然たり、古史に磯城瑞籬と言へるものこれか、考古の癖あるもの須らく一遊を試みざるべからず、山上の展望甚開豁なり、久留米の次驛羽犬塚より三十町、矢部川に沿うて給小屋温泉あり、近時世に著る、奇勝耶馬溪に譲らずと稱する、日向神岩は大淵矢部二村の間、此の川の上流峽中を貫通して景を添ふ、驛より九里なり、

羽犬塚驛　木葉驛　植木驛　上熊本驛

水前寺

汽車肥後に入りて長洲高瀬を過ぎ、木葉植木の間に至れば、此邊凡て丁丑の役の古戰場、彼山此水一として血戰奮鬪の跡ならざるなし、中に田原坂と吉次峠は最苦鬪雄戰の地、四邊の草木今尚彈丸の疵を止むるものあり、坂上紀念の碑あり、木葉驛より二十町、有名なる山鹿温泉は植木驛より四里餘に過ぎず、

熊本は美田沃畝遠く連る平野の間に立ち、海を距る又遠からず、上熊本驛の西八町、發星山本妙寺あり、これ異域の兒啼を止めたる鬼將軍の靈を安んずる處、結構壯麗雄偉群俗常に埒咽す、今春三百年祭に、百萬の衆者四方より至りしは、尚忘れざる新事實に屬す、町に入れば京町奎に錦山神社あり、今春加藤神社と改む、地高うして全市の眺觀を領す、

銀杏城は丘に倚り、川を帶び、櫓櫓壁壘布置整正、久しく天下の名城と稱せらる、惜らくは丁丑の役甚く苟觀を損じたれど、孤軍固く堅守して五旬、潮の如く寄せ來れる薩軍の攻圍に耐へて、遂に挫折せしめたるを思へば、城の面目更に新なるものあるを覺ゆ、林泉の美風致の妙、岡山の後樂園と竝び稱せらるゝは、市外出水村の成趣園なり、一に水前寺といふ、庭園は敷寄を極め、富士の芝山の麓を廻れる一泓の湧泉、石寶より直ちに吹き出でゝ、甘美掬するに堪へたり、池水流れて園圃湖に入る、舟を泛べて湖中に

涼を納るれば、阿蘇の神山なんぞ早く我に來らざるかと招くが如し、

阿蘇は世界有數の活火山、近年大に活動の勢を增したり、夏期其靈異を研究せむが爲に、登山するものひきもきらず、熊本の東凡十里、車馬の便あり、山麓數鹿流渾の絶壁を見て、栃木温泉に一宿し、翌日登山するを可しとす、栃木は白川に沿へる渓谷の貓額地、空狹うして夏日短く、濕靈低迷して時に室中に來去す、鮎踏瀧の眺あり、こゝより噴火口まで登り三里道嶮なり、半途より上草木を見す、鞋底踏む處、焦石と爛沙とのみ、噴火口は名付けてミカドといふ、之を譬ふれば鞴の口の如く、煙霧旋上して森然たる柱を立て、萬雷地下に鳴りて、吾も山も坤軸と共に、微塵に粉碎し去られむとす、沙石靈あり、奔騰しては又墜落す、落つるもの騰るもの相鬪うて火を發す、凄にして壯、怪にして幻、魂飛び神驚くを禁ずる能はず、抑阿蘇火口の外輪たるや、北は長倉峠一帶の山脈を以て、東は豊後境上の連嶂を以て、南は大矢山冠嶽を以て、四は俵山二重峠を以て限劃せり、黒川北より四を繞り、白河東より南を繞てその缺處を衝き、やがて合して平野に流下す、今の火口は最新成のものにして中嶽と呼び、之を圍繞して、杵島嶽、烏帽子嶽、高嶽、根子嶽の四嶽あり、阿蘇の五嶽と稱す、五嶽の四周一帶の平原あり、北を阿蘇谷、南を南郷谷と稱し、今一町十四箇村無慮四萬の生靈を栖息せしむ、今この地勢を按するに、所謂五嶽を取捲ける連山は、一大噴火の障壁にして外輪山と稱すべく、五嶽は此外輪山の中に噴出する火口山なり、五嶽四周の窪地は火口丘と稱すべく、黒白の兩水は卽火口瀦なり、形勢の絶大かくの如きもの、坤奥廣しと雖、其匹儔を見すとかや、山中山麓温泉湯布數ふるに遑あらず、栃木より登りしもの多く宮地に下りて、阿蘇本宮に詣で、寶物を拜觀するを例とす、

我戀は阿蘇山もとの背つゝら
夏野をひろみ今さかりなり

熊本より南宇土は小西行長の舊地、城址あり、三角線の分岐點なり、三角は宇土半島の尖端、北有明洋を隔てゝ島原の温泉岳を望み、南不知火海を劃りて天草諸島の翠色を指點し、風光の美麗後第一と稱せらる、近時頓に海水浴地として著はれ浴客雲集す、附近赤瀬温泉あり、若しそれ汽船の便によりて長崎に至らむか、舷上瞬目する處は卽天草洋「雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮」遊子已に山陽詩中の人たらむなり、

球磨川の急流

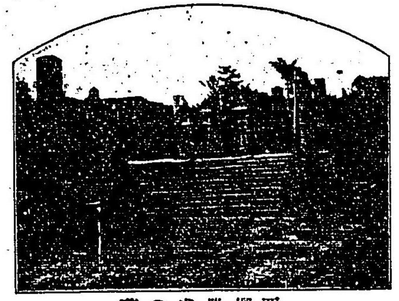




宇土より八代に至る途に有佐驛あり、これ明治の桃源境五家莊に至る道なり、五家は球磨川の源なる山谷を占め、方四五里に涉りて、椎原、久連子、椎木、葉子、仁田尾の五村となる、山峯重疊の中間に在りて九州第一の僻境なり、平家沒落の際、惟盛清經等の逃匿したる山なりとて、其傳說種々あり、行路嶮に交通稀なるを以て、言語風俗を異にし一見太古の民の如し、驛より十里、八代は日本三急流の一に數へらるゝ球磨川の海に朝する處、鮎を名物とす、松江城内八代宮あり、南朝史に隱れなき征西將軍懷良親王を祀る、金枝玉葉の尊體、かゝる西陲の邊陬に埋もれ給ひしを思へば、露ならぬ秋の淚ふを覺ゆ、構造華麗ならず、白木造の長き有樣養者襟を正さゝるなし、御陵は驛より半里、宮地村悟眞寺傍にあり、憑弔すべし、日奈久温泉は南二里餘、海に臨んで眺望佳なり、所謂不知火は實に八代海上の奇觀なり、遊子若し陰暦八朔の前後、幸に此地に至らば一夜を山岡に明かせ、五更潮の盈ち上り一點、又一點、陰火次第に數を增して、曙明には一帶萬點の連珠、海上更に闇なからむとし、夜白に從うて消沒す、觀者酒肴を携へて遠近より群集し、附近の山岡一夜大宴會場をなす、

八代より坂本、白石、一勝地、渡を經て人吉に至る、汽車は常に球磨川に沿うて走る、瓶風峭絲車窓の衣袂を背綴す、加ふるに奇岩怪石亂立して、奔湍虎の吼ゆるが如く、激瀨龍の躍るに似たり、身は車中に坐して三十三の急瀨をも俯瞰するを得べし、白石驛より二町、岩戸山の中腹に鐘乳洞あり、高さ五十尺奥行四十餘間、池あり神龍棲息すと傳へらる、

人吉は球磨川の東西に跨れる相良氏の舊地、城址は川の南岸、河水を利用して要害となせり、見上ぐれば城壁高く峙ちて、碧巒昔蘇一族の靈を湛へ、見下せば球磨の碧流岩に激して奔れる處、急渦滿々茫然として奔馬のそれかあらぬか、栖南谿、鹿兒島、津輕と井稱して日本の三名城とたゝへぬ、人吉神社あり、相良氏累代の靈を祀る、境内蒼洒幽靜松頭長へに天外の響を傳へ、蛙鳴時に社頭の寂を破る、



四郷隆盛の墓

人吉吉松間陸路十一里、車馬によりて加久藤を越えざるべからず、吉松より鹿兒島に至る、汽車は三時間餘のみ、

鹿兒島は西郷大久保の故郷、丁丑の役全市焦土となり、神社佛閣觀るに足るものなく、滿城の風物うたゝ寂寞を極むれど、天然の風致の愛すべきものあり、琉球灘の航路に當り、船舶の出入繁く、百貨輻輳して頗る繁華なり、城山は今公園たり、驛の西南十町なる山丘にして中に一凹地あり、岩崎谷と呼ぶ、これ三十餘年前、薩摩平人が刀折れ矢盡きて最後を遂げたる處、碑あり題して南洲翁終焉之地といふ、別に岩崎谷洞中紀念碑あり、後面翁の辭世の詩を刻す、谷の東北淨光明寺は翁以下の靈骨を埋めたる地、大墳小墳累々として相連り、香煙縷々として絶えず英魂を弔す、木像あり神采生動するが如し、地は錦江灣を隔てゝ櫻島と相對し、風光名狀すべからず、足鹿兒島に入るもの此處に至らざるなく、此處に至れるもの、また加治屋町なる南洲甲東兩

翁の誕生地を訪はざるなし、

若しそれ鹿兒島灣の風光は、曾く世に喧傳せらるゝ處「月雪のみるめのみかはさくら島濕の花咲くゆふべあけぼの」朝霧夕霧の蒸すところ、千態百狀の奇を呈して城内萬戸の眺に入り、海水濕靜にして宛然大湖の如く、浮ぶかとまがふ二三の小嶋散在して、勝景をあやなす、島の左右錦秀降神の氣の鍾たるは霧島山なり、鋼爪雄偉の勢の壯なるは高熊嶽なり、更に南美蓉芳麗の氣の美なるは開聞嶽なり、市の東の多賀山は市の全景と海の風光とを并せ觀るに宜しく、樹は老いて松籟又聞くべし、山の下を祇園洲といふ、生麥事件の時、英艦隊と戰へる砲臺の跡あり、

鹿兒島より二海里、船は遊子を櫻島に送るべし、櫻島嶽は土俗單に御嶽と呼ぶ、海の中心より屹立して天半に秀で、翠を疊み、碧を拔き、山路の妙、溪流の奇、言ふべからず、絶頂常に白雲を蒸發するが如く、煙氣の登るを見る、曾へば青漆の盤上に香爐を置くに似たり、山海の絶景秀麗無雙と稱せらる、登渉二里にして嶽に至る、夏期登臨するもの多し、山麓溫泉あり、

我胸のもゆる思ひにくらふれば　けむりはうすし櫻島山

國臣

## 下

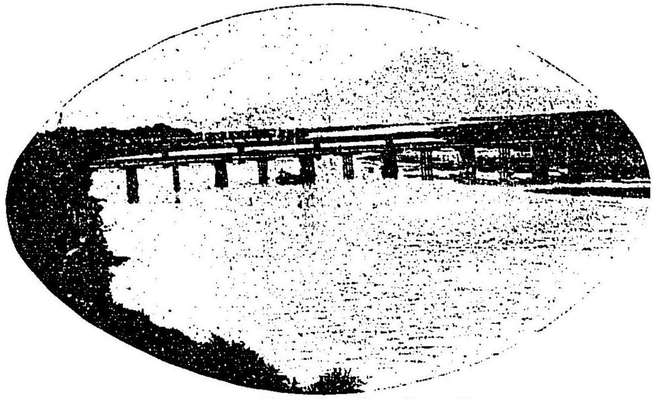
**小倉驛　中津驛　宇佐驛**

門司より鹿兒島に至る九州縱斷の勝は、既に說けり、更に途をかへて小倉より豐州線によりて南し中津に至る、地は山國川の河口、北海洋に臨む、奥平氏の舊城下にして、また三田翁の故鄉たり、山國川の上游山國谷の奇あり、頼山陽一度この地の奇勝を說き、耶馬溪の稱を命じ、「之を海内第一といふも或は諛ひざるなり」と言ひしより、天下の人皆之を知らざるなく、足九州に入るの人また之を訪はぬはなし、中津より山國川を溯る三里にして、始めて勝景に接するを得べし、それより英彥山の麓守實に至るまで沿溪七里、水兩山の相仄したる間を流れて、奇岩百出、春筍の亂立するが如し、土、石を載するものあり、石、土を挾むものあり、全石なるものあり、全石破裂して洞穴を成すものあり、兩石相鬪ひ、其一仆れむとするものあり、石數層累なりて夏雲の狀をなすものあり、而して樹、石罅より横生縱生して景を添ふ、一步に觀を異にし、二步に趣を新にす、峭壁の迫りたる處、穿ちて隧道を作り、溪水の激する處、落ちて瀑布をなす、宵村は馬溪十三村の關門、羅漢寺の石佛は奇巧の極、それより風知林、柿坂に至る間、步一步淺より深に入り、平より奇に入り、一曲は一曲より奇にして窮まるを知らず、誠に天然の一大傑作といふべし、

汽車宇佐に至りて停まる、驛より一里半、官幣大社宇佐八幡宮鎭座まします、古より朝廷の崇敬厚く、世毎に必ず一代一度の大神寶使を遣はし、三年毎に使を立てゝ幣を捧げ、三十年毎に太宰府をして神宮を改め造らしめ、國家の大事には使を遣はして之を告げしめ、伊勢と並べて二所宗廟とあがめられし廟宇、和氣清麿託宣の靈威は、國史の初步を學ぶ小學の兒童も熟く知れる處、宮殿は規模雄偉、結構華麗、老樹古木蒼鬱として陰をなし、頗る閑雅幽靜なり、俯仰閑に心を消して、思を千年の古に馳すれば、神威殿として尙座すが如し、



**鳥栖驛　佐賀驛　久保田驛　唐津驛　西唐津驛**



鹿兒島の風光

別府は溫泉を以て著る、宇佐より十二里、車馬並に汽船の便あり、地は豐前海に緣りて、山海の風光に富み、方數里地ある處必ず靈泉湧出す、其最著はるゝもの五、溫度百度より百三十二度に及ぶ、海邊の汀沙處々溫氣噴出す、浴客沙中に半身を埋めて溫煖を取る、これを沙湯といふ、又一興とす、

鳥栖より西すれば、やがて佐賀、鍋島侯の舊城下なり、松原神社は驛より南十町、藩祖を祀る、林泉の美あり今公園となりぬ、境内「嗚呼皆君子之碑」あり、これ實に明治七年の變、千秋の憾を呑んで斃れたる、藩士なる英雄、江藤新平以下の英靈を紀念するもの、命脈奇瞥、哀悼の意いかに深しとはするぞ、神野茶屋は閑叟公の遺愛、多布施川の清流を引きて泉池となし、林丘の趣頗る妙、天山の重巒復嶺また矚目の中に入る、驛より西北十町なり、

佐賀の次驛久保田より汽車北に岐れて走る、線の盡くる處は即ち唐津、小笠原氏の舊城址今舞鶴公園といふ、松浦灣に臨んで山海の眺望飽く時を知らず、北麓の近松寺は、元祿文學の花を咲かし、近松門左衛門の嘗てありし處と傳へられ、墓あり香煙絶えず、市の東松浦灣の長汀二里餘の間、萬松一路白波の上に翠を連ねて、玄海の清波に浮び、領巾振山の晴嵐に映ず、これいはゆる虹ノ松原若しそれ夕陽燃ゆるが如く海に映して、波爲に紅なるの時、海濱二里の沙地白く、井松萬株翠滴りて、紅白皆の色を重ね、虹ノ松原の唐津か、洵にこれ天下稱に見るの絶勝なり、近時海水浴客の雲集す

西唐津驛より二里、神崎に七釜の奇觀あり、全岬玄武岩より成り、斗壁側立、先端分岐して稍三叉狀を成し、其東なる叉の基脚に、七箇の横洞井列して窟を竝べたるが如し、いはゆる七釜とは、これ、波濕靜穩なるの日、皆舟を容るべし、西なる叉の基脚、亦二洞井列して内相通ず、裏側尙二三洞あり、神工鬼斧なんぞ極まれるや、これより北呼子港に至る間一里餘程、斷崖絶壁峭然として連續し、崖や壁や皆玄武岩、遊子をして思はず「日本にもフキンガル窟あり、巨溪の石道あり」と、絶叫せしめむ、此地筑

宛然たる二里の大虹をなす、唐津の虹ノ松原か、虹ノ松原の唐津か、洵にこれ天下稱に見るの絶勝なり、山は卑小なりと雖、海灣の眺望形容の辭なきを恨む、

音にきゝ目にはまだ見ず佐容比賣が　ひれふりきとふ君まつら山

領巾振山は佐用姬の故事によつて早く世に知られたり、

前志摩半島の茅屋の大門の玄武巖洞と、東西相距る十海里、遙に相對して自然の大觀をなす、

呼子港の前面、島あり波に浮ぶ、加部島といふ、田島神社内佐用姫神社あり、望夫石を存す、形女の衣をかつぎて伏したるに似たり、社前の眺望松浦灣一帶の風光を萃む、

呼子の西一里、一小海峽を隔つる海村は、豐太閤が征明討韓の行營を置きたる名護屋、これ當年五十萬の將士を出師せしめし處、侯伯陣營の址二里餘の間に散在して、規模の大今尚推知すべし、加部島、小川島、加唐島、馬渡島前面に竝びて、其間壱岐の島山を煙霞の中に望み、浦山の景觀雅に盡しがたし、九州に至る人唐津を捨つべからず、唐津に至る人又必ず此地を捨つべからず、

久保田より更に西すれば、武雄驛より七町、白龍山下武雄溫泉あり、嬉野溫泉は南三里、また此驛より至るべし、陶器を以て名高き有田は伊萬里線の分岐點、伊萬里灣の風光また愛するに足るものあり、有田より早岐に至れば、汽車更に北に岐れて佐世保に至る、

**武雄驛　有田驛　早岐驛　佐世保驛　大草驛　長崎驛**

佐世保は大村灣の外灣にして針尾島の西岸より北方に彎入す、往時の一漁村、今海軍鎮守府の地となりて、膨大夢の如きものあり、公園あり灣内の形勝を賞すべし、若しそれ平戸の七景を探らむには、此處より船の便あり、相浦は佐世保の西、一嶺脈を隔て、西南に向うて一灣を擁す、灣の左翼は畸形の半島にして、佐世保西方の屏障たり、灣内大巖小礁群螺の如く簇集し、翠松を挿して波鏡に粧奏を影す、俗に九十九島と稱す、凡相浦以西、佐々浦竝に平戸海峽の岸邊、到る處勝色ありと雖、相浦最人に推さる、

早岐より南、川棚より彼杵、松原、大村、諫早、喜々津、大草に至る間、汽車は風出せる海岸に沿うて走り、灣又灣、山又山、車窓の眺望うた〳〵遊子の目を樂しましむるものあり、これ卽ち大村灣の風光にして、大草驛附近最佳矚とす、

汽車長崎に至りて盡く、これ風光の美、氣候の溫、物價の廉を以て、外人に「世界の樂土」と激賞せらる〳〵の地、天文永祿の昔、西班牙、葡萄牙の商船、初めて來りて貿易を開きしより、此地久しく外國交通の唯一門戸たり、西方の文物消息皆此地を經由して入れりき、外人の筆この地に及ぶもの多く、日本を知れるものこの港の名を知らぬはなし、灣頭の風光愛するに堪へたり、夙に瑰浦の美稱あり、丘山海を抱いて三面を繞り、波穏にして盆水の如く、曾て海若の怒るを見ず、多少の島影また此間を點綴して、一帶の風色掬けるが如く、三十六灣二十四橋勝景盡くることなし、諏訪神社は長崎の產土神、山に倚りて殿宮門廊を架構し、石階を踏みて之に登る、殿宇宏壯林泉また美なり、洋醫シーボルトの碑あり、半生殆んど我國の爲に傾倒せしことを思へば、撫摩の情堪へざるものあり、

耶馬溪



祠隣の山、樹石亭樹の布置を加へ、開きて公園とす、市隨一の展望を備ふ、稻佐は露國人第二の故郷、西に稻佐嶽の奇峯聳えて、山上常に雲煙の輕飛を見る、夕陽美しく映じて景幾變、諺に七化といひはやせり、山の麓は岸廻り活曲り、長江前に湾りて、灣岸水磯各名あり、瑰浦第一の勝概とす、出島は和蘭人の愛重する獨立紀念の地、森崎大波戸の南なる沙嘴にして、島狀扇の面の如くなるを以て、また扇嶼の名あり、

この地、天正中吉利支丹宗門檢行して、十一所の天廟、美麗人目を驚かすばかりなりしかど、德川氏の爲に毀禁せられ、寺は悉く破却せられ、本尊は皓臺寺、大音寺、正寬寺、光源寺、光永寺の寺中に埋められぬ、稻佐の悟眞寺、桶屋町の光永寺、今籠町の大音寺、伊良林町の皓臺寺は、其反動として起れる佛寺、南清の僧又來りて教を垂る〳〵もの多く、興福寺、崇福寺、福濟寺、聖福寺、皆いはゆる南京寺なり、興福寺二世如定は、石を疊みて橋を架するの法を傳へたる人、太鼓橋若しくは眼鏡橋といふものこれ、聖德寺の梵鐘は異響あるを以て知らる、寺の北峯は卽女風頭、長崎の名物風揚は茲に行はる、

長崎の山からいづる月はよかこんげな月はえっとなかばい

獨山人

長崎より茂木に至り、船して小濱に至る、溫泉あり、これより三里にして溫泉嶽あり、諫早よりは十里、一日の路なり、山は又雲仙嶽とも稱し、九州三山の一、島原半島の鎭山、景行帝肥後の長濱の濱におはしまして、此山を覽、山形海島に似たり、陸に屬する山か、別に在る島かと、問はせ給ひきといふものこれ、項上漏斗狀をなせる熄火噴口を存す、海拔四千八百尺、肥山筑紫、有明、千々石の浩波千里、矚目雄大なり、溫泉は山麓二千二百尺の處にあり、夏期浴遊の客遠く上海、香港より來る、島原は山の東麓、直に海に臨んで風光佳なり、町の東北偏城址あり、これ寬永中天草四郎の據りし處、島原の亂これなり、定期汽船あり、肥後の三角に至るべし、

うんぜんや湯女塚に立つ女郎花

三千風

**函館**

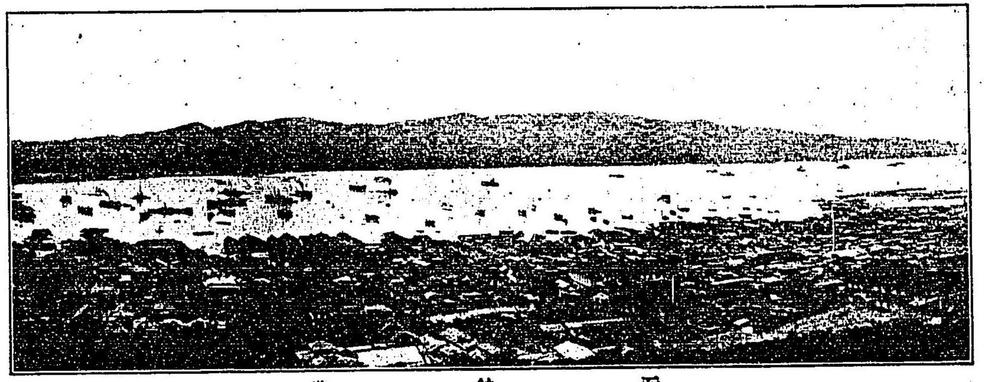
北海道は明治聖代の恩澤に浴し、榛莽芟られて都邑に變じ、荊棘拔かれて良田に化し、農商工業の進歩甚だ著大なるも、尙百事草創の新天地なり、故に堂塔伽藍の緣起を訪ひ、英雄豪傑の興亡を探るの勝蹟なしと雖も、海風の凉冷なる山氣の清爽なる、六千方里の山川原野、到る處好箇の避暑地にして、實に暑中の極樂なり、今其線路に屬する勝地の中、最も優秀なるものを左に紹介すべし、

青森より聯絡船に據り一水を渡れば北海道出入の門戸たる函館港に達す、函樽線成りて交通の便益道に被及せし以來、一般の商狀大に活氣を呈し漸次向上の傾きあり、市街は海岸より延きて風牛山の麓に連り、海は巴字形に灣入して波常に穏かなり、故に

又巴港の稱あり、函館公園は市内背柳町に在り馬鍬に擬れば値に十分間にして途す、面積一萬四千六百坪、花卉草木の美は言ふも更なり、園内に博物館、水産陳列所等見るべきもの多し、尙北方摺鉢山に登れば、烟波漂渺の間に黑煙を吐て出る汽船あり、白帆を孕みて歸る和船あり、光景鮮麗恰も一場のパノラマを望むが如し、湯ノ川温泉は當驛を距る約二里、湯ノ川村に在り馬鍬に擬れば約一時間にして同地に達す泉質硫化水素にして温度九十五度、溫質色を帶びて味ひ稍苦澁を感す、旅館は孰れも内湯を設け料理店を兼ぬ、晩涼一竿を携へて松倉川に臨み、鮎釣の遊を爲すもの多し、

函館を去り有名なる園田牧場を桔梗驛の右方に眺め、二千四百九呎の長隧道を潛れば、一碧玲瓏鏡の如き大湖沼の沿岸に出づ、當線第一の勝地として世に名高き大沼公園之れなり、沼は大小の二箇に分れ、大は東西二十五町、小は同二十町、兩岸相連りて瓢形を成し、其最も狹き處を「セメント」と稱し茲に鐵橋を架して汽車を通す、汽笛一聲此水郷を走るの時、駒ヶ嶽の英姿を東北隅に望むの風情、得も言はれざるの觀あり、此處に遊ぶには大沼驛乃至大沼公園驛の孰れに下車するも可なりと雖も、公園の方は天然の風致に加ふるに人工の妙を以てし、沼中無數の小島には、一々さゝやかなる木橋を架し、橋を渡り汀を繞りて彼此遊行するの便を設け、且つ旅館休憩所等遺憾なく備はれり、されど大沼より片舟に棹して奇巖怪石の間を經廻り、釣魚に心目を慰めつゝ公園に入るも又一興なり、若し夫れ萬朶花落ちて新緑風に飜るの時、八千八聲を下物に淺酌一番せんか、身は忽ち仙郷に在るの感あるべし園内に大山、東郷兩將軍の銅像あり、爲めに一段の光彩を添ふ、函館より内外人の朝に來りて夕べに眠り、翌曉家に歸るもの頗る多し、草菜沼は大沼を距る僅に五町、其周圍約一里、鱗族潑溂として沼中に躍り、斷蛙相累りて嶋嶼を成す、風光太だ幽邃なり、大沼に遊びて草菜沼を探らざれば、日光に詣でゝ華嚴の瀑を知らざるに同じとの評あり、以て其景勝の凡ならざる事知るべき也、

駒ケ嶽は鋭錐狀態を呈して驛の東北方に屹立す、海拔三千二百二十尺、一に渡島富士と稱す、大沼の景致美なりと雖も若し此の駒ヶ嶽の背景なくんば、



函館港



田子ノ浦に富士なきに等し、此山に登るには舟にて大沼を渡り其北岸よりする方趣味深しとなり、有名の噴火山なるを以て夏季内外人の登山を試むるもの多し、次驛森より室蘭に航行する小汽船あり、毎日一回雙方より出發す、此間値に二十四海里約二時間を費すに過ぎず、

二股驛　黑松内驛　比羅夫驛　倶知安驛　余市驛　小樽驛

二股川の上流に熊野温泉あり、當驛を距る約一里二十五町鐵道開通と共に浴客大に增加し、將來有望の溫泉地なり、

黑松内は函館間の中央に位し、本道屈指の都會たる蘇都町に四里九町を隔る要驛なり、又彼の追分節にて「恩路高島および」ないが、せめて歌棄磯谷迄」と唄はれたる、歌棄へ三里五町、磯谷へ五里三十一町を隔つ、孰れも乘合馬車の設けありて、汽車との聯絡至便なり、又蘇都港の西端に辨慶崎在り、昔源義經此地より滿洲に渡りたりと傳ふ、其後に辨慶の角力場と稱する土壘あり、周圍十餘間形土俵の如し、

齊明天皇の御宇阿部比羅夫舟師を率ゐて蝦夷を討平し、後方羊蹄山麓に政廳を置きたりとの事は戯せて正史に在り、故に此邊一體の地を其古跡と見做し、以て驛名をも比羅夫と命じたり、兎に角歴史家の探勝を値す、又山田溫泉は當驛を距る約一里岩雄別に在り、硫黄泉にして皮膚病に效あり、諸般の設備未だ整はざるも、山村の風俗趣味なか〳〵に深し、

倶知安は廣袤三十八方里、淡路一國よりも稍大なる村落にして、北海の新京都と謳唱する處なり、四通八達の衝に當るを以て村民協同事に當らば、尙一層の發達を見るに至るべし、後方羊蹄山は一名蝦夷富士と稱し、海拔六千四百尺、本道第一の高山なり、當驛より山麓の「ソスケ」まで五十四町、小西湖まで十町、駒返迄十八町、神泉湖迄三十町、絶頂迄五町、合計三里九町にして登山約六時間を要す、就中胸突二十二町最も峻嶮にして熱汗衣を徹し氣息喘々たり、山上第一落には御花畑あり、珍草奇木美を競ひ百花爛熳妍を爭ふ、實に天界の神苑なり、神泉湖は方十畝に滿たざるも清冽飲用に適す、更に登ること三四町にして噴火口に達す、周圍十三四町、怪巖峭立口底に蓄水あり、尙進むこと四五町にして大噴火口の東壁に達す、火口底に一小湖あり四時清水を存すといふ、若し快晴一天雲なきの日、絶頂に立ちて展望を恣にせんか、眼界一物の遮るものなく、本道の山川廣野は悉く眉宇の間に落つ、壯快言ふべからざる也、倶知安に蝦夷富士登山會なるものあり、毎年七月一日より九月三十日迄、登山者に對し種々の便宜を與へ、山上には宿泊所、途上には休憩所を設け抔歡迎甚だ恒到なり、故に鐵道にても此の壯遊を賞し、其便に供する爲め夏季往復割引券を發賣す、（倶知安驛を距る十五町字峠下に林鑛泉在り、炭酸冷泉にして天然ラヰムと稱す、胃腸病に效ありとして服用するもの多し、）

雲霧も神のいぶきに晴れにけん
世にあらはるゝ後方羊蹄の山

余市町は余市川に臨み尻岩岬其西方に突出し以て余市灣を形成す、戶數四千、人口二萬を有し海陸の産物に富み又苹菓の産地として名あり、海水浴場あり遠淺にして潮水常に穩かなり、

小樽港は本道西海岸第一の要港なり、内地諸港を始め、露領沿海州、薩哈連島及朝鮮諸港に航行する定期船あり、豆島狀態健全

にして伸張發展、門司、若松の兩港に伯仲す、小樽公園は市街花園町に在り、前に蒼海を望み、後に天狗山を控へ、眺望太だ開豁なり、炎日波に落ちて晩風新樹を渡るの時、口吟散策墓濤を拂ふもの多し、手宮驛の側らなる手宮工場の裏道に古き石室あり、其壁上に頗る畸形の記號を彫刻す、此の記號に三種の說あり、或は古代の墓碣といひ、或は古代の紀念碑といひ或は結繩時代文字に代へたる記號なりといひ、孰れが信なりや知るに由なし尙一說にはアイヌ祖先の遺蹟か若くはコロボックル時代の遺物なるべしとも云ふ、好古家の一覽すべき奇物なり、

**札幌驛**

札幌は本道の首都にして北海道廳の所在地なり、元茫々たる平原を拓きて市街を造りたるもの故、端より端に至るまで一の小坂だもなく、道路坦々として碁盤の面を望むが如し、官衙商店甍を聯れ、求めて得ざるものなき良都會なり、中島公園は當驛を距る二十町、本道第一の公園にして後に豐平川あり前に創成川あり、中島の名稱之れに起因すといふ、中央に池あり、水上及周邊に灑洒なる旗亭を設く、晏中の凉味推すべきなり、側らに四季花園あり各種の珍花奇草を蒐む、四時黃白の絕ゆる期なし、公園の一端なる物產陳列場の庭內に木材標本家屋あり、是れ北海全道に產する各種の木材を蒐め、寄木細工的に一家屋を建築せしものなり、西洋室に入れば壁面の下部には各種小片の板を張り、一々之れに其名稱を記し、以て木質色澤等を選むの便に供す、趣向甚巧なり、

**神居古潭驛**

札幌を去る數哩にして岩見澤に達す、此驛より幹線は北方旭川及釧路に進み、支線は南方室蘭に岐る、但し華は直ちに北方に向て驅せ尙幹線の案內を繼續すべし、天下稀有の絕勝と稱する神居古潭は石狩川の上流に在り（當驛は其巖角の一端に位す）兩山潭淵に迫りて峻嶮奇拔、碧水巖壁を衝て蒼潤磊落、忽にして山は雲を吐き、忽にして雲は山を飮む、變幻百出筆舌の盡す處に非ず、石上に踞して魚を釣る僉夫は仙人の如く、淸流に臨んで衣を濯ぐ村婦は神女に似たり、實に幽靜閑雅の別天地なり、彼岸に鑛泉あり溫度三十四度火力を用ゐて沐湯に供す、浴舍食勝粗なりと雖も、鄙臭き處に一興あり、

**旭川驛**

旭川町は上川原野の西部に位し、全道の中樞に當る都會なり、此地二十有餘年前迄は所謂無人の境なりしが、鐵道開通後急速の進步をなし、農商工業の見るべきもの多く、殊に十勝線、天鹽線の分岐點にして且つ第七師團の所在地なるを以て、旅客の來往

十勝高原の大風望



常に頗繁なり、當驛より約三十町許の處に神樂ケ岡あり一名旭ケ岡と稱し、離宮の擬定地なり、左右に御料地を控へ、美瑛忠別の二川其麓を繞り、山水明媚の勝地なり、

**狩勝驛**

茲より進んで十勝線に入れば山愈々深く谿壑々太く、各驛內には美麗なる木材の一山百文的に堆積するを見る、是れ郡人士をして垂涎三尺たらしむる處の名產なり、

本道の脊梁骨を形成せる十勝高原は、汽車旅行中稀有の一大奇觀なり、汽笛一聲狩勝驛を出れば、忽ち暗黑界の隧道內に入り、又忽にして天涯杳々たる光明界に出づ、是れ十勝石狩の國境を橫斷する山間線にして、實に北鐵線中の最高地點なり、廣大無邊の十勝高原は脚下に起りて遠く雲煙に連り、展望壯大風光秀麗、身は中天に飛行するの感あり、而して汽車は此の高原を右往左往、旋轉曲折して下界に進入す、愉絕快絕譬ふるに物なし、宜しく右に掲ぐる一片の寫眞に就き其實況の一斑を察すべきなり、

## 哭の男も暫しは雲の上人となりて越え來し石狩の山

**帶廣驛**

帶廣驛より約一里許りに途別溫泉あり、硫黃泉にして諸病に效あるも、未だ旅舍其他の設備整はずして浴客に滿足を與ふる能はず又驛より約二里、音更村より十勝石出づ、黑色あり斑入りあり、印材替玉其他各種の美術品製作の用に供す、近來散步を兼れ採拾に赴くもの多し、

**豐頃驛**

豐頃驛を距る約一里「ウシュベツ」といふ處に、興復社なるものあり、道は天保弘化の頃、二宮尊德翁が相馬藩に於て御仕法と稱し、荒蕪を開きたるものなり、今の社長二宮尊親氏は尊德翁の孫なりといふ、

**釧路驛**

釧路港は本道東部の要港にして前は海に臨み後ろは高臺に屬し、釧路川は市の中央に流る、函館、根室、厚岸等へ定期船の出入ありて、海陸產物の取引隆昌なり、春採公園は當驛より約二十町、市の東方釧路村に在り海拔八十尺面積三十萬坪を占む、南に太平洋を瞰下し、西に阿寒山を望み風光甚だ鮮かなり、春採湖は同所「チニップ」海岸に在り、瓢形の湖水にして源を春採炭山に發す、周圍に奇巖あり老木あり水深二十餘尋にして釣魚の遊に適す、アイヌ城址は市の東方約十四町、釧路村字茂尻矢に在り、寛政年間此地土人の酋長敵を防ぐ爲めに築きたるものなりといふ、冬季は四面雪に蔽はれ、其形ち神前の御供に似たるより一に御供山の稱あり、好古家の曳杖すべき古蹟なり、

釧路より岩見澤に戻り同驛より室蘭線に入り四五驛を過れば追分驛に達す、此地は夕張線の分岐點にして有名なる夕張炭山に入るの咽喉なり、本道に遊ぶ人は、必ず同炭坑の規模設備を一見するの要あり、途上瀧ノ上驛を距る約五町の處に夕張瀧あり、夕張川の急湍丈餘の巖壁より瀑落す、淙然轟然、水烟漠々として夏猶寒きを覺ゆ、晩秋に至れば兩岸の紅葉錦を飾り、又一層の奇觀を呈す、

**夕張驛**

夕張炭山は本道炭坑中の巨擘なり、其規模宏大にして一見目を驚かすに足る、炭山の見物を了らば再び追分驛に戻り室蘭行の汽

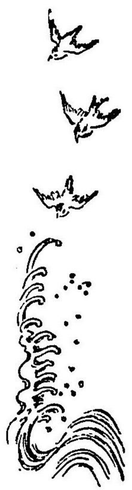
車に移乘すべし、途上錦多峯驛の北方約三里許りの地に一の高山あり樽前山と稱す、是れ明治四十二年四月初旬に大噴煙を起し、絕頂に堅横六百餘尺の饅頭形奇峯を噴出し附近の住民に一大恐慌を喫せしめたる火山なり、

**登別驛**

本道溫泉の白眉とも稱すべき登別溫泉は當驛より約一里二十八町、馬車に據れば一時間半にしてこの仙鄕に達す、先づ旅館に入りて靈泉に汗を流し、夫より湯元見物に到るべし、市街より溪路を辿ること約二町許りにして、右方に鋸戟を植ゑたる如き巖頭あり、劍ノ山といふ、其下に一條の清流あり白煙濛々として咫尺を辨ぜず、此邊一體を地獄谷と稱す、據氏七十五度と稱する熱泉は水底より巖壁より、轟々滔々怒號を發して奔騰し、淀みては池と成り、流れては川と成る、壯絕凄絕、地獄谷の名附し得て妙と謂ふべし、尙娟々たる石楠花の咲き亂れし山を登る事一町餘にして大湯沼あり、方四町許りの沼中に黑き泥土の沸々蔡騰する樣、恰も鼎中に黑漆の沸え返るが如し、又側らに鹽湯の池あり熱泉滿々藍色を帶びて溢溢す、其深さ幾尺なるを知らず、一見人をして此の世にも斯る不可思議のものあるかを怪しましむ、是れ皆此地溫泉揚の源泉にして孰れも樋を架けて市街に導き眞水を和して沐浴に供す、其鹽梅甚だ良好にして身心自ら爽快を覺ゆ、（旅館は皆內湯を設けて浴客の便に供せり）本泉發見の時代は確實なる記錄の徵すべきものなきを以て之を詳かにするに由なし、

**室蘭港**

室蘭港は函館、青森及森村（函樽線森驛）等に通ふ定期船の發着する處にして、又札幌及旭川方面に達する鐵道の起點なるが故に旅客の來往貨物の集散常に頻繁を極む、灣內水深うして船舶の碇繫に適し東南は丘陵連亙して風濤を禦ぐ、市街は海岸より背後の八幡山に延き、棧敷的構成なるを以て山水の眺望甚だ佳し、





# 廻遊旅行の計畫

本旅行の計畫に於ける豫定日數には旅客の出發點より勝地までの往復に要する日數を含まず

一三浦半島廻り　藤澤驛に下車、江ノ島、鎌倉の景勝を探り、逗子より金澤に廻りて八景を賞し、田浦に出で〳〵、橫須賀に至り、それより浦賀、三浦三崎の風光を巡る、此豫定日數三日、

一豆相溫泉廻り　國府津驛に下車、酒匂、小田原の風光を愛で〳〵湯本に至り、いはゆる箱根七湯を廻りて三島に出で、修善寺に至り、山を越えて熱海へまはり、伊豆山、湯河原をあさる、此豫定日數五日、

一富士登山　御殿場驛下車、御殿場口より登山、一夜を山嶽に明し、翌吉田口に下り、川口湖の風光を賞して大月驛に出づ、此豫定日數二日、

一富士中道十三里巡り　五合目の邊を一周するをいふ、小富士、小御嶽、寶永山、大澤等を巡り、展望大なり、此豫定日數二日、

一富士八湖廻り　御殿場に下車、山口湖、明見湖を見て吉田に出で、それより河口、西、精進、本栖湖を廻りて、富士の人穴を探り、大宮の淺間大宮に詣で、鈴川に出で〳〵浮島沼に至る、此豫定日數四日、

一田子ノ浦曲巡り　沼津に下車、千本松原、牛臥、靜浦一帶の海水浴場をあさり、田子ノ浦より吹上濱、薩埵山、興津の清見寺、江尻ノ龍華寺を巡遊、三保ノ松原に渡り、久能山へ廻り靜岡に出づ、此豫定日數三日、

一伊勢參宮　途中濱名湖辨天島假驛に下りて海水に浴し、一日を湖畔の名勝廻りに費し、蒲郡海濱の景を愛で〳〵熱田に詣で、名古屋の金鯱城を仰ぎ、龜山より南して大廟に詣で、二見浦より鳥羽港に至る、此豫定日數四日、

一長良川鵜飼遊覽　鵜飼に一夜の清興を得、大垣に至りて養老公園に遊び、琵琶湖の景を賞して京都に出づ、此豫定日數四日、

一畿內廻り　京都附近の名勝を探りて奈良に至り、それより三輪神社、長谷寺、談山神社、橿原神宮に詣で、吉野に南朝の古を泣き、紀伊に入りて高野に登り、和歌浦に遊び、引返して法隆寺に詣で〳〵大阪へ出づ、此豫定日數七日、

一皇陵巡拜　山城、大和、河內、和泉、攝津に於ける八十四所百十七帝の山陵を巡拜す、此豫定日數七日、

一阪鶴巡り　大阪附近の名勝を探り、阪鶴線により箕面公園に遊び、寶塚及有馬溫泉に浴し、舞鶴より汽船にて宮津に至り、天ノ橋立の絕景を愛で、陸路城崎溫泉に至り播但線に出づ、此豫定日數七日、

一播磨路巡り　須磨、鹽屋、舞子、明石の海水浴場をあさり、平家の哀を尋れ、いはゆる播磨名所巡りをなす、此豫定日數三日、

一嚴島詣で　まづ岩國に至りて錦帶橋の奇工を愛で、引返して嚴島に詣で、尾ノ道より汽船にて多度津に渡り、金刀比羅宮を拜し、高松より岡山に出で〳〵後樂園を見る、此豫定日數五日、

一九州縱斷　下關附近の名勝を賞して九州に入り、香椎、箱崎宮に詣で、千代ノ松原の松籟を聞いて博多に入り、二日市より太宰府の故址をもとめて天滿宮を拜し、久留米に彥九郎の靈を弔ひ、熊本に入りて鬼將軍の故城を仰ぎ、阿蘇の神山に登り、更に熊本より南し、八代より人吉まで、車窓球磨川の奇勝に驚き、鹿兒島に入り大西鄕の故鄕を見る、此豫定日數十日、

一九州橫斷　門司より小倉に至り、豐州線によりて耶馬溪の奇勝を探りて英彥山に登り、宇佐八幡に詣で、引返して小倉、鳥栖間の名勝を探り、西肥前に入りて佐賀を經、唐津の虹ノ松原、七釜、名護屋城址を巡覽し、尙佐世保より長崎の風光を賞す、此豫定日數八日、

一山陰廻り　舞鶴より汽船にて宮津に至り、天ノ橋立の絕景を賞し、引返して舞鶴より連絡船にて境に至り、夜見濱の風光を愛で〳〵松江に至り、出雲大社に詣で、引返して伯耆富士、船上山に登りて、倉吉より津山に出づ、此豫定日數八日、

一南海廻り　岡山より汽船にて高松に至る、途中小豆島の寒霞渓の奇を探り、屋島に平家の哀を偲び、白峯に保元の古を悲しみ、琴平に參詣し、多度津に引返して再び船して高濱に至り、道後温泉に浴し、高濱より宇品に渡る、此豫定日數六日、

一紀渓廻り　高野山に登りて和歌浦に遊び、汽船にて徳島に渡り、鳴門の大觀を見る、此豫定日數四日、

一峡中廻り　猿橋逆出磯を見て甲府に至り、御嶽金櫻神社に詣で、引返して鰍澤に至り、富士川を下り、途中身延山に參詣して岩淵に出づ、此豫定日數四日、

一木曾路越　諏訪湖畔の景を賞し、鶯尻より徒歩木曾路に入り、木曾川に沿ひて南下し、桟橋の古を偲び、寢覚ノ床の奇を探りて坂下に出で、中央西線により、途中虎渓山に遊びて名古屋に出づ、此豫定日數五日、

一善光寺詣　諏訪湖畔に遊びて、姥捨山の明月を賞して長野に入り、善光寺參詣の上、歸途信越線により輕井澤に至る、此豫定日數三日、

一北陸廻り　輕井澤より長野に出で、善光寺參詣の上直江津に至り、汽船或は徒歩にて、親不知子不知の奇勝を探り、魚津より汽車にて、途中山代、山中温泉に浴し、敦賀の風光を見て米原に出づ、此豫定日數八日、

一上毛三山登り　前橋よりまづ赤城山に登りて伊香保温泉に至り、榛名登山の上、妙義山に廻る、此豫定日數五日、

一北越廻り　郡山より岩越線により、猪苗代湖の風光を愛で、若松に白虎隊の古を偲び、喜多方より徒歩、新津に出で〜新潟に至り、歸途北越線、信越線の名勝に遊ぶ、此豫定日數七日、

一日光松島廻り　日光廟中禪寺の風光を賞し、更に松島に至り、歸途海岸線により、勿來、高萩、助川、大洗等海水浴場をあさる、此豫定日數六日、

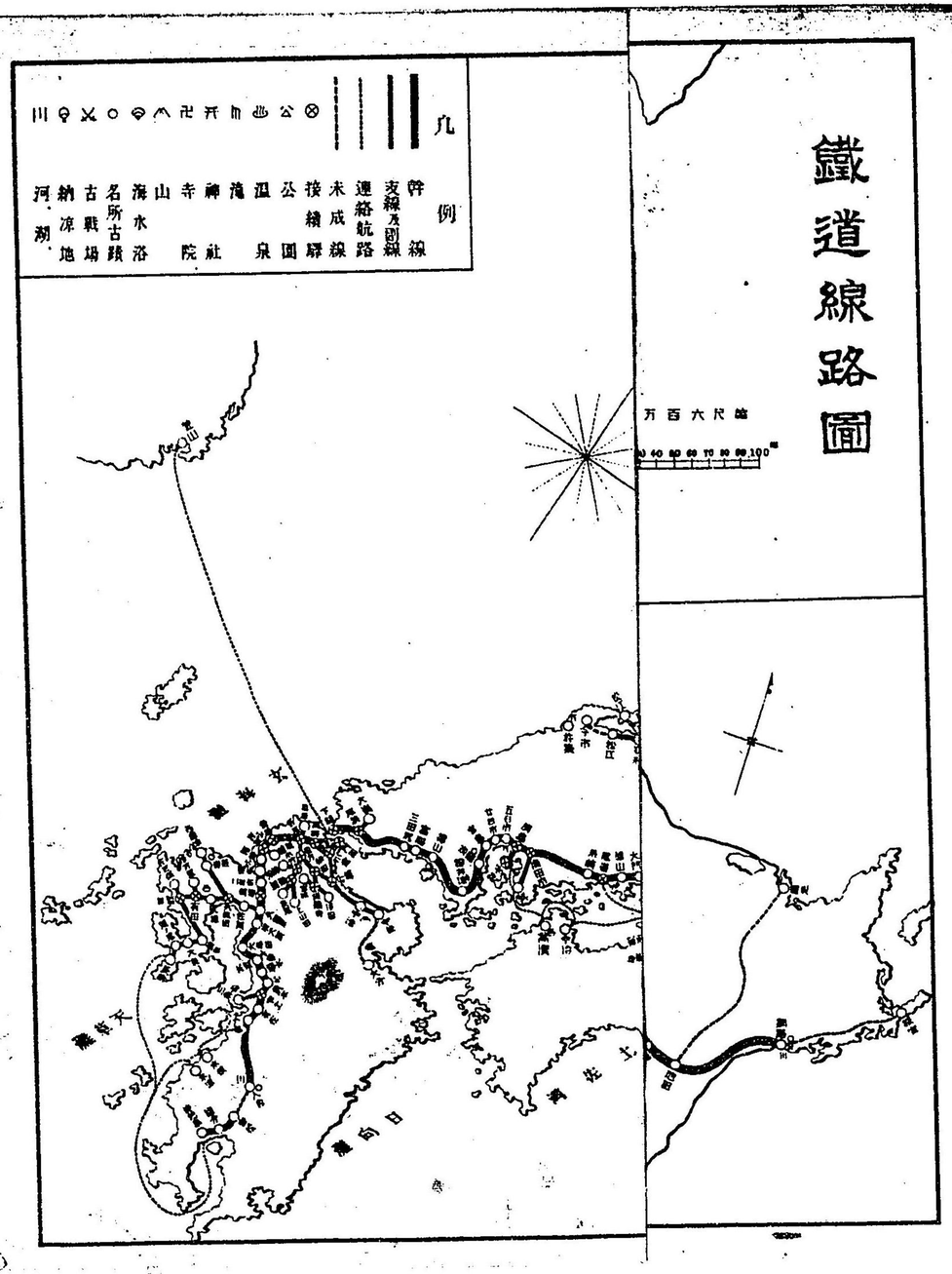
一奥羽廻り　福島より奥羽線により秋田に至り、八郎潟、男鹿半島の景を賞し、碇ヶ関より十和田湖を探り、八甲田山に登りて青森に出で、浅蟲温泉に浴し、平泉の中尊寺に詣で、松島に至る、此豫定日數八日、

一霞ヶ浦廻り　總武線により銚子に至りて磯廻をすまし、汽船にて息栖、鹿島、香取の三社に詣で、霞ヶ浦の八景を賞しながら土浦に上陸、筑波山に登る、此豫定日數五日、

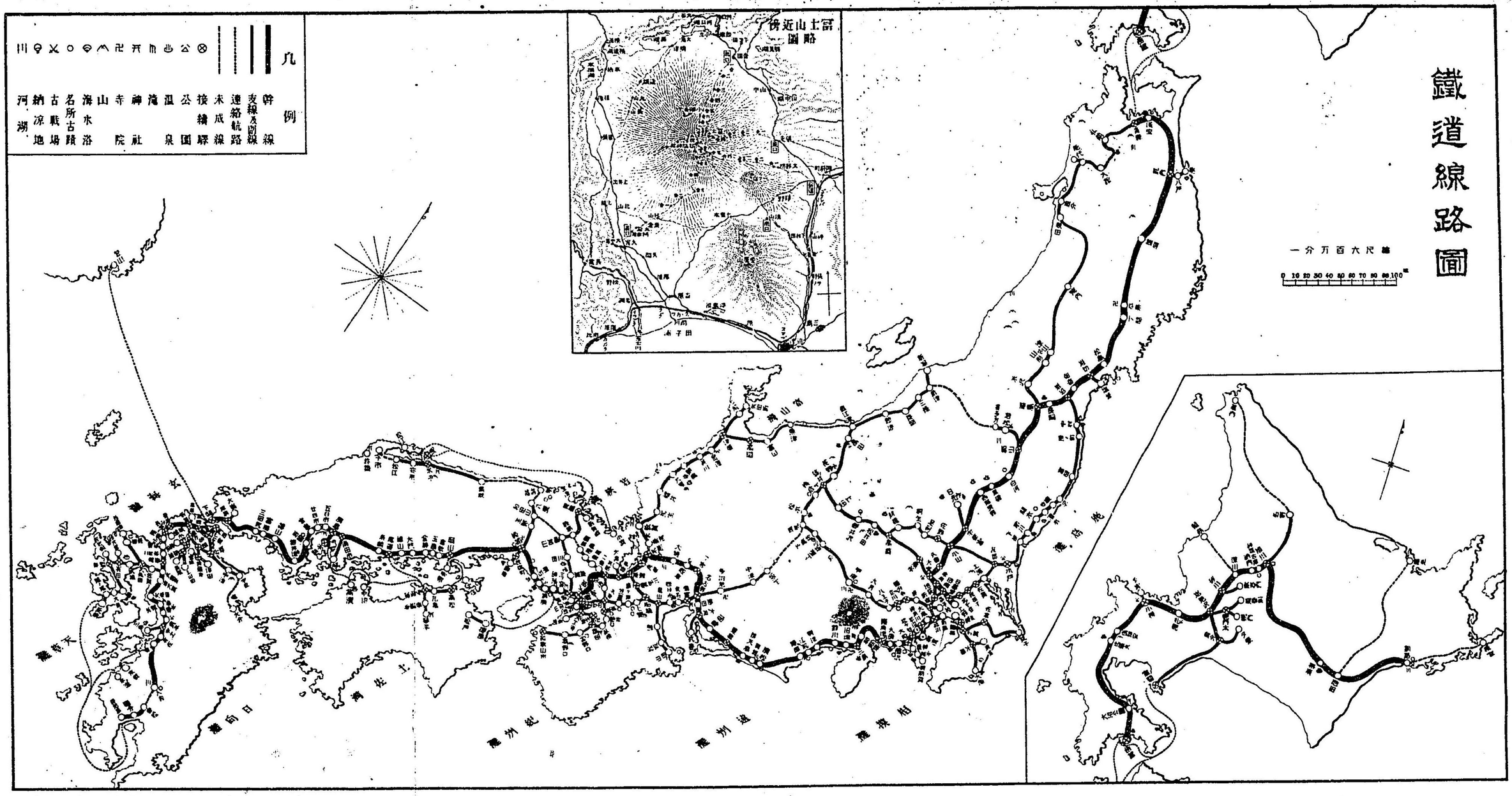
一房總廻り　稲毛、一宮、大東、大原各海水浴場をあさりて勝浦に至り、汽船にて安房の館山に至る、此豫定日數四日、

一北海道廻り　日本線に據りて青森港に到り、同港より聯絡船によりて函館港に達し、更に汽車に據りて大沼公園の優勝を探り、小樽、札幌岩見澤を經、神居古潭の奇觀に心目を慰して旭川に出で、茲より十勝に入りて、幹線の終點たる釧路港を一見し、再び旭川を經て岩見澤に戻り、同驛より室蘭線に入り、途上追分驛に下車して、夕張線に移り、夕張炭山の實況を視て又追分驛に引返し、登別温泉に浴して旅の疲れを醫し、出で〜室蘭港に遊び、室蘭より船にて青森港に歸る、此豫定日數七日、

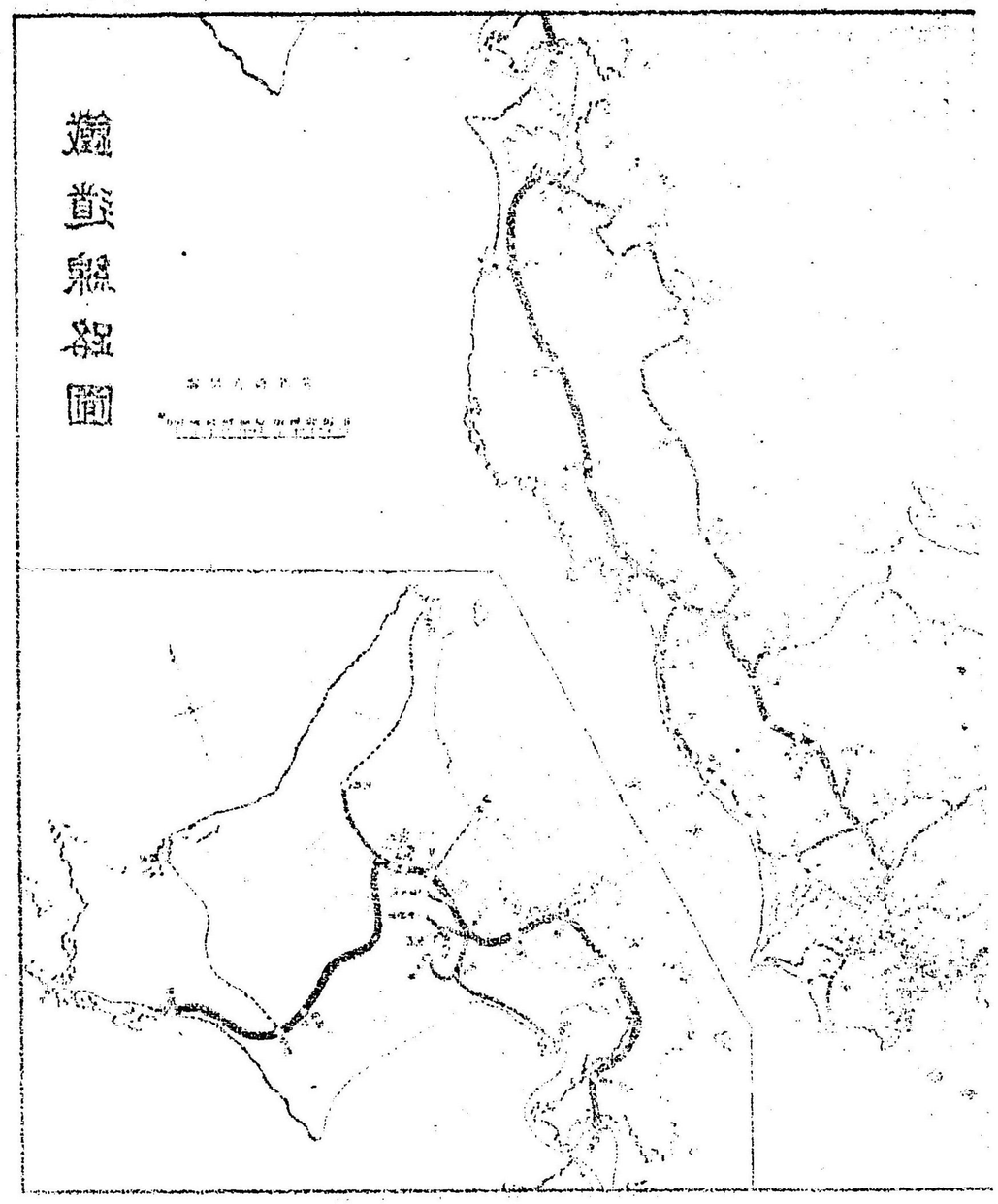





株式會社東京鐵地信版製造所印刷

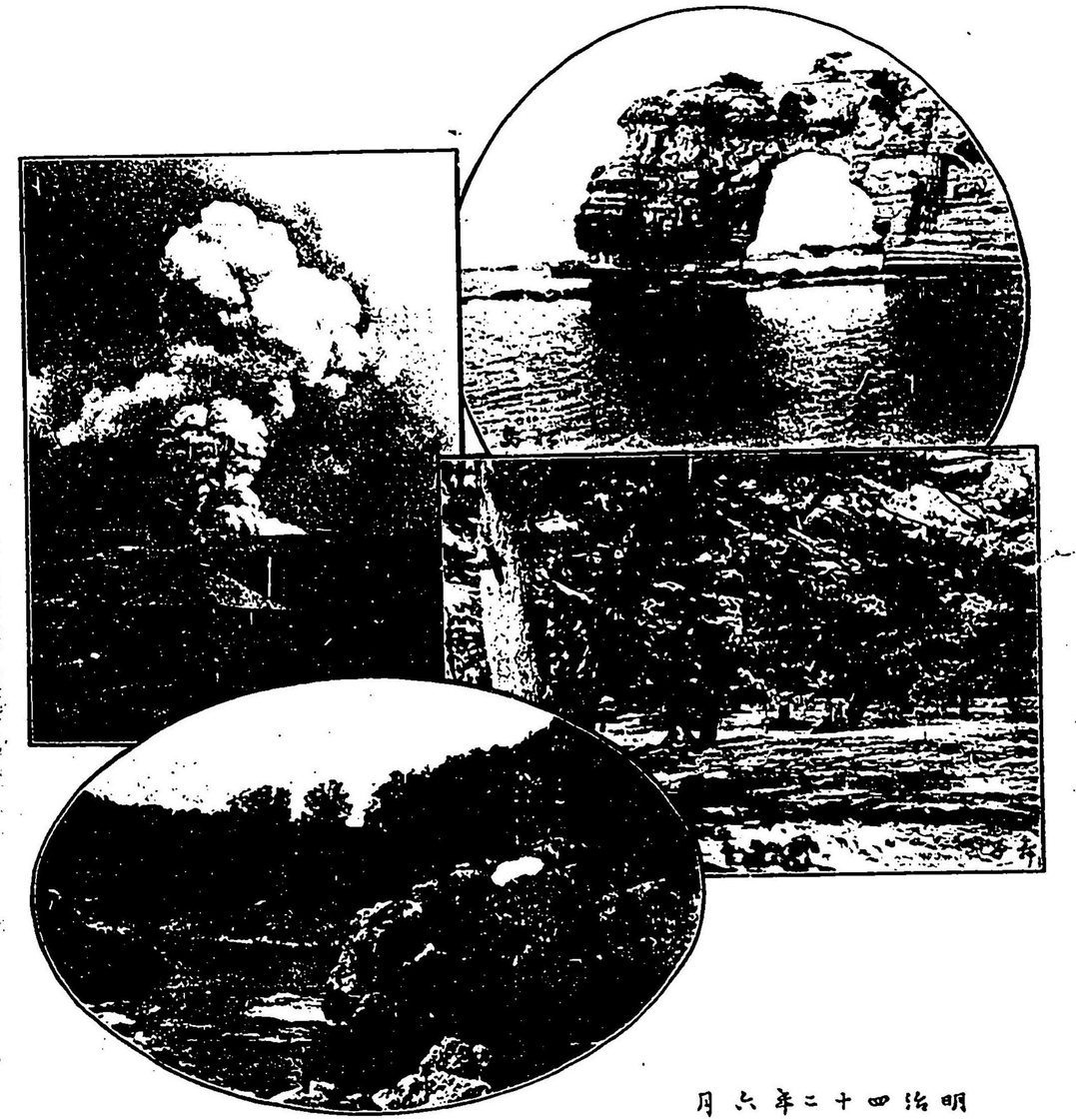

鐵道線路圖
一分万百六尺縮
凡例
幹線
支線及圖線
連絡航路
未成線
接續驛
公園
温泉
滝
神社
寺院
山
海水浴
名所古蹟
古戦場
納涼地
河川
湖
富士山近傍圖略

327
64




謹啓益々御清適の段奉賀候さて今般當院に於て院線沿道遊覽地案内編纂仕候に付一部供貴覽候片々たる小册子說くところ簡にして盡さざるものあるはもとより言ふまでも無之時炎威漸く募りて避暑旅行の御計畫はやく大方の胸中に來往するものあるを思ひ東道の一助にもと刊行を急ぎ候爲め選ぶところ粗にして漏れたる勝地も亦多からむと存候これらは以後刊を改むる毎に增補修訂可致考に有之幸に御旅行の參考とも被成下候はゞ本懷不過之候尙鐵道營業の儀に就ては常に諸般の改善發展に腐心し社會公衆の利便を圖るに汲々たる有樣に候へども國有後日尙淺く事志と伴はず世人の輿望に背くこと多きを恥づる次第に有之此點に就ては特に大方の忠言辛告に待つもの尠なからずと思考仕候に付自然鐵道營業上に關し御氣付の廉も有之候はゞ御腹藏なく御注意被成下候樣希望に堪へず候敬具

鐵道院運輸部
營業課　電話番號　長新橋六八一番
長新橋四八三〇番



明治四十二年六月

827
64

327
64

022703-000-4

327-64

鉄道院線沿道遊覧地案内

鉄道院運輸部

M42

ADB-0485